－－－－－羽虫－－－－－

　まだ初夏だというのに都心は真夏日が三日も続いていた。ヒートアイランド現象で陽が落ちても気温は３０度から下がらない。だからといって街は自らの活動にブレーキをかける事も無く、より多くの光と熱を吐き出し続けている。午後８時、俺の乗った電車は背広に汗を滲をませた男と化粧崩れした女でいっぱいだ。そういう俺も手垢まみれのパイプにうなだれ死んでいた。今日は最悪の一日だった。こんな猛暑に超高層マンションの窓ふきをたった二人でやっていた。それもこれも、一月前に入った新人のせいだ。今朝、携帯に『仕事やめます、すいません』というメール。すぐに返信したが返事はなかった。携帯も留守録、アパートに電話もなく連絡をとる方法はなかった。奴のやる気のなさを感じていた俺はいつかこうなると思っていた。代わりを出してもらおうと小林という上司に相談した。すると『自分で何とかしろ』と小林は逃げた。元はといえば社内の反対も聞かず奴を入社させたのは奴だった。小林に食いかかってみたものの聞く耳も持たずに会議があると事務所を出て行った。後でわかったが小林は新人の親に借金があり、利息の支払いを待ってもらう代わりに職に就かないバカ息子を引き取ったらしい。しかたなく細田という初老の男と現場に向かった。ゴンドラ免許を持っているから彼を連れて行くだけで、もう体力的に戦力にはならない。結局、大半の仕事を一人でやらざるを得なかった。

　電車がググッと揺れ窓の外に視線がいった。精気のない自分の顔が窓硝子に写る。目を背けたくなるほど情けない表情、なにをやっているんだ・・・にがい想いが唾液に絡みついた。三年前、父親のやっていた家業の掃除屋を嫌い、高校を卒業すると同時に上京し、もうすぐ二十一歳。最近、酒場の防虫電気で焼け死ぬ羽虫が自分の未来に思える。そのうち明るすぎる街の光に焼き殺される。焦っていた。しかし、そんな焦りも現実には何の意味をもたなかった。ただ生きる為、あれほど嫌っていた掃除屋で食いつなぐのがやっと。そんな無意味な日々が泥の川のように流れていた。

「奴らのようになりてえなぁ」

俺は昼間目にしたマンションの住人達を思い出した。川岸にそびえ立つそれは長引く不況にも勝ち続けた成功者が集うバビルの塔に見えた。被害妄想といえばそれまでだが、今の俺にはそんなうがった目でしか見ることが出来なかった。ある３０代前半の夫婦と女児の三人が住む部屋はまさに若者の理想の暮らしだった。ワックスの利いたフローリングにモスグリーンのイタリア製のソファー、膝丈ほどのシンプルなテーブルの向こうには５０インチの薄型テレビ、若い母親は見事なウエーブのかかった栗色の髪をかき上げファッション誌を捲っていた。亭主はキティのぬいぐるみと遊ぶ娘を横目に腕時計のコレクションを磨いていた。プラチナのリングをした母親の細い指が雑誌の中のモデルを指し

「貴方これどう？」

と亭主に意見（同意）を求めた。無論、硝子のこちらに彼女の声が聞こえるはずなどない、しかし甘える仕草は容易にその言葉を想像させた。そこには全てを手に入れた女の笑顔があった。

　また、ある部屋では６０後半の老夫婦がお茶を啜っていた。二人は黒光りする切り株の卓袱台を挟み向かい合う。どちらも背中もダンゴ虫のように丸め会話もない。じいさんはポケットから折りたたまれた鼻紙を取り出し目ヤニをふいた。ばあさんはじいさんをぼう

っと見た。その後、高そうな洋酒がずらりとならんだサイドボードの上に目をやった。孫らしき祭り衣装の子供を写したポートレートが飾ってあった。少し変色気味の写真から最近のじゃないと感じた。ばあさんが写真をちらりと見た後何か言った。じいさんはまたかとでも言いたげに嫌そうな顔をした。部屋の空気が諦めに淀んでいるように感じた。誰もが羨む暮らしをしているはずなのに。何故こんなに寂しそうなんだ？老夫婦のうつろな眼差しが理解できなかった。まるで生きたまま死んでいる様だった。

仕事も終わりかけた頃、４０過ぎの女に犯される１３，４の少年を見つけた。何故そこに男性器が存在するのかと思えるほど両性を同居させた未成熟で美しい肉体。女は少年の細い腰に巻き付き、一滴の精液もこぼさないとでもいうふうに性器をむさぼっている。少年は助けを求めるように喘いでいた。これも現実、愛など幻想と思える一瞬、女の髪のざわめきが、感覚に漂う瞳が、そして少年の性器を飲み込んだ女のたるんだ下腹の皺が俺を嘲った。仕事なんかやめてこのまま見ていよう。日差しが届かない部屋の奥で、白い足の赤いペディキュアの爪が怪しく宙を泳ぐ。熟れすぎた果実のようにたわわな乳房がだらしなく揺れていた。光景があまりに強烈なのか、それとも醜態すぎるのか、俺のそれも沈黙したままだった。

そして、いつしか瞼の重さに耐えきれず、記憶というスクリーンに幕がおり、車窓を流れ去るネオンとともに俺はまどろみの中へと沈んでいった。疲れたよ。

下車する駅のすこし手前、きついカーブに差し掛かる。列車はきしみその衝撃がシートを揺らす。睡魔の霧がスーと晴れていく、するとミニスカートで足を大きく広げたまま寝ている女がいた事に気づいた。緑と茶のチェックのパンツが丸見えだった。俺は目を背け小さなあくびを一つした。両腕を伸ばし立ち上がる頃、列車はホームに滑り込む。軽い空気音と共にドアが開き、寂しげなホームが目の前に現れた。眠気からさめぬ頭を首に乗せ、ホームに右足を置いた。さっさと降りろとでも言いたげに発車間近のベルがわめきたてる。車内に残っていた後ろ足を電車の中から引き抜いた途端、待っていたかのように背中でドアがしまった。俺は先頭車両の窓から頭を覗かせていた運転手を睨みつけた。運転手はそそくさと車内に姿を消し、すぐに電車は走り出した。苛立ちはホームに置き去りにされた。その時、どこからともなく鈴虫の鳴き声が聞こえてきた。涼しげで澄んだ音色。目を閉じた。我に返っていく自分を感じた。

「ありがと」

鈴虫に礼を言い改札に向かって歩き出した。見慣れた乗客の背中が前を歩いていく。

途中、都心の塾に通っている小学生と一言二言言葉を交わした。どこに住んでいるのかも知らない、ただ時折電車の中でたまに話しをする。少年の悩みはあまりにも深刻で誰がこの少年を救ってやれるのだろうといつも思った。しかし俺がアドバイスできるわけもなく、結局最後は適当に言葉を濁すのか常だった。大体少年自身、俺の答えなんか待ってはいない。恐らく口寂しいとき噛むガムのような存在でしかないのだろう。またそうであってほしい気がした。

改札を出ると駅に程近いコンビニの前にさしかかった。夜の弁当を下ろしおえたトラックが動き出そうとライトを点灯しエンジンを吹かした。俺はその前を足早で駆けぬけた。

トラックの運転手がクラクションを鳴らした。かまったことじゃない。振り返らずに水銀灯に照らされた道路を黙々と歩いた。道路脇に大きな公園が現れた。この公園を横切ると俺の暮らすマンションへ近道になっていた。都心のベッドタウンによく見られる赤いカラーブロックの広場。中央には大きな噴水、そこから放射状に伸びた道路の向こうには、ドミノのような巨大な賃貸マンションが幾重にも立ち並ぶ。芝生で絡み合っているカップル、それを木の陰で覗く何人もの浮浪者、いつもと変わらない光景がそこにはあった。帰路の空白の時間、ただ足の進む方向に体を運ぶだけ。意識して歩いている人間などどれほどいるのだろう？

白壁の賃貸マンションが夜の星空に浮かんでいた。同棲する彼女が数年前に借りたものだ。俺は転がり込んだ居候でしかなかった。彼女の名は飯田百合、証券会社で働くＯＬ、もうすぐ課長と噂される仕事の出来る女だ。そんな百合との暮らしももうすぐ１年が過ぎようとしていた。俺は薄暗い階段の登り口の前に着いた。築１５年５階建てのマンションにはエレベーターがなかった。上り下りを嫌った住民の多くは１階から３階に暮らしている。そして４階より上は得体の知れない会社の事務所として使われていた。なのに俺たちの住まいは５階にあった。何で５階にしたの百合に聞いたことがあった。なんでも前に住んでいた所が一階で、夏窓を開けて寝ていたら変質者が百合の顔を覗き込んでいたらしい。大声を上げると幸い何もせずに逃げたが、その時の恐怖からあえてこのマンションの５階を選んだと言っていた。俺は最後の力を振り絞って５４段の階段を登っていった。踊り場から２件目に暮らす部屋があった。玄関のドアを少し開けると、既に百合は帰っていた。何かロずさんでいるのが聞こえた。バッグを壁に掛け奥の部屋のドアを開けた。百合は膝の上に猫のぬいぐるみを抱えて座っていた。
「おかえり」
俺の帰りを待ちわびていたのだろう。すでに夕食の仕度を整っていた。
「ただいま」
疲れていたせいもあり部屋に入るやいなやジュータンに足を投げ出した。
「よかった、遅くならないで」
百合は、子犬のように飛びついてきた。こんな風に迎えられるのは照れくさいが内心期待もしていたりする。
「さあご飯食べよ、今日は焼き肉にしたの。それも霜降りよ、松坂牛とまではいかないけど輸入ものじゃないのよ。ほらここ見て極上ロースってシールが張ってあるでしょ！」
百合はその極上とやらを、闘牛士の赤い旗の様に俺の目の前を何往復かさせ、無邪気にはしゃいで見せた。
「いい事でもあったの？」
「近ごろ、元気ないでしょ、だからちょっと奮発したの」
最近、無意識に深いため息をついている事がある。しかし指摘されると認めにくいものでとぼけて見せた。
「そうか？」
「そうよ」
百合は試合開始とでも言わんばかりに腕をまくる素振りをして鉄板の電気を入れた。鉄板

の上に乗せられた脂身の油が飛沫となって跳ね広がった。鼻をくすぐる甘い香り。腹の虫は見事にいい音で鳴いてくれた。気恥ずかしさ俯くと百合はこちらに箸を渡した。
「ユウの喜ぶ顔が見たいだけよ」
「そんなこと言って、お前が食べたかっただけじゃないのか？」
「そういうこという？　解りました。もうあげない」
俺は箸を取り上げられそうになりおどけて見せた。それを見た百合は頬を膨らませムキになった。女のはしゃぐ姿は可愛いい。男の前でしか見せないパフォーマンスだと会社の女の子は言う。しかし自分の女ならいいじゃないか、鼻の下も敢えて伸ばそう。百合がようやく箸を奪い返しかけた所でバランスを崩しよろめいた。自然と抱き留める形になった。小さな肩がスッポリと俺の胸に収まった。目の前に百合の顔があった。ふっくらとしていて輪郭のくっきりとした美しい唇。
「なに見てんの？」
百合の瞳がじっと俺を見た。何か言ってと訴えていた。
「うん？」
「なに」
「ん・・・いい女だよ」
「ほんとそう思ってる？」
「まあな」
まんまと百合に言わされている自分がわかった。
「聞いていいか？」
「いいわよ」
「何で俺なの？」
百合は吹き出しそうなるのを堪えた。そして何を今更とでも言いたげに少し困った顔をした。
「おかしいか？」
「うん、何でそんなこと聞くの？」
「どうしてさ」
「それ、女の言う台詞よ」
「でも、いい男、周りに大勢いるだろう」
「自信ないの？」
「・・・」
なにも言い返せぬ俺を百合は仕返しとばかりにからかった。
「なんか残念」
「なんでさ」
「だって、そんなものなのかなって？思っちゃうじゃない～、やっぱり遊びなのかな？」
「違うって」
声を荒げる俺を見てしめしめという顔で百合は笑った。
「おもしろい」
「なんだよそれ」
俺は本当に不機嫌になった。百合から目を背け、唇をとがらせた。

「そうやってすぐ鼻曲げる」
百合は少し間をおいてからゆっくりと感慨深げに話し出した。
「たしかに前の私ならユウとこうなってなかったかもしれないね」
まるで自分以外の女を語るように聞こえ、俺の知らない彼女の人生を感じた。
「私、変にプライドが高くて、正直言うと、そんな自分の鼻を折ってくれるとても強い男性を探していた気がする。知的で自信に満ちている人。この人なら何を言っても無条件で従える、受け入れられるみたいな人をね」
「でも、それならなおさら俺じゃないよね」
彼女の言う男性像とは全く違ったタイプだと知りながら恐る恐る聞いてみた。
「そうね、全然違う」
「やっぱり」
百合は気持ちいいほどさっぱりと言い切った。
「ほら、またふてくされる。話は最後まで聞きなさい、悪い癖よ」
普段は甘えて話しかけてくるのに、こんな時だけ百合は年上の口調になる。
「違ったからいいのよ、ユウと張り合うこともないもの。正直にいられるじゃない」
「なんかとうしょうもない男って言われているみたいだな」
「なにいうの、ユウはこれからでしょ。第一私が望んでるのは理屈なしで安心させてくれる人と一緒にいたいだけ」
百合は俺の左腕を引き寄せ自分の体に巻き付け抱き枕のようにすり寄った。
「何があっても、この腕がちゃんと私をささえてくれればいいの」
「でも給料かせぐ男がいいだろ？」
「そうね、女だから頼りたいって気持ちがどこかにあるのもたしか、でも贅沢したいって言うんじゃないの。どんなに苦しくても『俺がなんとかする、心配するな』って言ってほしいのよ。そんな雑草みたいなどこでも生きられる男性に憧れるってこと」
簡単なようでいてとても高いハードルに思えた。しかし女と暮らすという事はそういう事なんだろうとも改めて感じた。
「いつになれるのかわかんないよ」
「期待してる、ユウなら大丈夫。急がなくていいから」
そこで二人の会話は止まった。清々しい顔を百合はしていた。打算的といわれる女がみせる不思議なまでの楽観的な表情。お手上げだった。
「それにね、あんまり難しいことは考えてないよ。これをプレゼントしてくれたユウがいいのよ」
百合はベッドの枕元に置いておいたぬいぐるみに手を伸ばした。それは同棲してふた月目、二人で迎える初めての彼女の誕生日だった。プレゼントを選びたくても高価な品物を買う金もなく、女性に贈り物をした経験もない。ただ彼女が猫を好きなことは知っていた。しかしこのマンションは四つ足のペットは禁止だった、困ったあげく買ったのが、本物そっくりの黒猫のぬいぐるみだった。我ながら年上の女性にはチープ過ぎると、買ってから後悔した。
「ただのぬいぐるだろ」
それを彼女の手から取りあげようとした。百合は俺の手をかわして胸の中に抱え込んだ。

「やめて、宝物なんだから」
「こんなものが？」
今度は百合が怒った。
「何でそんな事言うのよ」
普段、百合が身につけている物はそれなりのブランド品ばかりだった。最近になって
それを知った俺はぬいぐるみなんて送ってしまったことをプレゼントした時以上に恥ずかしく思っていた。
「それはシャネルもらえれば嬉しいくもなくもないけれど、ホンとは何でもいいのょ。
好きな人が私のことを思って選んでくれてるって事が嬉しいの」
そういうと百合は俺の胸に顔をうずめた。
「汗くさいだろ」
「うん、臭い、でもこれがユウのにおい」
そういうと汗ばんだ俺の首筋にぬいぐるみをこすりつけた。
「汚れるよ」
「いいの、ユウがいないとき一緒に寝るの」
鉄板にしかれた油がパチパチとはねる。霜降り肉は焦げ付き反り返っていた。
「やっぱりわかんねえ」
「分からなくていいよ、側にいてくれたらそれで。・・貴方が私の居場所だから」
黒髪に隠れる瞳が俺を求めていた。本当の意味で百合にふさわしい男になりたかった。けれど今は指を絡めてやる事くらいしかなかった。百合はぽつりと言った。
「時々怖くなる。いつ私の前からいなくなるのかな？って」
「なんでさ」
「わからないよ」
目を伏せる百合、そして今、夏は走り始めた。

　太陽がアスファルトに反射し、照り返しが道行く女の生足をなめる。真夏の午後２時。くそ熱いのにもお構いなく手をつなぎ、肩を寄せあう恋人同士。歩行者天国にそんな幾つもの影が揺れている。久しぶりに二人でカーテンを見にやってきた。左手にはさっき買ったカーテンの袋、右手は百合の腰にあった。これじゃ他人をとやかく言えない。しかし離れたくても、嬉しそうにもたれ掛る百合から離れるわけにもいかない。それに胸元の大きくあいた白いワンピース姿の彼女にも目が奪われていた。谷間に浮きでた汗は乳房の膨らみを際だたせ、何度となく目にしているそれが一層魅力的に感じる。これが夏の魔法なのか？女性らしさを肩パットの効いたスーツに押し込むいつも姿はない、目の前にいるのは華やかで洗練された大人の女性がだった。いびつな化粧をした女にの女をつれた男にみせつけてやりたかった。お前達とはレベルが違うと。俺はいい気になっていた。
「なんかほしい物ないか」
「ん？」
「ＰＲＡＤＡとかグッチとか」
「ユウもそんなブランド知ってるのね」
「男から何もらったって女子社員が話してるからな」

「仕方ないよ、お洒落は女の生き甲斐だし、いいもの身につけると自信つくのよ」
赤ん坊を背負った父親の後を、母親がもう一人の子供の手を引きながら歩いていく。そのたどたどしい子供の足元を見つめ百合は微笑む。
「ユウといると見えるものが違うみたい、だから今はこうやって歩いていられるだけで十分楽しい」
百合の言葉が物足りなく感じた。
「それに今日は無理ね、出かけるとき財布みちゃったもの。夏なのに木枯らし吹いてた」
確かにいつも大して現金を持ち歩いているわけではなかった。浪費癖が付くといけないと百合に言われ、生活費と小遣い以外は口座に入れたままだからだ。しかし何ならカードを使ってもいいと意地になりかけた。
「嘘よ、見てないって。ほしい物があったら言うよ、心配しないで」
百合の収入は俺より遙かに多い。そんな彼女なら、俺にねだらなくとも好きな物は買えた。第一つき合ってからこの方何かをねだられたことなどない。つまりは社交辞令のような物だと思った。薄っぺらな男の見栄が俺の中で燻った。見かねた百合が助け船をだした。
「しょうがないわねえ、じゃあユウもちでお茶にしましょ。ほら、あそこ」
指さした先には、道路に面したオープンカフェがあった。それぞれのテーブルには肘掛けのあるディレクターズチェアが二つずつ。軒先から突き出た大きなアイボリー色の日よけが太陽の日差しからお客を遮っていた。それがどんな生地で出来ているかはわからない。しかし、強い光りに疲れている者にとって、最適に調整されていること見て取れた。俺達はその中の一つに向かい合って座り、ウエイトレスが来るのを待った。テーブルの上の小瓶には青紫のラベンダーが飾られ、その香りがすれ違う女達の香水に酔った俺を癒してくれた。椅子にもたれ髪をかき上げる百合のうなじの向こうで、それぞれの男と女の時間と空間が回っている。
　程なくウエイトレスがやってきた。白いカッターシャツに深緑色の小さなエプロン姿、メニューを広げてこちらに手渡そうとする。俺は受け取らずに注文を言った。マンデリンは俺、百合はココアかアイスココアと決まっている。彼女も「うん」とうなずき、ウエイトレスもそれを見てあっさりとメニューを下げた。そしてオーダーの内容を機械的に復唱すると店の奥に消えていった。
　暫くの時間ほてった体を沈黙にまかせ、周囲の恋人達の囁きを聞くともなしに聞いていた。女の完結しない会話に男達は何通りもの相槌を使い分ける。一呼吸でもタイミングを外したなら、「あぁ、私の話聞いてない」と非難され、ペナルティーをうけて慌てて言い訳をする。いずこも同じだなと思いながら、俺の口元はゆるむ。百合も俺の顔がほころんだ訳を察したのか、
「私もあんな風に甘えよう？私の話聞いていない～って」
普段それほどおしゃべりでない彼女がしても似合わないとは思うが。
「それは許して、あんな風に、うん？それで？なんて言えないよ。あんなに話されたらしょっちゅう怒られてないといけないだろ」
百合は汗拭き用に手にしていたハンカチで口元を隠しながら、
「そうね、それでなくても大切なことも聞いてないものね。あはは」
と笑い、お腹をおさえた。結局他の男達と同じ立場になってしまった。自分ではクールに

決めていたつもりが簡単に男の金箔をはがされた。
　そんなそよ風の吹き抜けるオープンカフェに、二人の男女が現れたのは、俺の首筋の汗がようやく引いた頃だった。４０過ぎの男と同年齢の、豊満な体に派手めのツーピースを着た女。彼らは百合の後ろの席に案内された。男は百合の背中あわせに、女はその真向かい、つまり俺とも真向かいに膝を組んで座った。しかし、二人の座る角度が俺から少し斜めのためなのか、女の顔はもちろん男の横顔もハッキリと見えた。この女をどこかで見たような気がした。どこで？いつ？記憶をたどり、思い出そうとした。
　彼女の身体を上から下まで視線が落ちていき、ミュールから覗く赤いペディキュアを見たときようやくわかった。数日前仕事に行った場所で見た女。そう少年を搾り取っていたあの卑猥な果実、偶然が俺に悪戯したのだと感じた。男と女は顔を寄せ合い、なにやら話している。先ほどとは別のウエイトレスが、コーヒーとココアを俺達のテーブルに運んできた。レシートを裏返しに軽く会釈をして立ち去ろうとする。そのとき、女がそのウエイトレスを呼び止め何かを注文した。俺はマンデリンの苦みを味わえなかった。あの日見たマンションの情景が、女の組んだ太股の奥にちらついてしかたなかったからだ。今もこの足の奥でまだあの果実が息づいている。刺激的な爪の色が、落ちつきかけたはずの俺の感情を揺さぶる。俺達の時よりずいぶん早く彼らの飲み物は運ばれた。
　男はグラスビール、女は冷えたロゼ。女は細長いワイングラスを手に取り、あの時少年の肌を這っていた唇を水滴の流れ落ちるグラスに当てた。皺のういた喉へ液体が飲み込まれていく。俺は男の顔を見た。この女の素顔を知っているのだろうか。放り出していたガラクタのおもちゃがある日突然動きだしたような気がする。そして以前はなかったそのおもちゃのへ関心が、形を変えて新たな興味へと変わり、俺はいつしか得体の知れない衝動に捕らわれていた。急に無口になった俺に百合は気づく。
「また、聞き耳を立ててるの？」
「ん？ううん、なんでもないよ」
自分の意識が百合以外に向いている事を気付かれないように､何か話さなくてはいけない。でも何を？そのとき紺のスーツの胸元でなにかの音がした。男は携帯を取り出し、通話ボタンを押した。二つの席は離れていて男が何を話しているかは聞き取れはしない。電話を終えた男は女の手に自分の手を重ね合わせ、満足そうな顔した。女はその手に応えるように男に前屈みになった。はちきれそうな胸の谷間からレースの下着が覗く。男は携帯をテーブルに置くと、ハードボックスから煙草を取り出し、女はすかさず火を付けた。喜びを隠そうとしない女の甘える目が男を見つめる。
「ねえったら、どうしたの？さっきから黙ったままで」
百合に何か話しかけないと、と思いながらいつの間にか道に飛び出した猫の様に、女の事で頭の中が一杯になっていた。
「なんか考えていたの？真剣な顔して」
もうこれ以上黙っていてはいけない。しかし何を話せば。
「百合のこと」
「嘘」
口からでまかせをいえる雰囲気ではなかった。詰問されるままに
「んーん、仕事のことさ」

その悩みが俺の頭を離れないのは事実だが、今まで百合には口にしたことはなかった。日頃言えずにいた事を咄嗟の言い訳に使ってしまった。でもどんな理由であれ目の前の女が気になっているなんて気まずくて言えなかった。
「仕事いやなの？」
「働くのは嫌いじゃない、仕事は真面目にしているさ。でもこの職業が嫌で田舎から出てきたのに、これじゃあ夢がないだろ。それに給料も安くて、このままじゃ百合と暮らすだけで精一杯だ」
なぜ急にこんな事を言ってしまったのだろう。突然の事に百合も手に持っていたストローを放し、驚いた目で見ている。俺の弱さがこんな形で陽の光にさらされてしまうのが情けなかった。本来の自分に戻れぬまま、女から視線を動かせずにいた。麻薬を打たれ、自白を強要されるように百合の問いかけに答えた。
「まだお金の事気にしてるの？」
組まれていた女の足がほどかれ、静脈の青さが白い内股に浮き出していた。
その時、女は俺の視線が自分の下半身に向いていることを意識した。
「百合の為にも、もっとましな仕事をしたいのさ」
「ありがとう、でもその気持ちで十分。言ったでしょ、私は今のままでいいの。だからお金の為じゃなくて自分のしたいことして」
見られている事を嫌がるでもなく、女はわざと上唇をなめて笑った。俺は女に気づかれたことの恥ずかしさに固まり、何とかさり気無くに視線をずらそうとした。
「したいことって・・・」
百合の呟くその後ろで、女は俺をもてあそび始めた。男の吸ったタバコの煙の向こうで女はすこしずつ両足を開いていく。太股の奥から、いままで肉に隠れていたグレーの下着があらわれた。光沢のあるその生地は女の恥部のふくらみを悩ましく包み込んでいた。女の気まぐれの虜になっているのは俺だけで、相手の男はテーブルの下のことには気づきもしない。
「どんな仕事が出来るのか本当はわからない。ただこのまま流されているのも」
女の左目が俺をちらりと見ると、何食わぬ顔で足を組み替える。
（やめてくれ）
恥ずかしさが込み上げる。百合はうつ向き、黙り込んでしまった。申し訳ないと思った。
「出よう」
百合の手を掴み、レシートに金をはさんだ。早くこの場から去りたかった。女の右手がテーブルの下でバイバイと振られていた。惨めな気持ちで逃げ出すようにカフェを後にした。
「ユウ、痛いよ」
百合の声も太陽の照り返しにぼやけていた。この人並みに紛れて消えてしまいたい。たとえ溶けたアスファルトにこの足がめり込もうとも。

　子供のはしゃぐ声と水しぶきの音が遠くで聴こえる。マンションに附属した幼稚園のプールからだろう。薄雲の切れ間から時折さす陽の光りが、窓辺においたガラスの花瓶の模様を突き抜けて、部屋の壁にゆらゆらと青い光りを漂わせる。その揺らめきのリズムが、目覚めて間もない俺に雲の流れの早さを気づかせた。朦朧とした脳味噌を呼び起こし、辺

りをみた。よどんだ空気が自分しかこの部屋にいないことを気づかせ、綺麗に折りたたまれた百合の青のパジャマが彼女がいないよとダメ押しした。腕時計をみると昼の１２時を過ぎていた。俺は昨日、夜から今朝の３時までデパートの定期清掃をしていた。帰ってきたのは始発だった。最近同僚の一人が入院して、奴の夜勤の分が全部俺に回ってきていた。これで今週に入って三度目の夜勤。はっきりいってこんな仕事ができるのも若いうちだと思った。

百合のいないこんな時、この前彼女に言ってしまった悩みが滲み出し、自暴自棄になる。彼女と出会う前は楽しければそれで全てが許されていた。しかし彼女に自分の未来を重ね合わせると、本当は自分が深い氷の裂け目数ミリ手前だということに気づく。
常にそんな追いつめられた思いがため息となり、にぶい音を立てた。

ラップにくるまれた俵型のおにぎりが二つ食卓の上においてあった。百合は梅干しとおかかしか握らない。それ以外の具だと時たま俺が残すからだった。水蒸気に曇ったラップをはがし、おにぎりの海苔が乾くのを待つ間、やかんの湯を沸かす。そして百合が育てている花に水をやり、たまたま彼女が持ち帰った証券雑誌を何となく手に取った。暴露本まがいの内容だった。各企業の業績の悪化要因、またのっとられそうな企業のあがきが事細かに書かれてあり、そのどれにも仕手便乗、株売買のタイミングのポイントを説明していた。

やかんの笛が激しく鳴った。棚から百合が友達の結婚式で貰ったリチャードジノリのカップを取り出しコーヒーの粉を入れた。そして熱くなった取っ手をそーと握りやかんを傾けた。金で絵付けしてあるそのカップの中でコーヒーの泡がゆっくり回る。俺はおかかのおにぎりをほおばり、先ほどの雑誌を捲った。

百合が経済新聞を取っているせいもあり、記事の中に出てくる数字の意味についてそれほど抵抗はなかった。それより芸能界とは違う、経済というジャンルのスターの隠し撮りされた横顔。そして彼ら主役とそれを取り巻く様々な人間模様が、経済という宗教に陶酔する信者のように感じられた。写真に視線を残したまま、残りのおにぎりに手を伸ばそうとしたその時、ある人物に目が止まった。

雑誌の中に映っていたのはオープンカフェで見かけた男だった。あれ以来、女の顔が頭から追い払えないでいた。しかし何故あの男がこんな所に？秘密の扉を開くようにご飯粒の糊で汚れた指で頁をめくった。

男の名前は大久保信士３８歳、大手家電量販店業界第三位の下古電機の人事部長。背は高く腹は出て、顎も脂肪で頬と境目がハッキリしない。例えれば昔柔道をやっていましたという感じの体型だ。しかし、人事部という会社の心臓をなぜ３８歳という若さの
大久保が握っているのだろう思った。だがそれは記事を読み進めるうちに自然と理解できた。彼の父親、大久保重吾６０歳は下古の現社長だった。

しかし、ここまでならなる良くある話だが、実はそう簡単な事だけではなかった。下古電気はもともと下古一族の同族世襲経営で来た会社。大久保重吾は２５年前まで都銀の銀行マンをしていた。当時の彼が担当していた会社が下古電気だった。故下古健三会長は大久保の能力を高く買い、それと同時に銀行との太いパイプを作るために彼を下古電気に向かい入れた。

当時大久保重吾４５歳、働き盛りの彼が入社してから、資金の回転率や在庫の減少など、

目に見えて業績が改善していった。現在、一、二を争う家電量販店に成長したのも、彼の力を否定できないだろう。しかし同族世襲経営の愚かさと悲しさ、大久保が社長になれる可能性は皆無だった。

ところが、当時創業者であり社長だった下古健三は三年前肝臓を悪くし、暫く入院を余儀なくされた。強気の下古健三も流石に体力的な衰えを感じたのだろう、一旦は自分の息子、彰に社長の椅子譲ろうとした。しかしその時、彰は３７歳、健三の目にはまだ社長にするには不安だった。もう少し勉強をさせてからと考えたのだろう、彰を取締役には引き上げたが社長にはせず、一番忠実で信頼のおける大久保重吾を社長にし自分は会長職についた。つまりは表舞台からは退くが実権はそのままという院政を敷いたのだ。

大久保はなれるべくもない社長という役職に就けたことを、故下古に感謝し忠誠を誓った。実際大久保にも社長という人事は一時の事であり、いずれ頃合いを見計らい息子への社長交代を言い渡してあったらしい。当然、大久保もその条件を呑んだ上での社長就任で、両者に軋轢はなかった。

それから３年後の去年の１２月、下古健三に予期せぬ事が二つ起こった。一つは自分の死、彼は突然の心筋梗塞で呆気なくこの世を去った。もう一つは大久保が社長の椅子を手放さなかったことだ。密約は破られた。大久保は過半数の取締役を取り込み、下古の派閥に属する役員の多くを解任した。結局、彰が社長なることはかった。

怒ったのは彰ではなく下古の妻、文恵だった。彼女は３年前大久保の社長就任にも猛反対した一人だった。文恵は昔の下古電気の支店に高卒の売り子として勤めていた。その時たまたま見回りに来た下古健三の目に留まり愛人となった。しかし文恵は下古の妻に子供がいないことを知ると、二十歳前の女性とは思えないほどのしたたかさで下古を虜にした。その後、彼女は身ごもり彰を産んだ。後は邪魔者は消えろと卑劣な手法を使い前妻を追い出したらしい。

とにかく文恵が金と力目当てだったことには間違いなく、彼女が４０年かけて築き上げたものをこのまま手放せるはずもなかった。そこで取締役の一人、大久保と敵対する黒岩敦哉５５歳を使い現体制の取り崩しを計ろうとした。記事では文恵と黒岩は彼女が故下古健三と結婚する前、当時彼女の勤務していた支店を統括していた黒岩と、上司と部下という立場以上の男と女の関係にあったのではないか、そして故下古が急死する暫く前から、『二人の関係がまた復活していたのでは？』、と記事はクエスチョンマークで書かれていた。とにかく新卒で下古電気に入社した黒岩にとって、外様である大久保の社長就任は屈辱のなにものでもなく、その点に置いても文恵と黒岩の利害関係は一致していた。

彼らは劣性となった自分たちの派閥の取締役を増やそうと、大久保側の取締役の切り崩しをはかった。しかし、大久保体制でさらに実績は伸び、銀行もそれを後押ししている現状では彼らに寝返る者は現れなかった。記事は噂と断った上で次のように書いていた。最終手段を使うしかなくなった黒岩達は自社株を買い始めたようだ。つまりは（相続した株＋買い占めた株）でイエスマンの取締役を送り込み一気に勢力地図を塗り替える核弾頭をぶち込もうとしているらしい。

しかし文恵と彰が相続した株は総株数の４０％たらず。大久保を解任し新たな取締役を送り込むには株主総会出席者の議決権の３分の２以上なくてはならない。大株主の株所得数からすると黒岩達はには少なくともあと１０％の株が必要だった。それをクリア出来た

とき彼らの望みは達せられ、満たなければ取締役解任権は発生しない。両派閥は水面下で互いに株を買い占めようと躍起になっている。
不況にも関わらず、そんな噂につられ下古の株がじりじりと上がっていた。企業の世代交代には権力争いは付き物だが､そんな出来事はテレビの中かこんな雑誌でしかみないもの。
　しかしまさに渦中にいる人物を、先日この目で見たという事に驚き、妙な好奇心を駆り立てられた。そんなエリートがなぜあんな女と？疑問はまた振り出しに戻った。それにしてもカフェで大久保信士が電話のあと笑った意味は一体なんだったのだろう。三流経済雑誌に書かれていることが全て正しいとは思わないが、憶測という七色のシャボンを膨らませるには十分刺激的だった。気が付くとコーヒーは水のように温み、空を走る雲はその動きを止めていた。
　空想は熱を帯び、心臓を鷲づかみにした。漠然とだが、地中深くに流れる原油のボコボコと泡立つ音が聞こえた。あの女に何かある。金なのか力なのか？白い太股の奥に真っ黒な原油が眠っていることは間違いない。もう一人の俺が叫ぶ。
（おまえになんの関係がある。第一何が出来る）
『未来への不満』が冷静になろうとする自分を殺した。脳は熱を持ち、ショートしそうなほど高速の計算を繰り返す。皺だらけのベッドに身体を放り投げた。指を伸ばし足を組み目を見開いた。天井に張られた壁紙の幾何学模様が俺を異次元へと誘う。いつしか思考のブレーキは壊れ、都合のいいストーリーの歯車が見事にかみ合っていく。一つ場面が変わる度に、俺は彼らより優位にたっていく。女を落とす前の男の心理に似ていた、決して相手は自分の罠に気づかないと思う。
　耳が熱くなり、高鳴る心臓の鼓動を抑えようと台所に酒を求めた。客用にと、百合が買い置きした焼酎が流し下にあった。食器棚からマグカップを取り出し、透明な液体を半分ほど注いだ。香りといえるほど強くないが揮発するアルコール臭を感じた。一口口にすると舌の先がしびれ、なにも喋れなくなった。どだい酒の飲めない俺にとって薬でしかないのだと言い聞かせ、胃のなかに流しこむ。劇薬のような痛みが走り、火柱が食道から脳天へ突き抜けた。手や足がしびれる。高揚した感情を抑える以前に俺は混乱し崩れていった。心臓の鼓動はアスファルトを平らにならす機械のように激しく暴れた。息が出来ない。全てが回り、絨毯に倒れ込みめり込んでいく。朦朧とした意識のなかであの女の顔が浮かぶ。そしてあの時と同じように笑いながら足を開く。それを打ち消そうとすればするほど彼女の声は甲高く、その声が頭の中に鳴り響き、全ての思考を吸い込んでいった。

「ユウ、どう？」
脳味噌が重く、後ろ頭がうずいている。地獄の向こうから俺を呼ぶ声がした。目を開けると夕日に染まったカーテンが、そよ風に揺れていた。
「ねえ、ユウ」
百合が泣きそうな顔で覗き込んでいた。
「驚いた、死ぬじゃないかと思った。なんでお酒なんか飲んだの、飲めない癖に・・・。玄関を開けたユウ倒れてるんだもの、それにいくら呼んでも応えないし、お酒の瓶が転がっているし、床は吐いたもので汚れているし・・・」
何から話していいのかわかないと言うくらい一気に話す口、彼女の剥げた口紅がその時の

焦った姿を想像させた。
「仕事明けでだるくて、気つけのつもりだったんだ」
酔いが冷めていくと寒さに体が震えた。それに気づいた百合が俺にタオルケットをかけ背中をさする。
「アサリのお汁飲む？父が酔った時、いつも母がつくってたの」
「うん」
俺の言葉にようやく安心したのか彼女は台所に立った。
「何か聞く？」
百合は俺の返事を待たず冷蔵庫の上のラジオをならした。山崎正義の歌が聞こえた。ギターの抑揚が静けさを際だたせた。俺はタオルケットにくるまりなりながら、じっと彼女の背中を見つめた。
「でもよかった、今日は早く帰ってこれて」
そういえば、日のまだ高いうちに彼女が家に帰ってくることは少ない。
「何かあったの？」
「ううん、今日は外で講習会だったから、それが終わってそのまま」
小さな小皿で味見をしてうなずく百合、お椀に注ぐとこの暑い夏でも湯気が立ち上る。
「さあ出来たわよ、みのむしさん」
薄暗くなってゆく部屋、お椀を差し出す腕が白く淡い光を放つ。立ち昇る湯気の向こう、彼女の顔をうかがいながら一口含む。
「どお？」
熱くて味が分からない。しかし美味しい？駄目？とのぞき込む彼女の顔は答えを待っていた。
「美味いよ、すごく」
全てを飲みほし一息つく。吐き出した息はまだ酒くさかった。
「もうやめてよね、馬鹿な事するの。今度は死んじゃうよ、いい？」
俺を叱りながら百合は抱きついてきた。ボーとした頭の中に彼女の匂いが心地よく香った。どうして女っていい匂いがするのだろう。それを確かめるように彼女の首筋に軽くキスをし腰に手を回した。この前、二人で買ったカーテンが外の風を部屋に招き入れた。
カーテンの幕が開いた空には星が瞬き始めていた。
　俺の右手は彼女の胸にふれ、その温かみや軟らかさを求めた。男にとって安心するふくらみ。彼女はなにも言わず俺の髪をなでた。
「女っていいな、柔らかくて暖かくていい香りして」
「そうよ、だから優しくしてね」
百合は側にあった猫のぬいぐるみをとって、俺の顔の前でおどけて見せた。たまらなく愛おしくなり肩を引き寄せた。彼女の首に頭を摺り寄せ、顎で鎖骨のラインをなぞる。くすぐったそうに身を捩りながら彼女は言った。
「さっきまでうんうん唸ってた人が」
長い髪がさらりと肩からこぼれ落ちた。２曲目のバラードが部屋の中で時間をまわす。
　夕日が向かいのマンションの向こうに落ちる。一筋の光が部屋に射し込む。光を背にした彼女の身体はモネの絵のように淡い光をまとった。唇が触れ、音もなくキスを重ねた。

乳房に触れていた手は男としての愛撫をはじめた。唇は百合のうなじをつたい、鎖骨のくぼみへと。彼女の吐息が変化し、しだいに両足のバランスが崩れていく。彼女の肌を求めボタンの一つに手をかけようとした時、俺は躊躇った。酒の勢いで女を抱くような男だけにはなりたくはない。多分このまま続けても彼女は拒まないだろう。しかし拒まないことと、彼女が受け入れたとは違う気がした。惨めになりそうで手を止めた。
「どうしたの？」
「みっともないなと思ってさ。いやだろ？酔っぱらいに抱かれるのは」
「やさしいね」
止まった手を彼女はブラウスのはだけた胸に押し当てた。ブラジャーの紐が肩から外れた。自分の女なら、好きなときに抱く権利をもっていると思いがちだ。足を開かない女は我がままだと不満を漏らすことさえある。けれど、錠が開かないのは鍵のありかを知らぬからだと薄々気づいている。なのに男は欲望の波に押し流されてしまう。
「いいの？」
「嫌ならこうしていないよ、でしょ？・・・好きにして」
　俺の醜い部分をも認めながら、それでも求める彼女。百合の体の中で女が暴れている。鮮血の鮮やかで熱い叫び。早く早くと追い立てられる。百合に引きずり戻されるように沈まりかけた欲望に再び油が注がれた。荒々しくボタンを飛ばし下着ををはぎ取り、足をからめ乳房をむさぼった。額に浮き出た汗の玉がその重さに耐えきれず、顎をつたたって落ちた。俺の舌先が彼女の性器の上で暴れ回り、悲鳴のような喘ぎ声が部屋に響く。身体の奥に差し込んだ俺の指は、掻き出すように激しく刺激し、足が小刻みにふるえた。
　彼女の腰が単体の生き物のように怪しくうごめいた。それは今まで見たことのない百合の淫らな姿だった。胸の谷間におぼろげに見える百合の顔。普段恥じらい、小さな声しか漏らさぬ彼女。しかし今日の彼女はその身の高ぶりを隠すことはなかった。女の性が性的行為によって全て決められるものでないことは知っている。だが今まで百合の何を見てきただろう。打ち付けながら俺は圧倒された。彼女の不規則な息づかいは、俺の幼稚な理解を越えていた。感情と肉体の間で変化を繰り返す百合。
「もうちょうだい」
百合の内部が俺を引きずりあげようとしていた。いつまで持ちこたえられる。
「おねがい」
夜空に浮かんだ月、の光が最後を迎え入れようと潤った百合の身体を。
俺はその月の光を頼りに彼女に刻印を焼き付けた。百合の右手は俺の腕を掴み、爪が皮膚に血を滲ませた。傍らで放り出されたぬいぐるみが二人を見ている。もうすぐだ、あと少し。

　高層マンションは太陽の輝きをその身に受けそびえ立っていた。その風貌はあの日と同じく、都会の巨人たるべき威厳と気品を備えていた。漠然とした期待に引き寄せられ、結局俺は来てしまった。けして悩まなかった訳ではない。子供の好奇心といわれても仕方がない。百合のいうとおり今の平穏な暮らしを幸せというのかもしれない。大企業内部の争いなどに寄づいても襟首を捕まれ放り出されるだけだと。この前のような強気のロールプレイングはもうなかった。だがそれが反対に俺の気持ちを楽にさせてしまった。いつでも

逃げられるように慎重に、深入りをしなければいいのだと。
　玄関で自分の姿を硝子に写す。清掃服と会社のマーク入りの汚い帽子。左手にバケツ右手にモップ。いつもの格好そのままでカメラに向かいインターホンを押した。管理人はモニターの向こうのからこちらを伺う。
「ご苦労さん、今日もここの仕事かい」
「この前やり残したんで」
オートロックは解除され、自動ドアは開いた。もう一度カメラに手を挙げエントランスを通り抜けた。人気のないロビー、タイミング良く降りてきたエレベーター。これから出勤なのだろう水商売風の女と入れ替わりに乗り込んだ。香水の臭いが充満した内部。毒ガスのようだと不快になった。今度はバケツを持った左手で３８階のボタンを押した。上昇していく体。エレベータ特有の違和感がこめかみの付近にどんよりとした淀みを感じさせる。階数を知らせる赤のデジタル表示が３８に近づいていく。エレベーターはいかにも高級な乗り物の様にその動きを止めた。
　厚い扉が開きフロアーを真っ直ぐ貫く廊下があらわれ、その向こうに海と雲と空を切り取ったガラス窓が見えた。ここで一番好きな眺めだ。突き当たり手前から３室目、３８５号があの女の部屋だ。薄紫に金で縁取られたドア、表札などない。扉の向こうに女がいる。防音設備が万全にほどこされたマンションで室内の物音など聞こえるはずもない。静かすぎて高鳴る自分心臓の鼓動がうるさく聞こえた。
　午前１０：４５分、各階に備え付けの作業用給水室から水を汲み、洗剤をくわえ、スポンジタワシを手に部屋の前の廊下にしゃがみ込んだ。普段ならポリッシャー片手にわずか数分で通り過ぎる面積。俺はワックスに出来た無数のヒールの傷を丹念に落としながら女が帰るのを待った。しかし、この日も暑かった。いくら高級マンションとはいえ、廊下にクーラーなど効いているはずもなく、汗が首筋からみぞおちをつたった。ワックスから浮きでた汚れが、粘液質な水溜まりを白濁させ、ズボンの膝にしみこむ。いつの間にか俺は真剣に仕事をしていた。ふと我に返り時計を見ると３時間経ったていた。もう洗うべき所など無くなっていた。苦笑しながらタオルを真っ黒の水で洗おうとした。
　その時、背中で女性の悲鳴が聞こえた。振り変えると女が水溜まりに滑って尻餅をついていた。あの女だった。
「大丈夫ですか！！」
咄嗟に女に駆け寄った。バッグの中身が廊下一面に散乱し。軽く腰を打ったらしくすぐに立てそうもない。
「すいません」
肩を抱き起こした。女は俺を見るなり言った。
「痛くて動けないわ、手をかして」
手を貸すどころか俺に抱きつき、散らばった物の中から、ＣＯＡＣＨのキーホルダーの付いた鍵を指さした。俺は片腕に女を抱えたまま、不自然な格好でドアの鍵をあけた。
　真ん中を通るフローリングの床、両脇には一つずつ扉があり、一番奥にはあの時見た広い居間があった。女に命じられるまま肉厚の身体を抱きかかえて奥へと入っていった。気づかない振りをしたが女は俺の腕や胸にさりげなくふれていた。玄関からは見えなかったが、居間のとなりに寝室があった。普段客など来ないのだろう双方を仕切る引き戸は開け

放たれていた。俺は女を下ろす場所を探した。しかしどこも脱ぎっぱなしのスーツや汚れた原色の下着で散らかっていた。仕方なくソファーの上にあった紫色のキャミソールを隅に追いやった。そして空いたその僅かな空間に女の身体を横たえた。女は部屋の散らかりようを言い訳するでもなく俺の身体をまじまじと眺めていた。
「ちょっと早く、散らかった物、とってきてよ」
そういって玄関を指さした。背中に女の視線を感じながら、散乱したコンパクトや携帯や、化粧ポーチをバッグに入れた。その中に一枚の紙が入っていた。Ｅメールのアカウントとパスだった。俺はそのアカウントとパスを素早く書き取った。
「何もたもたしてるのよ」
部屋の廊下の壁に反射しながら玄関の外まで怒鳴る声が聞こえた。急いでそれをバックに詰め込み、部屋にもどった。女は受けとったバッグの中身を一通り確認し、一目でＫＥＮＺＯとわかる派手なハンカチを取り出した。
「あぁあぁ、高い物なのにこんな真っ黒になって」
タイトスカートの濡れを拭きながらこれ見よがしに文句を言う彼女。
「すいません御迷惑かけて、クリーニング代出します、ですから会社には言わないでもらえますか」
深々と頭を下げ、注意の足らなかったことを詫びた。そして会社には報告しないで欲しいと女の手を取り慈悲を求めた。『会社には言わないでほしい』とあえて言葉にしたのに理由があった。第一は自分の行動が会社の仕事じゃないと気付かれない為、第二はこの女なら弱みつけ込んでくるだろうと思ったからだ。その言葉を聞いた女の態度は更に大胆なものになった。紺のローヒールを履いた足を俺の前に突きだし
「はやく」
と目で玄関に持って行くように指図した。この女は普段でも男に仕えられる事に慣れているのだろう。両手でそれを足から外し、哀れな労働者を装い命令に従った。
靴を加えた犬のように見えたのか、それを玄関に返してきた俺の姿に女は満足したらしく、きつかった目元は和らいだ
「本当に申し訳有りません」
「名前は？」
「武田祐二といいます」
「このマンションを理してるの？」
「管理は別で、うちの会社がそこから保守整備の下請けを依頼されています」
「でもプロよね」
「はい」
「あそこは通路よ」
「はい」
「それならそれと、仕事の時間帯変えるとかして迷惑にならいようにするべきじゃない？第一最低限、危険とか看板あげておくべきよ、違う？」
彼女は住人の権利を正論と重ね合わせまくし立てた。普段の仕事ならこんな事はない。
区画を決め、テープを貼り、看板を出し限られた時間にワックスを塗り上げる。しかし人は無責任極まりない生き物だ。いくら事故防止の柵を立てても塗り立てのワックスの上を

歩いて転んでいく。しかしその時でさえ俺達は今のように不注意だと怒られる。子供じゃいざ知らずいや『看板が見えにくい、作業員は誰も濡れていると注意しなかった』などと自分も確認しなかった事を棚に上げ何もいえない俺達を責め立てる。
「貴男のミスよね、そうでしょ」
さっきから何度も俺は認めているのに更に念を押す女、そうかと思うと言葉は一転した。
「けれどまぁいいわ。大して痛みもひどくないし、面倒なことは好きじゃないから会社には黙っていて”あげる”」
”あげる”のなんともったいぶった言い方。内心笑えた。
「ありがとうございます。助かります。今の会社に務めてまだ日が浅くて、この不況にやっと見つけた仕事ですから」
掃除屋の仕事なんていくらでもあった。自分の口を突いて出る嘘に多少の驚きを感じた。
「ふーん、若そうに見えるけどご両親は？」
「親は・・・・」
答えていいものか迷った一瞬の空白、女もそれを感じたのだろうハンカチを持った右の手の平をあげた。
「いいわ、武田君って言ったわね。プライベートを聞いた私が悪かったわ。でも電話番号を教えてくれないかな？」
「なぜですか？」
「もし後遺症でもでたら困るでしょ」
少し転んだくらいで後遺症も何もあったものじゃない。しかし女は俺に興味を持った事は確かだ。
「携帯でいいですか？」
「メールもね」
女はいい獲物が手に入ったとでもいいたげに薄笑いを浮かべた。何ともいえない不潔さを感じた。
「紙はないですか」
女はバッグから手帳を取りだし、何も書かれていない白い頁を差し出した。手帳を受け取っり携帯番号とアドレスを書き、それを女に広げて見せた。
「ここに連絡ください。出来る限りの事はします」
手帳を受け取った女は、何の意味があるのか電話番号と俺の顔を見比べた。
「で？このマンションにはときどき来るの？」
「月に一回は」
嘘ではない。この地域の担当は俺だった。
「じゃあその時でも寄ってみて、寝込んでいるかもしれないでしょ」
「でもかえってご迷惑でしょ。それに逃げも隠れもしませんし、もしそんな事になったら会社に電話してもらって構いませんから」
「とにかく、寄って」
この一言には迫力があった。言い返す事を許さないとでもいうふうに赤い唇をきっちりと結び、女はバッグに手帳をしまった。どこかでこんな状況を想定はしていた、しかしあまりに思い通り事が運び怖くなった。緊張した。女があの時のようにわざと足を組み替えて

みせた。見ないように汚れたガラス窓に視線をそらしながら自答した。『お前は本当にこの女とゲームを始めるつもりか？』幸運にも掴んだチャンス、今すぐ捨てる必要はない、どうするかはこの部屋を出てから考えよう。俺は結論を先送りした。
「わかりました。月末にでもお伺いします。ところで奥様、よければお名前をお聞かせ頂けないでしょうか」
「富田洋子よ、結婚はしていないから奥様なんて呼ばないで。まだ現役なのよ」
女はバッグからもう一枚ハンカチを取り出した。それを艶かしく乳房の谷間にあて、これ見よがしに汗を拭く。そしてそのハンカチを左手に持ちえ、濡れたスカートの裾を少しめくってガーターベルトの付け根を拭いた。
「着替えたいんだけど寝室まで運んでくれない？」
女は俺に手をのばす。
「あのぼくそろそろ会社に戻らないとチーフに叱られるんで」
感情では拒絶していたが身体に反応が起き始めていた。不潔となじった女に勃起していた。情けない気分だった。早くこの場を去らなければという気持ちになっていた。
「残念ね、ところで貴男、私とどこかで会わなかった？」
どきっとした。喫茶店での事に気づいたのか。
「いいえ、初めてだと」
「そうかしら、どこかで見た気がするのよ」
記憶を掘り返そうとする女の意識を他に逸らそうと”虚栄心”を擽った。
「ぼくが貴女に会ったなら忘れるはずないと思います」
「あら、そう、どうしてそう思うの？」
ソファーの背もたれにしなだれかかる洋子。
「いやその、魅力的で」
「あらうまいこと言うわね、坊や。まあいいは、私が忘れられなくさせてあげるから」
滑稽な会話だ。年頃の女性が嫌いな男に求婚された時、『あなたは私の様な女にもったいないです』とやんわりと断っているのに、相手の男はそれに気づかず『なにも恐縮することはないよ、僕の包容力であなたを幸せにします』といっているようなものだ。このままここにいては何をされるかわからない。
「じゃあ、そろそろ失礼します」
俺は一礼し女に背を向けた。
「待ってるわよ」
背の女の声は喜びにあふれていた。

　それから１週間後の午後３時。俺は銀行の外壁をずぶぬれになって洗っていると内ポケットで携帯がふるえた。液晶に見慣れぬ番号が浮きでていた。富田洋子だと直感した。ためらわずに電話に出られるほど強くはなかった。壁にしぶとくしがみついている蝉と同様、俺はタオルを持ったまま固まった。焼けたアスファルトの熱気が足元から身体を蒸し上げる。１０回目に呼び出し音は切れた。肺の奥から止まっていた息が一気に流れ出した。実をいうと富田洋子と会った日から以降弱気になっていた。あの日彼女のマンションを出た後、俺はすぐさま家に帰ってパソコンの前に座った。あのメモに書いてあった富田洋子宛

のメールを見るためだった。あのメールアドレスはＷｅｂ－ｅｍａｉｌといって、パスワードさえ分かれば、メールソフトなど使わずにホームページ上でどのパソコンからでも見る事が出来る物だった。呪文のように唱え続けたアカウントとパスワードを慎重に入力しログインした。メールが一つ送信トレイに残されていた。宛先は東新経済研究所、恐る恐る開いてみると本文はなくエクセルファイルが添付されていた。クリックすると沢山の企業名の記されたリストだった。タイトルはズバリ『下古電気株買収企業先』、俺は直感した。大久保・富田洋子・東新経済研究所の三者が何らかの関係を持ちながら株買い占めを行っている。景気の低迷で塩漬けになっていた株に頭を悩ます企業からこうやって次々と買い占めているのだろう、箇々の売買価格は一度目を通したくらいでは確認出来ないほど巨額だった。手取り１５，６万くらいしか給与のもらえない自分には別世界の数字だった。俺みたいなバカがこんな人間達相手にどうにかなろうなんなて無茶だと感じた。何も失う物がないのだから怖くないだろうと人はいうだろうが、それは強がりでしかない。『まだやめれるぞ、どうする』自問自答しながらの毎日だった。コンクリートの壁面で鳴いていた蝉が「ジジ」と小便をかけて飛び去ると、再び着信音がなった。唾はもうとっくに渇れ唇の縁は白く固まっていた。考えもまとまらぬまま携帯のボタンを押した。一瞬の沈黙。目の前には『ボーナスは当銀行へ』、空を見上げた女優が青い海をバックにメタルカラーの水着で紙に張り付いていた。
「もしもし？」
がらがらとした４０女の声が聞こえた。
「はい、武田です」
「私よ、誰だかわかる？」
「富田様でしょうか」
「嬉しいは、覚えててくれたのね」
「この前は申し訳ありませんでした」
「ええ、で？仕事中？」
自分の名が覚えられていた事に相当気をよくしたのか声は弾んでいた。
「はい今外壁洗いしています、ところであの後いかがでしたか？」
「あら、こんな熱い日に大変ねえ」
「仕事ですから」
「で？今からこれないかな？今腰が痛くて横になってるからさすってほしいの。それに話もしたいし」
「まだ終わってないんで」
「なら一時間だけ待ってあげる、さっさと終わらせてくるのよ」
「あの・・・」
「なによ来れないの？」
途端に女は不機嫌になった。
「わかりました、お伺いします」
鼻で笑う女の声、満足そうに聞こえた。
「貴男につけた鎖をたぐり寄せるみたい。でもさっき電話したとき時出なかったわね、わからなかった？」

女の生き生きとした声を聞きながら、ガラス窓に映る交差点をぼんやりと眺めた。その空気感は女に伝わったようだ。
「聞いてるの？」
「はい聞いてます、手がはなせなかったもので」
その交差点で車椅子の若者が倒れた。太陽に焼かれて溶けかかっているアスファルトに彼の顔面はめり込んでいた。
日傘を差して通りかかった老婆が彼に駆け寄る。いくら老婆が若者を抱き起こそうとしても傘の骨のような皺まみれの細い腕では無理だった。老婆は両膝をつき、道を急ぐ人々に助けを求める。
「とにかく早く来るのよ、待たされるのが嫌いなの」
「結構せっかちですね」
「生意気よ」
機嫌を損ねたのか電話は切れた。つべこべ言わず早く来いとでもいいたげにプープーとスピーカーは繰り返した。
「はいはい行きますょ」
俺は独り言をいいながら倒れた再び車椅子の若者に目をやった。しかしまだ老婆以外手を差し出す者は現れない。若者はトラックの荷台からこぼれ落ちたマネキンのように横たわったままだ。陽炎の立ち上る真昼の歩道、老婆の叫びは何千という蝉の声にかき消され、死にかけた鯉の口のように見えた。

「武田です」
「どうぞ」
１階フロアーのインターホンからその声が聞こえたと同時にマンション内につうじるドアのロックが開いた。偽ってこの扉をくぐった前回より緊張する。エレベーターを降りるといつものようにガラス越しの青空が目に入る。静かな廊下を通り抜け、富田洋子の部屋の前に立った。
「入って」
白いバスローブに身を包んだ洋子がドアを開けた。挨拶をしようとすると彼女は俺の腕を引き寄せた。導かれるままに部屋の奥へと入っていく。リビングの開けるとあの時の少年が鎖につながれ、絨毯の上に裸で横たわっていた。部屋にはタバコと汗とあの匂いが漂い、明かりのついたスタンドライトにシースルーの赤い下着がぶらさがっていた。床には引きちぎられてとれた少年の開襟のボタン。今まで彼が何をされていたか聞くまでもなかった。
「気にしないでいいのよ、ペットなんだから」
洋子は冷蔵庫から缶ビールを取り出し俺に渡した。遠慮したが彼女はかまわず蓋を開けテーブルに置いた。
「驚いた？でも君だって私が普通の女で無い事ぐらいわかってたわよね。軽蔑する？それとも興味が涌いた？」
疲れ果てたのか少年は小さな寝息をたてていた。
「同じ事をしている人間はこの都会には一杯いますよ。それにそんな女も貴女だけじゃな

いでしょう？」
この前よりさらにくすんでしまったガラス窓に近寄る。取り壊されかけの古い町工場が見えた。ここらへん一体を再開発していく計画なのだろう、人工的に区画された緑が薄汚れた灰色の建物たちを飲み込んでいくように見えた。
「あら結構さばけてるのね。そうね、それにこの子だって楽しませてあげたわよ」
彼女が俺の背中に胸を押し当て両手で抱きしめようとする。その手を払いのけソファーに腰をかけた。彼女はそのまま硝子窓の前に立ち外を眺めた。
「そういう私だって男の道具、可笑しいわね」
『可笑しいでしょ』と聞き返す同意の求め方でなく『可笑しいわね』と自分に問い返すその言葉は自虐的な匂いがした。
「相手はこの事を知っているんですか」
「彼？」
あえてあっけらかんとふりまおうとしているように見えた。
「さあ？どうかしら」
「バレるの怖くないんですか」
「だって関係ないもの、あの男が求めているのは身体じゃなくて私という存在よ」
「難しいですね」
洋子はクスリと笑った。
「まったくね、おかしな関係」
「でもあなたはその男から離れられずにいる」
「そうよ」
「こんな豪華なマンションに貴方を住まわせ、好き放題させられる人ってどんな男か会ってみたいですね」
ビール缶についた水滴がテーブルをぬらしていく。水たまりは次第に大きく広がり、窓辺彼女をその中に映し出す。それをじっと見つめながら俺は洋子の次の言葉を待った。
「知る必要はないでしょ。貴男はこの子の代わり、大人に成りかけの男も試して見たくなっただだそれだけのこと。わかってるでしょ」
洋子はガウンの紐をほどき白い肌を光にさらした。
「女に飢えてはいませんよ。それでも貴女を抱くと思いますか？」
「いいえ」
彼女は自信ありげに否定した。
「君が私を抱くんじゃない、私が君を楽しむの、勘違いしないで」
洋子は目の前ソファーに腰を下ろし、ゆっくりと足を開いていった。下着などなく、陰毛はうっすらと丘をおおい、中心部から滲みでた体液がそれらを光らせていた。彼女の左手がボールのように中年太りした腹部から垂れ下がった胸へと移動し、もう片方の手はテーブルの煙草をつまむ。右足の親指が煙草の脇にあったシルバーのライターを俺の方に押し出した。
「つけてよ」
左手の中指で乳首をもてあそび腰をくねらせる。俺は何事もないように煙草に火をつけた。肺の奥へ煙をため込みながら洋子は俺を凝視した。

「どう？お金ならあげるわよ」
口と鼻から煙を漏らしながら洋子はツメの商談に入った。
「はした金で身を売れと？」
真っ赤に咲く花びらを見つめ尋ねた。
「ガラス拭いて月いくら手にするというの？せいぜい２０万てとこでしょ。それくらい今の私にはお金じゃないのよ」
洋子の声が熱を帯びていく。その時彼女の下腹部に帝王切開の跡を俺は見つけた。俺の姉も帝王切開で子供を産んだ。嫌がる俺に傷跡を面白がってみせたからよく覚えている。
「子供がいるんですか？」
「ああこの傷？」
「ええ」
「いるわよ。娘が、ひとり、それともこんな女が子供産んじゃ犯罪？」
傷をなぞりながら。意外だった、こんな女に子供がいることが。でも彼女の目は寂しそうだった。なぜだろう？潤んだ瞳の奥に深い憂いが漂っている。
「そういうつもりじゃ、でも何で母親のあなたが、こんな事を」
「あら物わかりのいいこと言ってたわりには、子供なのね？でも君に私の何が分かるの」
女は身を乗り出し目をつり上げた。
「じゃあ逆にに聞くけれど子供がいると女はどうしてなくちゃいけないの？」
「それは・・・」
「母親の不倫なんてあたりまえ、それどころか遊び男に本気になって邪魔な子供殺した女のニュース毎週あるじゃないの」
「それは特別な女で」
「この世に特別な女なんていやしない、母親だって女。みんな男に抱かれたくて、遊びたくてうずうずしてる。女は子供がいるならマリア（聖母）みたいになれと？バカ言わないでよ」
あまりにすごみに息をのんだ。と同時に何をそんなに向きになっているのだろうとも思った。
「でもいっとくはよ、私は子供を殺したりはしないは」
「可愛くはないんですか？」
「どの子より可愛いわよ」
俺の気持ちの中で富田洋子に対する意味もない偏見が溶けていった。男をもてあそぶだけの嫌らしい女というわけではないらしい。
「純真無垢なあの子以外、都会に住む子供なんてみんなクズ」
女はキッとにらんで吐き捨てた。あらわになった鎖骨が激しく息をする。
「どうせ貴方だって何か期待してここに来たんでしょ。だったらつべこべいわず素直になったら」
「なんか悲しいですね」
「笑わせるわ、じゃあ貴方が救ってくれるとでもいうの？」
「じゃなきゃ、私のいうとおりにしてたらいいのよ」
「この子みたいに、どうせ俺も使い捨てなんでしょ」

床で眠る少年の肌に洋子の残した爪跡が浮き出ていた。
「何が言いたいの？」
「確かにお金はほしいよ。でも俺が本当にほしいのは仕事なんだ」
彼女はいぶかしい目で俺を見た。
「だいたいあんた、さっきからたかが掃除屋ってバカにしてるだろ、でもな実際一番この仕事嫌っているは俺なんだ」
「ふうん、で？」
「もて遊ばれるのは我慢するよ。金もいらない、その代わり」
「その代わり何？」
「貴方の彼氏にもっとましな仕事して紹介してもらえないですか？」
「掃除屋はまともな仕事じゃないの？」
「解らない、でもこのままの生活じゃ死ぬまで浮かび上がれないだろ。高校しか出ていない俺でも一生に一度くらいチャンスが欲しいんだ」
「やけに現実的ね」
洋子は頬に手を当てて暫く考えていた。
「私が気に入らなければ君はあきらめるの？」
「仕方ないでしょ」
「ふうん。もしかしたら本当に使い捨てのままかもよ。気に入らないと言えばそれですむことだもの」
「分かっています。でもそうでもしなければ貴女は今ここでウンとは言わないはずだ」
「確かにそうね。私も極力人の人生には関わりたくないわ。でも君にその覚悟があるなら考えてあげないでもないわよ」
洋子に言ったことの半分は本心だった。どんな形であれ、こうしているのは今の生活から抜け出したいだけだった。
「あなたの言うとおりにします。だからどうか約束だけは忘れないでください。俺の望みはそれだけなんです」
「逆に哀れね、わかったわ。貴方がどこまで耐えられるか試してあげる。辛いと思うならいつでも音を上げなさい。引き留めないし、その方が好都合。でも本当に従順なペットになったら約束守ってあげるわ。さあペットならペットらしく服を脱ぎなさい」
もう躊躇いは捨てた。毒を身体に注ぎ込んで強くなる。人生のうちのほんの一時、記憶を捨てるだけだ。覚悟を決めてＴシャツを脱いだ。彼女に見つめられながらトランクスに手をかける。まるで女になったような気持ちだ。目をつぶり俺はそれを脱ぎ捨てた。
「あら、何大きくしてんのよ」
身体はずっと前から洋子に反応していた。恥ずかしさで逃げ出してしまいたい。
「さっき、女には不自由してないとか言ったくせに、どうせ電気消したままじゃれ合うおママゴトでしょ。その身体に本当の女教えてあげる」
それからの記憶はぼやけていた。ただ何度谷底に落ちても性器を握られて引き上げられるような、そんな光景がうっすらと霞んでいた。

あれから何度となく洋子に呼びだされていた。回を重ねる毎に彼女の行為は激しさを増した。彼女の喘ぎ声は快楽の喜びというより何かに復讐するような罵声に聞こえた。やはりこれで本当に良かったのだろうか。ある日、いつものように自宅のパソコンから
洋子宛のメールをチェックすると東新経済研究所から一通、届いていた。
彼女からこの宛先に送信することはあっても、ここから送られてくることなど今まではなかった。すこし期待しながらメールを開いた。内容は簡単だった。事務所の電話番号（０３－３２０９－？？？？）が変わったと１行だけ。事務連絡でももう少し何か書くものじゃないだろうか。洋子もそうだがこのメールもあえて必要以上の事を書きたくないと思えるほど簡素だ。前から気になっていたこの怪しげな名前の事務所、電話の局番からすると住所は新宿だろう。一体どんな所なのだろう。大久保が株の売買を任せている相手とは？
　そう考えたら足はいつの間にか新宿の裏通りを彷徨っていた。探し始めてから２時間、時計は午後４時を回っていた。初めはハローページで新宿付近の名前を探してみたが、東新という会社は掃除屋だけで、研究所と名の付つく事務所は見あたらなかった。仕方なく上を向きながら看板の文字を探した。都心のど真ん中といっても道一本裏通りに入ってしまえば薄汚れた雑居ビルだらけだった。寂れた店の看板がいくつも連なりタイルの剥げかけた外壁にしがみついていた。華やかな表通りの喧騒がまるで無縁のことのように感じられた。しかし何処を探してもそんな事務所は見あたらなかった。この時間行き交う人もまばらで誰に訪ねても知らないなとうるさがられるだけだった。途方に暮れる俺に「ニャオ」と青いポリバケツの上の黒猫が話しかけてきた。百合のぬいぐるみに似たしっぽの短い猫だ。
「なんだゴミ袋かと思ったよ。なあ、知らないか？東新経済研究所って」
俺は猫の頭をなでながら聞いてみた。（お前バカだな、電話帳に番号載せていない事務所が看板なんて挙げているはずないだろ　ニャオ）とバカにし建物の隙間に消えていった。確かにそれもそうだ。いくら裏通りとはいえ数え切れない事務所が存在し、その中から当てもなく見つけだすなど不可能だ。かといって電話をかけても教えてくれるはずもない。かえって警戒させるだけだろう。そう考えると集中力は切れ、一気に疲労が腰に来た。道路脇にある開店前のラーメン屋の壁にもたれてため息をついた。店の排水の臭いなのか側溝から上がってくる異臭が鼻につく。疲れのせいもあるのだろう吐きそうになった。ここじゃあ休めないと辺りを見回すと通りの角に開店中と看板を挙げている喫茶を見つけた。
　木製のドアはステンドグラスで飾られていて、開けるとクーラーの冷気が外に流れ出して来た。店内はカウンター席と３つのテーブル席。俺は一人の時はいつもカウンターの奥端の席に座ることにしていた。固定された丸い椅子に腰をかける。マスターはグラスを拭きながら軽く頭を下げた。手前から三つめの席には男が一人、カウンターに頭をもたれ寝ていた。間接照明の明かりとスリガラスから差し込む日の光が、調度品のそれぞれをうまい具合に浮かび上がらせていた。ドア一枚隔てたこの場所では時の刻み方がゆっくり流れているように感じた。あるかないかわからないがマンデリンを注文した。
「マンデリン」
静かに頷くマスター。どうやらあったらしい、安心した俺は座り直し出された水を口に含んだ。だいぶ歩き回ったせいか水が身体に染みこんでいく。少し生気を取り戻した感じがした。朦朧としていた視界が晴れ横の客の表情がはっきりと見えた。３０前後の少し疲れ

た男、不精ヒゲにノーネクタイ、リストラにあったサラリーマンか？まじまじと見るのも失礼と思い、近くに置いてあった朝日新聞を手に取った。『大手食品メーカー取締役インサイダー取引で捜査』白抜きの見出しがででかでかと踊っていた。なんでも有名食品会社の取締役が他人の名義を借りて自社株を運用していた、しかし多額の不良債権を隠していることがマスコミにばれ株は暴落した。それだけなら問題ないのだが、取締役は暴落まえに大半を処分していたというものだった。これもインサイダーなのだなと感心しながら、ついでにと社説を読んでみた。案の定綺麗ごとばかり、この新聞はいつ読んでも現実味を感じない。なぜこうも高らかに建前を記事に出来るのか一度聞いてみたい。おそらく彼らこういうだろう『真実を伝えるのが我々の使命だ』と。だがそれは彼らの真実でしかないはずでなのに、さも神が認めた真理の如く主張する。しかし誰も神にはなれやしない。１００歩譲ったとしても悪魔にだって言い分はあるのだ。聖なる剣のようにペンを振り回す記者、彼らはなぜ闇が存在しなければならないのか見つめようとしないのだろうか。もう途中で読む気も消え失せ新聞を置いた。すると男がゆっくりと頭をもたげた。顔はかすかに赤い。こんな日の高いうちから飲んでいるところからするとやはり仕事をしていないのだろう。俺の存在に気付いた黄色い目がじっとこちら凝視する。自分のテリトリィーで見慣れない若造が何をしているとでも言いたげに下唇を押しだした。マスターは表情一つ変えないでコーヒーを俺の前に置き、そして部屋の奥へ消えた。
「坊や、いくつだ」
突然話しかけられ返答すべきか迷った。相手は酔っぱらいだ、無視すればどんな難癖をつけられるか分かったものじゃない。しかし折角のコーヒーに手をつけないでこの場を去るのも惜しい。しかたなく愛想笑いをしながら彼に２０歳である事を言った。
「いいな、若くってな。何でも面白くて仕方ないだろ」
男の口調は顔に似合わず柔らかなものだった。それにつられてついまた返事を返してしまった。
「若いだけで金もないし、学生みたいに遊んでいられないから辛いですよ」
世に言う世間話とやらは得意だ。男は頬杖をつき顔を俺に固定しタバコをくわえた。
「フリーターか？」
「いいえ１６の頃から働いています」
「親はいないのか？」
「いいえ・・・」
「なんだ家出か」
黙って出てきたわけではないが、家出同然のように出てきた俺には頷くしかなかった。
彼の顔が優しくなりタバコをすすめられた。吸えないとは言い難く、一本抜き出すと火までつけて貰った。
「生まれはどこだ」
「新潟です」
「田舎暮らしが嫌だったのか？それともなんかしたくて出てきたのか？」
「どちらだと思います？」
吸わないまま指の間で煙草の火が外側の紙を茶色に焦がしていく。
「同じことだ」

質問した本人にそう言われては返す言葉に困るが確かに大差ないなと感じた。
「年寄りがこんな都会に暮らしたいなんて思わないだろ。お前達みたいな訳のわからん夢想家がいるからこそ、この街は熱いんだろうよ」
それがここの歴史だと目が誇らしげに語っていた。
「でも俺はもういいな　早くこんなところからおさらばしたいよ」
男はゲップとあくびを同時にしながら背伸びをした。この人は仕事をしているのだろうか？俺も彼のあくびに吊られそうになりながら考えた。マスターが両手に２本づつのウイスキーの瓶を持って奥から戻ってきた。
「あの、ここは喫茶店じゃないんですか？」
男との会話で気分がほぐれマスターに聞いてみた。
「何でも屋ですよ」
そういうと上の棚の観音開きの蓋を開けた。ネームプレートの付いたボトルが並んでいる。殻に近くなったボトルを取り出し僅かに残った酒を一つの瓶にまとめるマスターの背中は俺の問を喜んでいるように見えた。男は唇の脇の白い泡を袖で拭いた。
「この辺りはみんな喰う・飲む・抱く、なんでも叶う所さ。いわゆるボーダレスだな、な、マスター」
「そうですね環境が整備されているというか、共存共栄の関係が成り立っているというのか」
マスターは残っていた酒を一本のボトルに集め、何もかかれていないプレートをその首にかけた。
「坊やは飲めるのか？」
男はタバコを持った手で酒を飲む振りをしてマスターに合図をした。
「いいえ」
酒が飲めないことを俺は恥ずかしく思っていたので顔を伏せた。
「じゃあ、俺のおごりだ。鍛えてやるから飲め」
遠慮しようと首を振ったのだが水割りが俺の前に置かれた。
「お客さん、寺田さんの行為無駄にすると怖いよ。あはは嘘、嘘。でも売り上げにも協力してくださいよ」
男が寺田という名だと知った。
「さあ、飲め」
妙なことになったと思ったが一口だけと割り切り口を付けた。しかしゲコの俺にもこれが以外に飲み易く口当たりのいい酒だっだ。思わず一言、
「へえー美味いですね」
などと余計な事を言ってしまったからだ。
「そうか美味いか、安酒でもばかにしたものじゃないだろ」
「そんな、安酒なんて言わないでくださいよ。他のお客さんには高い酒だって言ってるんですから」
「今更なに言ってんだ。さっき俺の目の間前で残り集めてただろうよ」
「そりゃあんまりだ」
「じゃあなんだっていうんだ」

苦笑いをするマスター。
「これをほんとのブレンドモルトっていうんですよ」
俺には仲のいい二人がじゃれ合っているように見えた。そして陽気な会話はカウンターを何度も往復した。寺田は気分がいいのかまるで水で持たすように俺のグラスに酒を注いだ。少しでも空いたものなら容赦なく酒は満たされ、最後は自分でもよく憶えていない。気付いたときは蛍光灯がまぶしい部屋でバケツに頭を突っ込んだまま眠っていた。どれくらい吐いたのか、むせかえるほどすっぱい胃液の匂いがした。とにかく頭が殴られたように痛い。自然とうめいてしまっている。すると誰かが背中を叩いた。俺を呼ぶ姿がうつろな目にぼんやりと映った。
「しっかりしろ、水飲め」
手渡された水を口に含みすぐにはき出した。よだれがのような粘液質の水が口の周りからしたたった。そしてもう一度水を口に含むと今度は喉の奥へと押し流した。旨かった。
身体の隅々にしみていく。一息つくと不自然だった体制から身体を起こしソファーに座り直した。目の前にいたのはあの酔っぱらい男だった。しかし一体ここは何処なのだろう。そして今何時なんだ。まだいくらかぼやける眼でタグホイヤーを睨み付けた。けれどどうにも短針と長針の区別がつかない。仕方なく部屋を見回した。山積みの書類で雑然としている机、それに沢山のファイルが詰まった棚があった。
「やくざの事務所じゃねえから安心しな」
寺田は椅子に反対に腰掛けこちらを眺めていた。
「今何時でしょうか？」
「９時だよ、待ってる女でもいるのか？」
「まあ」
「ぬかしやがれ」
乱暴な言葉とは反対に目元のしわに優しさを感じた。
「寺田さんには奥さんとかいないんですか？」
「一度は一緒になろうとした女がいたことはいたがな」
たしかに身なりからして女が世話をしているようには見えない。けれど寺田から受ける印象は同性の自分でもどこか惹きつけられる所があった。寺田は椅子から立ち上がり部屋の隅の扇風機のボタンを押した。汗ばんだ胸元を心地よい風が通りすぎていく。
「へぇ」
「信じてないだろ」
「そんなことないですよ」
「これでも昔はもてたんだ」
昔という言葉を使わなければならないほど老けているようには見えない。一体この男の過去に何があったのだろう？しかし、これ以上この話を続けて自慢など聞かされても困るとやっかいだと思った。
「しかし、なんか書類の山ですね、それも数字ばっかり」
「ああこれか、くそみたいな仕事さ」
彼にも酔いが残っているらしい。初対面の俺に不満を隠そうともしない。扇風機の風に舞いあげられ一枚のレポートが俺の前に落ちた。目を疑った。東新経済研究所という文字が

レポートの右上に印刷されていたからだ。
「寺田さん、ここにかかれてる東新研究所ってこの事務所のことですか？」
拾い上げたレポートを机に戻し、さりげなく訪ねてみた。
「ああそうだ、でも何で俺の名前しってるんだ」
「だってさっきのマスターが何度もそういってましたから」
なるほどと寺田はうなずいてみせた。
「そうだな」
「すいません、俺は田代　学といいます」
偽名を使った。まだこの男が何者かからないからだ、もし本当にここが東新経済研究所だとしたら本名はいえない、富田洋子に知れる可能性がある。
「学かあ、いい名前だ。よしじゃあ教えてやる俺は寺田一美、女みたいな名前だがオカマじゃねえぞ、この事務所のたった一人の社員であり社長だ」
意外だった。富田洋子を通じて大久保信士が株買収工作を依頼している事務所となれば、それなりの場所を想像していた。
「何の仕事をされてるんですか」
寺田の口から言わせたかった。
「何の会社に見える？」
「経済研究所って言うくらいだからシンクタンクとか？」
「おまえ若いくせによくそんな言葉しってるな」
新聞など読みもしなかった昔の俺ならまず縁のない単語だった。しかし百合と一緒にいると経済新聞やブルームバーグのニュースを自然と見るようになり、いつの間にか覚えていた。だからといって実際それが本当はどんなものなのかと言われると人に説明できるほどのちしきでもない。
「最近、ニュースによくでてますよ、野村とか大和とかのそんなのが」
以外だとでも言いたげに寺田は自分の顎に手を当てた。
「俺の仕事はな含み損株かかえ売れずにいる株主に金を腐られせてる金持ちを紹介するのさ」
「へぇ、でもやっぱり難しそうですねえ」
「まあな、ああそれから教えといてやるがシンクタンクなんてところ、ありゃ糞だ」
寺田はせせら笑って見せた。
「奴らはいいかげんな占いで食ってるような詐欺師さ」
シンクタンクの経済予想など天気予報よりわるいと寺田はこけ下ろした。大手と言われるシンクタンクがまことしやかに示す半年後の経済指標でさえ各社ばらばら。もっとたちの悪いのはどちらに転んでも言い訳できるような内容を正々堂々と公言する会社さえあると教えくれた。
「経済なんてな明日は明日の風が吹くものさ」
「はあ、そんなもんですかね」
「北風と太陽なんて童話があるが、この世界に太陽なんてない。風だけだ、ただ追い風に背中押されて空に舞い上がか､反対に向かい風に身ぐるみはがれて死ぬかの二つに一つだ」
「で寺田さんは？」

「きくなよ、見てわからないか」
よれよれの背広を広げ、雑然としている事務所の中を視線で指し示す寺田。死んだかどうかはわからないが成功しているとは言い難い。寺田はがらがらと窓ガラスを開け、遠くにそびえ立つ都庁の誘導灯の赤い光を見上げ鼻をすすった。
「俺な、半年前迄は大きな証券会社で働いてたんだ」
「なんかあったんですか」
「裏の世界の客との取引で大損させてクビになったのさ」
唇を噛む表情はにがにがしくそうだった。言いたいことはたくさんあるそんな風に見えた。
「大変だったんですね」
おまえに慰められてもなみたいな空気が流れた。ブーンという扇風機の音しかしていなかった部屋に突然電話が鳴った。１回・２回・３回、寺田は受話器を取った。耳をそばだてると微かに女の声が漏れてくる。
「あぁ、もう少し詳しく調べろ。あれだけじゃ大久保の動きはわからない。先を越される可能性だってある。失敗が出来ない事くらい分かっているだろ。もし黒岩に見捨てられたらこんどこそ破滅だ」
（黒岩？）
「黒岩？今どこにいるかなんて俺が知るか、そんな事より早く聞き出せ」
寺田は受話器を置くなり拳を机にぶつけた。黒岩ってあの黒岩だろうか？それにもし今電話している相手が洋子だとしたら大久保との関係はどうなるのか？整理されていたはずのそれぞれの関係が崩れていく。唇を噛みしめる寺田の顔には焦りの色が額の汗と共に浮きでている。自分の世界に入ってしまった寺谷恐る恐る声をかけてみた。
「あの・・・」
「ああすまん、驚かせたな！」
壁に掛けてあった背広の内ポケットからウイスキーの小瓶を取り出し、一気に飲み干すと大きく息をはいた。
「飲むか？」
突き出された細長いボトルには薄緑色のラベルにロシア文字で『vodka』とかかれていた。それを見て胃が痛くなった。というのも昔、独りですんでいたぼろアパートで同僚何人かと男だけのクリスマスをしたことがあった。中に酒好きの男が一人いて、そいつ買い込んできた酒の中に今寺田が手に持っている酒と同じ物があった。アルコール度数７５度。俺はそれを知らずに飲み、たった一杯で胃に穴を開けてしまった。あのときの苦しみが一気にフラッシュバックし、俺はとんでもないと首を振った。する寺田は
「じゃあ遠慮なく」
と水でも口にするように飲み始めた。喉仏が上下に動き酒が彼の胃に注ぎ込まれていく。口元からこぼれた液体がテーブルに広がり瞬時に蒸発した。酒の臭いと言うより注射の臭いがした。中身が半分ほどになったとき寺田に質問をぶつけた。
「もしかして、さっきの電話、結婚の約束したって言う？」
「いや、だらしない４０女さ、それも男なしじゃ生きられないあばずれだよ」
質問に酒の味が変わったのか、残りの半分を一気に飲み干す寺田の表情はまるで苦い薬を飲むようだった。寺田の語る４０女のイメージが富田洋子と重なった。

「なぜそんな女と？」
「取り憑かれたんだろ、一生逃げられない亡霊のような女だ」
寺田の顔をまじまじと眺めた。頬がこけ、目は窪み、肌にはいくつもの染みが浮き出ていた。ともすると病人のように見えなくもない。もし寺田の言葉が本当なら俺も取り憑かれているかもしれないと怖くなった。寺田は苦虫を噛みながら空になったボトルをゴミ箱に投げ捨てた。
「女は怖いよ・・・」
そういうと机の引き出しから同じ酒を取り出し、あっという間に蓋をあけた。
「飲み過ぎですよ」
「ガキがなにいいやがる、ほっとけ」
完全に泥酔モードに入った寺田はろれつ回らず目は座っていた。おそらくこの男はいつもこうやって独り飲んでいるのだと思った。止めても仕方ないと俺はソファーに戻り腰を下ろした。すると寺田はぽつりぽつりと話し出した。胸に支えている後悔と懺悔、それが酒の力と無知な聞き役というゴミ箱が揃ったせいで一気に溶け出したのだろうと感じた。
「女は俺が会社の接待でよくつかう銀座のホステスでな、ある時期、俺はそのホステスと付き合った。美人で優しい女だったけど、俺より一回り以上も年上でな、客の指名も減った下り坂の女だった」
話に洋子の姿を重ねながら静かに聞いた。時に悪魔のように俺を責め立てる女の隠された素顔が知りたかった。
「若いホステスの鼓膜が破けそうな笑い声に疲れ、その女の深さに安らぎを求めた。しかし所詮は客とホステス。どんな甘い言葉を囁きあっても遊び、俺はそう思っていた、そして女もそうだと疑わなかった。だから避妊なんてしなくても出来たことはないという女の言葉を真に受け、何もかまわず女との濃厚で奔放な性欲を楽しんだ。するとある日、女から生理がない、子供が出来たかもしれないと聞かされた。ひどい話だが本当に俺の子かと聞いたさ。間違いないと泣き出した。ホステスの流す涙なんて信じられるか。だから店のママに女の事を聞いた」
「答えは？」
「間違いないだろうってよ。女は本気だったと聞かされた。俺が”愛している”と言ってくれたと喜んでいたと、それが悪いんだと。それから女は変わったのよとな」
洋子が本当に心から笑った顔を俺は見たことがない。あの女はいつも憎しみに裏打ちされたようなあざ笑う目しか見たことがない。
「女抱いてるときになんと言おうといいだろうよ。それで燃えるなら」
寺田が言うように男から女へささやく愛は一時の花束、枯れ落ちてしまえば言ったことさえ覚えていない。いい加減といわれればそれまでだが女のように受け取った花を押し花にしてはおけないのが男。俺にも彼の気持ちは素直に納得できた。
「１００歩譲って俺が悪かったとしよう。だけどそれを認めたからと言ってお前ならどうする？悪かった産んでもいいよといえるか？」
寺田の語気は荒くなり肩の付近は汗でびっしょり濡れていた。
「愛してはいなかったんですよね？」
「あたりまえだろ。だから金は出すから早く堕ろせっていったさ。だが女は最後だと思う

から生みたいって・・・好きだから一緒に暮らしたいだとよ。結局、初めからそのつもりだったんだろうよ」
女の罠にまんまとはまった自分の愚かさを後悔する寺田。他人事ではないと思った。
「その時の俺には結婚を決めていた女がいた。なのにどうして４０過ぎの場末の女と暮らせる？なんで俺が面倒みなくちゃならない？だまされた俺も悪いけど女も卑怯だろうよ」
寺田は頭をかきむしりながら部屋の中をうろつき出した。
「何度も産ましてくれと女に懇願された。俺には女が次第に悪魔に見えるようになって、気づくと女の腹を蹴るようになっていた。そのたびに女は背を向けて腹を守って泣きながら叫んだ。お願いこの子だけは、私の命だけは殺さないでとな」
馬鹿と言ってしまえばそれまで、誰も寺田の愚かさを否定する者はいないだろう。しかし、おれが彼だったとしたら同じ過ちを犯さないだろうか？というより、女にせがまれても必ず避妊するといえる男などいるのかとさえ思えた。
「そんなやりとりが半月ほどつづいた。そしていつの間にか俺の前から女は姿を消した。店の女に聞くとどこかの会社の社長だか会長だか分からない爺にか恋われて店を辞めたといっていた。なんでも前から話はあったけれが断っていたらしい。それが急に気持ちが変わって会長についていったと。俺にはあいいつの考えている事がすぐにわかった。女はその会長だまして、そいつの子供として俺の子を生むつもりなのだと」
次第に酔いから冷めていく俺とは反対に寺田の意識はさらに酒に支配されていった。
「でも妊娠期間逆算すればすぐに相手にばれるでしょ」
「必死だったんだろ」
富田洋子の顔が浮かぶ。落ちぶれた人間としか見ていなかったその顔の裏で、寂しげな女性の本能が執念となって揺れていた。
「それから２月ほど過ぎたある日、俺は産婦人科の医者に株の売り込みに行った。そこで診察室から出てきたあの女と再会した。女のうつろな表情が俺の胸を刺したよ。ほっておけなくてホテルにつれていった。女もだまってついてきた。そして部屋に入るなり『死にたいってな』急に床に泣きだしやがった」
ボトルを持つ手が小刻みに震え、きつい酒に荒れた唇が真っ赤に腫れて光る。
「ダウン症の確立が高い、なんで６ヶ月にもなるまで放っておいたって医者に怒られたらしい。もう堕せないってな」
４０過ぎの高齢出産で危険も多いからと医者が色々な検査をした過程で、羊水のＤＮＡに異常が見つかったらしい。
「声、枯らして泣いてたよ。女は俺と別れてから病院にも行かず、流産する可能性もあったのに何度も会長に抱かれ月日の過ぎるのをた待ったそうだ。４ヶ月後、会長には子どもが出来た、産みたいと説得したらしい。相手はさすが金持ち、俺みたいに無理に堕せとはいわなかったらしい。しかし産んでもいいが認知はしない、その代わり金は出してやると条件を付けた。４０過ぎの女には一人で子供を育てられる経済的保証がほしかったんだろうな。女は納得した」
この都会でそんな関係が幾つ存在するのだろうか、話では聞くが実際に俺のような安月給の者にはあまりにも非現実的なことだった。
「助けてくれと俺の足にすがる姿に正直いって戸惑った。いつか赤ん坊が自分の子でない

ことに男が気付くかしれない。それに障害を持って生まれた子供と自分を会長が本当に面倒みてくれるのか不安を通り越し恐怖だと女は震えていた」
そういえば洋子の泣き顔も見たことはない。寺田の口からウォッカがこぼれた。酒がよれよれのＹシャツを濡らし染みが広がっていく。
「やっかいな事さ、おまえだってそう思うだろ？」
同意を求められても返事のしようがなかった。
「それで、どうしたんですか？」
「ん？、んんん、さっき言ったろ。女のかかった産婦人科の医者は俺の客でな、そいつ頼んで子供が腹に入った月を偽ってニセのカルテをもう一つ作ってもらった」
「そんな事してやばくないんですか？」
「そりゃばれりゃあ医師法違反でつかまるだろうな。だがその医者、株で相当損をして病院の経営が危うくなっていてな。だから俺が他の客の株売って金作ってやるっていったらすぐにいう事聞きやがった。会社じゃ誰もがやってたことさ。ベンチャーがらみの通信関連株が一晩で竹の子のように育ってたから、俺ぐらい知識持ってたらそれくらいの金はなんとでもなった。そした女には子供の病気の事は絶対に言うなと口止めした。生まれてからもし相手の会長が面倒みないっていったら認知の裁判起こすって言えとな。大会社の会長ならそんな危険を犯してまで親子二人を捨てはしないだろうと女を安心させてやった」
　昔ＮＨＫのドキュメンタリーやっていた、四十雀はカッコウの巣に自分の卵を入れて、自分じゃあ子供を育てないと。この男が四十雀ならこれほど苦しまずに済んだのにと思った。
「結局医者の言うとおり一目瞭然のダウンだった。それも重度のな。他の赤ん坊は真っ赤な顔して泣いているのにあの子だけは声一つださない。横で同じようにガラス越しに子供を見ていた夫婦が指さして言ったよ。『あの子ダウン症よ！』ってな、その後旦那が自分の子供見て『よかったな、うちは普通で』ってニコニコしてた」
寺田の頬を涙がつたった。蒸し暑い事務所の外では救急車のサイレンが響いていた。そのリズムはまるで彼の心臓の鼓動のように聞こえた。
「俺は女の病室に行った。女は６人部屋の隅で布団にくるまって泣いていた。女が何で泣いているのか他の母親達は知っていながら、反対のベッドで生まれた赤ん坊のことを楽しそうに話し合っていた。残酷な女達を心から憎んだ。そして女も憎んだ。いう事聞いて堕していれば赤ん坊もあんなふうにして生まれてこなくて済んだんだ。そしてもっとも憎んだのは周りの者全てに責任を押しつけ、さらに自分の子を恥ずかしいと思う俺を憎んだ」
「だったら貴方がその人を引き取ってやればよかったのに」
寺田は首を振り力無く肩を落とした。
「俺にはもうそんな余裕はなかった。医者に流した金を取り戻そうとして俺はやばいところから金を借り、それを光通信につぎ込んだ。。。初めは良かったが、今おまえいくらか知ってるか？１０分の１だぞ。本来なら何千万もの利益が生まれているはずなのに現実にはそんなものどこも無かったんだ。俺は自分の能力を過信していたと要約きづいたの。もう先は見えていた、このままだと金貸しに殺されちまうってな」
成れの果て、そんな言葉よく似合う。決して卑下しているんじゃない。女と出会わなかったら天まで駆け登れた男かも知れない。なのに今は地の底でもがき苦しんでいる。寺田と

いう男を弱い身勝手な人間と俺は思えない。むしろ優しい正直な人間なのだろう。でなければ自分から去っていた女の事など気にかけはしないし、望みもしない子供を女が勝手に産もうとするならなおさらだ。本当に身勝手な奴は過去を振り返らない、いや返れないはずだ。寺田の顔を見ているとそう思えてならない。ろれつの回らない口で呟かれる後悔。
「それからというもの赤ん坊は病院のベットに寝たまま。あんな子供でもかわいいんだろうな、毎日のように女は病院に行ってるよ」
　俺がマンションに呼ばれるのはいつも午後過ぎと決まっていた。その理由が要約解った。午前中、洋子は病院の子供の所にいっているのだ。そしてあの時彼女が言った「純真無垢」という意味も頷けた。ダウン症の子供の笑顔はあまりに屈託なく清らかでエンジェルベイビーと呼ばれてると聞いたことがあった。しかし不思議なのはなぜ大久保が洋子に接点があるのかと言うことだった。寺田は俺の疑問に答えるかのように尚も話を続けた。
「女に泣いている暇なんか無かった。頼りの会長が急死した。もう女に援助してくれるものもない。金も何もない女を拾ったのは死んだ会長の側近だった。なぜか分かるか？」
寺田の問いに俺は富田洋子の言葉を思い出した。『道具』。しかしその言葉が持つ正確な意味は分かってはいない。寺田は多分その事を言おうとしているだろう。
「利用するため？」
「そいつだけが女の子供のことを知っていた」
「会長の子供だと？」
「そうだ、だからこそ洋子が必要だった」
酔いすぎて自分が何を話しているのかも曖昧になっているのだろう、寺田の口からとうとう富田洋子の名前がでた。しかし俺にはそんなことは対して重要なことではなくなっていた。ボトルを持つ寺田の手が激しく振るえた。
「会長の死後、会長婦人が奴に約束通り自分の息子に社長の椅子を明け渡せと吠えた。会長が逝っちまう前なら奴もそうしただう。だが大久保も欲がでたんだろうな」
「それとどうして女が？」
「急ぐな話はまだ続く」
彼の酔ってうまく回らない口調がもどかしくてしかたない。
「それでかみさんは大久保と敵対する役員と手を組んだ。それが黒岩さ」
二本目のボトルもあと少し、気付くと寺田は女と言ったり洋子と名指ししたり、奴と言ったり大久保といったり、終いには黒岩の名も口にしていた。もう自分が何を話しているのか分からないのだろう。秘密を覆い隠すベールが扇風機の風に揺れハラハラと捲れていた。
「けれど役員の大半は大久保側、黒岩も手の出しようがない」
「なら彼女なんか必要ないんじゃないですか？」
「そう思うか？でもな株さえもっていればいつでも社長の首なんて据え変えられるのさ」
「なんで黒岩達はそうしないんですか」
「したくても首すえかえるにはそれだけの株を持っていなくちゃ出来ない話でな。要はかみさんや息子が相続した分だけじゃ足りなかったていうことさ」
いつになったら話が見えてくるのだろう。寺田の舌先が酒に荒れイチゴのように膨らんでいる。
「黒岩は役員をすえかえるだけの株を手に入れようと動き出した。それを察知した大久保

は手を打った」
「その女性なんですね」
「そうだ、子供が会長の子供ならかみさんと息子の相続した取り分からぶんどれる」
ようやく洋子の存在価値が見えてきた。つまり富田洋子という棒の刺さった古電という砂山の砂を大久保・黒岩とで取り合っているのだ。どちらに棒が倒れるか、駆け引きの中、洋子は二人にされるがままたっているしかない。しかし腑に落ちなかった。なぜ大久保は切り札の洋子をすぐに使わないのだろう。そうすれば話はすぐに決着がつくはずだ。考え込む俺に寺田は言った。
「そら不思議だわな、大手出来るのにそれをしないんだから」
「ええ、わかりません」
「いいか、会社に一番大切なのは信用だってことは解るな」
「ええ、なんとなく」
俺の答えを聞いて寺田はにやけた。その目は、やはりまだまた子供だなと言っているように見えた。
「認知の裁判はちゃんとした証拠があっても半年はかかる。その上いったん相続の終わった財産をまた再分配しようとすると３年必要だ。その間会社はどうみられる？」
確かに数年トップ同士が裁判で争えば経営どころではなくなると思った。お家騒動はマスコミの格好の餌食となり、業績に響かないとはいえない。
「大久保は洋子を黒岩への脅しに利用した。なにかあったら裁判起こすぞってな。そして黒岩が手をこまねいているうちに、対抗できるだけの株を手に入れようとしているのさ」
寺田の話によると役員の首を切るには相当数の株必要だが、切られないようにするには役員解任ほど多くのはいらないらしい。
「大久保は会社にダメージを与えることなく経営者として最前の守りと反撃を選んだというわけだ」
その世界では当然なのかもしれないが、大久保の経営者としてのバランス感覚になるほどなと素直に感心した。古電の会長が彼に社長を任せたくなるのも頷けた。しかし寺田のしどろもどろの口から出た言葉は俺とは真逆だった。
「しかしそれがかえって大久保の命取りなってる」
現在進行形の寺田の言葉、そして猫の目のように変わる大久保と黒岩の立場。今度は誰が本当に優位な位置にいるのか俺にはさっぱりだ。
「黒岩はとことん女のことを調べあげた。つまり子供が会長のでなく、俺の子だって事をな。口の堅いはずの銀座のママから聞きだし、そして産婦人科の医者にも警察に密告するとおどしすべて吐かせた」
「黒岩はそれを大久保に教えたんですか？」
「もし、おまえに絶対殺さなくちゃならない敵がいたとしたら、その相手の拳銃に銃弾が入ってないことわざわざ教えるか？」
「いいえ」
「黒岩は洋子を反対に利用したのさ。その秘密をばらさない代わりに大久保の株の購入先を教えろとな」
ようやく全容がみえた。富田洋子は黒岩に脅され大久保に飼われているふりをしている。

たとえそれが薄氷の上を渡るものだとしても、頼る者のない彼女にとって受け入れざるを得ない選択なのだろう。子供を抱きかかえたまま凍てつく冷水に落ちるわけに行かない。
「黒岩にとって、洋子と借金で首の回らない株屋の俺を利用することは絶好の組み合わせなんだろ。これがうまくかたづけば、俺は借金帳消しになるし女は暮らしに困ることはなくなる」
「信じられるんですか、その黒岩という人？」
「俺たちは鵜飼いに首根っこ縛られた鵜さ、奴を信じて働くしかないの。じゃないと生きる道はないんだ」
いくつもの操り糸に踊らされる二人。失敗は破滅を意味する。そんな緊張の毎日を送る中で寺田も洋子も荒れずにはいられないのだろう。ましてや彼女は病気の子供をかかえて、必死に生きている。涙をみせる相手もなく心の闇をたたき壊すように、男の身体を利用し憂さをはらしている洋子の気持ちが今理解できた。かわいそうと言ってしまえばそれまでだが、俺がその言葉使うのは彼女に失礼な気がした。
「あの。。」
「なんだ」
寺田はもう話す事さえ怠惰そうに聞き返した。
「結婚を約束していた女性はどうしたんですか？」
崩れる一歩手前だった寺田の意識がピンと張りつめた。
「別れたさ、当然だろ」
「そうですよね」
俺が簡単に納得してしまったことがかえって気に入らなかったのか、寺田はさらに自虐的な事実を俺に唾と一緒に吐いた。
「今は黒岩の女になってるよ」
「なんで・・・それに、寺田さんはそれでいいんですか」
「しょうがねんだよ。俺は株をあつめる裏の顔、彼女はその株を正規に取り引きしたようにみせる表の顔として必要なんだ」
「でもそれと、関係を持つことは・・・・」
「俺が見限られたのさ。強い男に女が乗り移っただけのこと。なんか不自然か？自然だろ」
寺田はその女の名前を口にしないままとうとう酔い潰れた。
「結局、俺達は赤ん坊を餌に生きてるのさ、親孝行な子供だよまったく」
うわごと一声残し、寺田は壁を背にいびきをかきはじめた。彼の額には深い皺が幾重にも重なり疲労の影が目の縁に浮かんでいた。俺は寺田をそのままに事務所を後にした。時計は１０時を過ぎていたが、新宿のネオンはさあ本番と七色の光をまき散らしていた。ここには夜という言葉の意味がない。このやるせない現実から速く逃げたい、俺は足早に歩いていた。

　俺は最終で帰ってきた。駅の前のロータリーになま暖かい風が吹き込み、湿度の高い空気は息をするが辛かった。とにかく早く百合の笑顔が見たかった。遅くなってしまったけれど、もしかしたらまだ起きているかも知れない。彼女の好きなアイスクリームでも買っ

ていこうと思った。もし寝ていたら明日の朝二人で食べたらいい。寺田から富田洋子の話しを聞き、些細なことでも百合にしてあげてなくなっていた。自分をごまかしていることぐらい１００も承知している。でも喜ぶ顔がみたい。急ぐ気持ちを抑え、いつものコンビニに立ち寄った。扉を開くと店内の冷気は首筋の汗を凍らせほど冷たかった。５，６人の客が何とはなしに陳列棚を眺めていた。気付くと携帯をバッグにしまおうとしている百合がいた。
「百合」
急に背中を叩かれて彼女は一瞬身を硬くした。驚かすつもりではなかったのでその反応にかえってこちらが慌ててしまった。
「どうしたの？ゆう」
強い口調だった。
「とうしてって・・・ん、アイスでもと思って」
子供が親にとがめられ、言い訳でもするように俺は頭をかきながら答えた。
「じゃなくて、ずいぶん帰り遅いから」
「急な仕事入ってね、で？百合も今帰ってきたの？」
「今朝いわなかったっけ、今日は会社の接待で遅くなるって」
そうかもしれない。普段曖昧に聞いているせいか相手に強く言われてしまうと反論が出来ない。またも頭をかきながら愛想笑いでごまかした。
「タクシーで帰ってきたの？　最終に乗ってなかったから」
「うん」
言葉少ない彼女にどこへ電話してたのなんて聞けなかった。
「そうか接待ね、そうだよね。百合は綺麗だし、会社の人も連れていきたいよね、ホント物忘れが多くて」
「しっかりしてよ若いんだから」
「今さ、百合にアイスクリーム買おうと思ってきたんだ。ちょうど良かった好きなの選んでいいよ」
何故か無口な彼女、俺は精一杯の笑顔を作りアイスボックスの蓋を開けて見せた。
「仕事の時によく食べるんだけど、このバニラなんかどう？１００円でいっぱい入ってる。バニラ嫌ならイチゴもあるよ、どっちにする？それとも氷の真ん中にクリームの埋まってる小豆にする？これも捨てがたい、５０円だけど回りの氷とさクリームぐちゃぐちゃにして食べるとキーンと来てね、ねえ早くどれがいい？」
バナナのたたき売りのように何とか雰囲気を盛り上げようと俺はおどけて見せた。
彼女が笑った。ようやくいつもの笑顔にもどった。
「そう、百合５０円のがいいの？なかなかつうだねお客さん」
買い物かごにコーヒーフロートアイスとイチゴフロートアイスを入れようとする手を彼女は止めた。
「これはいや、ほんとになんでもいいのね？」
百合のいたずらっぽい目をした。
「お姫様なんなりとお好きなものを」
「ジイ、私はこれがいいわ」

俺が開けた蓋と反対の蓋を百合は開けた。白い気体が漂う中に小さなアイスが入っていた。
「これがいい」
迷うでもなく４つ取り出し嬉しそうに俺に手渡した。ハーゲンダッツのグリーンティー２つにバニラにストロベリー、エッ２８０円？？何この値段。ちょっとというかとても高い。自分の知っているのはせいぜい１２０円程度、こんな小さなアイス、今まで目に入らなかった。こんな物もあるんだなとまじまじと眺めた。
「これが美味しいのよ」
「なんか少なくない？いいの？こんなので」
「これがいいの」
「ふーん」
自分が食べるならこんな高いアイスは絶対買わないだろうと思う。代金を支払っている俺を残して、百合はビニール袋を左手に持ち先に店を出た。後を追うように外へ出ると彼女の姿がみえない。先に帰ったのだろうか？すると薄暗い電信柱の方から微かな嗚咽が聞こえてきた。目を凝らしてみるとしゃがみ込む彼女がいた。俺は駆け寄った。
「どうした、気分悪いのか、しっかりしろ」
もどしたのだろう口に手をあてている。紺のスーツが汚れている。
「ほら、ハンカチ」
汗くさいそれを百合に手渡し背中をゆっくりさすった。
「がまんするな、誰も見てないから吐きな」
「ううん　もう大丈夫、ごめんね」
細い肩を抱き寄せ震える身体を温めた。
「ちょと疲れたみたい」
俺の胸に顔を埋める百合。
「じっとしていろ」
コクリとうなずきそのまま暫く無言の時が流れた。二人ともアスファルトに座ったまま電信柱に寄りかかる。カエルの鳴き声を聞きながら百合の呼吸を数えた。そしてようやく深い息が吐き出されるようになった。
「これじゃあ、アイスクリーム食べられないね」
うつ向いたままポツリと百合が言った。可愛そうで頭をなでた。何故か髪の毛のすそが濡れていた。冷や汗で濡れたのだろうか？
「直ぐなおるさ、アイスは逃げないよ」
「そうだね」
「おぶって行ってやるから背中につかまれ」
「いいよ、歩けるし恥ずかしいよ」
「いいから、さあ、こんな遅くに誰も見てないよ。おまえをおんぶできるのは俺だけなんだから、はやく」
お前などと普段は言わないが何故か今は自分が男であるという事を強く意識していた。守らなくてはというそんな気負いとでも言おうか、彼女も仕方なく身を預け首に手を回した。お尻を支えながらゆっくり腰を上げ百合に話しかける。
「いやー、大きいお尻だな。オモー」

「もう、ユウったら」
実際はなんと軽いこと事だろう。しかしこの小さい身体が俺にはなぜこんなにも大きいのか、手の中に灯るローソクの火を風に消されぬようにゆっくりと大切に夜道を歩きだした。
「医者に行かなくていいか？」
「いいよ」
背中が答えた。はやく帰って横にしてやろう、やはり百合がつらいのは俺もつらい。
「ユウ」
「どうした？」
「私をお嫁さんにしてくれない？」
いいよ、と答えたい。けれど
「どうしたの？」
口はそう動いた。決してそうなる事を拒んでいるわけではない。むしろいつかそうなれたらと思う。だが今の俺の稼ぎでは百合は一生苦労しなくてはならない。今まで俺がそんな言葉を半分冗談で言ったことはあったけれど、彼女はいつも笑って聞いていただけ。ただいつも言うのは（一緒にいたい）とそれだけ。その言葉はいつまでのことさすのかは怖くて聞けないでいた。
「いゃ？」
頬に頬あわせて百合がすりよる。
「そうじゃないけど」
街灯に照らされた道路脇の木の葉がざわめく。
「お金もないし、もう少し待って、もう少し」
張り付くような空気の膜が足取りを緩慢にしていく。
「じゃあ、もし別れてって言ったら？」
「そうしてほしいの？」
「ん～ん」
普段の百合じゃない！女の気まぐれ？戸惑う俺に彼女は呟いた。
「私ね、暫く出張しなくちゃならないの」
「暫くってどれくらい？」
「わからない、仕事次第。たぶん一ヶ月ぐらい」
「いいよ、仕事じゃあしょうがないもの」
「止めないの？」
大げさな言葉にどんな大変な事があったのかと思えば。
「それで寂しくてあんな事言ったのかい。びっくりしたよ」
俺に抱きつく彼女の腕の力が心なしか強くなった。
「一ヶ月なんだろ、それに仕事ならどうのこうの言えないだろ」
「私がこのまま仕事続けたほうがいいと思う？」
「やっと入った会社なんだろ、今の百合かっこいいよ。それにいないと思うよ、百合の年であれだけ給料もらえる女って」
「お金欲しい？」
「そうじゃなくて、初めて話したあの冬の夜、もうみんないないから帰ったらって言った

ら百合なんて言ったか憶えてる？」
背負われたままの百合が顔を傾け俺をのぞき込んだ。
「憶えてるの？」
半年前、東京に雪が降るとても寒い日だった。俺はその日、接客カウンターの床を店が閉まった時間から掃除を始め要約終わった時だった。鍵を警備員に返そうと部屋の前を通りかかると百合は一人残業をしパソコンに向かっていた。建物の暖房はとうに切られ彼女は凍えながら仕事をしていた。俺は前から彼女が気になっていた。そこで自分の来ていた厚手の革ジャンを彼女に貸した。ほとんど押しつけたようなものだった。俺はその時の事を思い出し、照れ笑いしながら彼女を背負い直した。
「忘れるわけないだろ。どうやって話しかけようか毎日悩んでた」
「うれしい」
「そん時、仕事楽しいの、それに早く女のチーフに成りたいって言ってただろ。したい仕事が出来て羨ましいと思ったよ。」
ある種、仕事に対する虚脱感なのか？入社して何年かしたサラリーマンは往々にして自分の生き方に疑問をもつという。しかしそれが持てるだけ彼女は優れているのだと感じる。
その時、突然大粒の雨が落ちてきた。それは南国のスコールように夜の静寂を引き裂き、水の壁となって行くてを阻む。俺は極力百合を濡らさないよう必死に走った。車道を駆け抜けるトラックの水しぶきが俺達に向かってくる。百合にかからぬようそれを正面で受け、又走る、雨に煙る暗闇にマンションの輪郭が浮かび上がる。背中に叫ぶ。
「ガマンしろよ、もうすぐつくからな」
もう一度彼女をしっかり背追い上げ、お尻をポンポンと叩いた。そのとき背中をもう一つの雨雲が濡らした。とめどもない熱い涙がボトボトと薄いシャツに落ちしみた。激しく荒れ狂う雨と風の中で俺の足は止まった。
「おい」
彼女は首を振るばかり。
「おい」
「ごめんなさい」
なぜ謝る？泣きじゃくる背中に俺の知らない何かが潜んでいるのか。
「もういいの、もういいの」
それだけを繰り返す百合は他に何も語ろうとしない。脳味噌を取り出してでもその訳が知りたい。そうでなければ得体の知れない不安に押し潰さつれそうで恐くなった。
「百合、おい百合」
雷が呻きたて風が俺の言葉を奪い去り涙の川が背中を流れていく。早く雲よ去ってくれ。

　富田洋子の濃厚な肉体が俺を味わっていた。手足はベッドの隅に固定され、身動き出来ない体の上をなめくじのように舌先が這い回り、弾力ない白い肌が俺の汗を吸い取っていく。幸せという言葉にはほど遠い女がその身をよじる。洋子は今日も病院に行ったのだろうか。寺田から洋子の現実を聞いた今、もう彼女を卑下する気持ちにはならなかった。こんな形でしか弱さを表せない人間もいるだと素直に思えた。だから好きなようしたらいい

と俺は身体を投げ出した。それを洋子も感じたのか、更に俺の深い場所にまで彼女は潜っていった。俺はシーツの海でもがきながら、頭の片隅で百合が泣いたあの夜の涙の訳を考え始めていた。あの後何故泣いたのかいくら聞いても押し黙るばかり、決して喋ろうとしない百合。生理の時の情緒不安定な気持ちに仕事の疲れが重なったのか？それとも。。。しかし何よりも心配したのはあれから２日目の朝、目を覚ましたときに彼女は居なくなっていた。テーブルには財布とメモ『出張に行ってきます。ご飯はちゃんと食べて下さい』ただそれだけで行く先も電話番号もない。余りに唐突で取り残された感じがした。孤独と不安が彼女のことを考えさせずにいなかった。何があったのだろう？やはりあの時問いただせば良かった。それとも行くなと、結婚しようといえは良かったのか。後悔ばかりが胸を締めつける。執拗なまでの洋子の刺激に次第に俺は混乱しだした。すると洋子は乳搾りのように右手で充血した性器を握りしめ白濁した液体を絞り出そうとする。うつろな意識の中で百合の名を心が呼んだ。
「まだイっては駄目、まだだめよ」
洋子の指先が俺の乳首もてあそぶ。理性が生理にかなわぬ事をこの女はよく知っている。
「彼女と私とどっちがイイ？」
声に出して言ったわけでない、なのにこの女は俺が百合のことを考えている事を見抜き、無理矢理にも比べさせようと身体をうねらせる。そして限界を微妙にコントロールしながら尚も俺に口を開かせようとする。
「。。。」
「彼女に義理立てして言えない？あらまあ、そんなお情けかけられるようじゃ彼女は暗い部屋の明かりで小さな声しか漏らさないんでしょ。哀れねえ。だけど本当の女なんてこんなものよ。みんな嘘をついてるだけ、誰と寝たって同じ事よ、男には見せないだけ。あなたもわかるでしょ、狙った男と食事するときの女の物を口に入れる小ささ」
洋子は右手の鋭い爪で俺の乳首をもてあそんだ。声を上げそうになるのを必死に堪える表情が楽しくて仕方ないらしい。目を細め、目尻に更に深い皺をつくった。俺は虫ピンを刺された虫同然、動く事さえ出来なくなっていた。それを確認した洋子は何事も起きていないかのように、さらりと聞いてきた。
「ねえ、ところで明日の夜時間ある？」
ベッドがきしみ愛液が俺の股間を水浸しにしていく。
「はい？」
息も絶え絶えの俺を上から眺めながら、洋子は俺の手を自分の乳房にあてがい『もめ』と顎で命令した。
「前言ってたじゃない、もっとましな仕事につきたいから私の彼氏に紹介してくれって」
こんな話し、こんな時にしなくともと首を振った。
「一流企業のサラリーマンにして上げようかなって事」
「いいんですか？」
「最近素直だから、聞いてみてあげたのよ。感謝しなさい」
洋子は足にからみついて脱げなかった下着を引き抜き、愛撫させていた俺の手を払いのけた。そしてゆっくりと体を前に傾け、仕舞いには俺の性器を腹にしまい込んだまま、ぴたりと身体をあわせ言った。

「そのかわり条件があるわ。これから会う人のいう通り、あなたの職業を活かして調べて欲しい事があるの、それも秘密に」
蛇のような腰の動き、洋子の大きな尻のえくぼが俺の視界に見え隠れする。
「私がついているは、何にも心配する事はないのよ」
媚薬のような甘い声が魔法でもかけるようにそっと耳元でささやく。
「君は好運を掴めるのよ、ううん掴ませてあげる」
洋子は俺の最後を探し始めた。限界など存在しない女にとって、男にその時を迎えさせる権利を握っているという事はさぞ楽しいのだろう。洋子の喘ぎは征服者の勝ちなのりを想像させた。俺は電気椅子に座る死刑囚のように安らかな最後をと願った。
「心配しなくていいの、私が・・・・」
「エゴイストだよ、あなたは」
「当然でしょ、女だもの」
洋子は弓なりに身体を反らし、天に向かって俺の全てを投げ上げた、大した女だ。

洋子に指定されたシティホテルの最上階。俺は約束の時間の１０分前に着き、ボーイの案内されるままにソファーに腰を下ろした。普段縁のない洒落たバー、厚みのある絨毯が女性のヒールや過って落としたワイングラスを優しく受け止める。この場所に一歩足を踏み入れさえすればどんな貧乏人も裕福な気分にしてしまう魔法の絨毯。しかしその魔法が効かない人種が一つだけあった。それは掃除屋。商売癖なのか何時も床ばかり見ている俺達にとって足の下は評価の対象でしかない。整形外科医が女の身体を見て骨の変形を探すようなものだ。いい加減に飽きた俺は視線を横のガラスにふった。眼下に天の川のように流れる首都高速のライト、その向こうに花火のような広告塔のネオン。俺はふと子供の時に見た映画を思い出した。『モモ』というフランス映画だ。それは人の命をテーマにしていた。物語はある村に見慣れぬ少女があらわれ所からはじまる。村人は少女の不思議な魅力に惹かれていった。そこへまた怪しげな男が、男は事もあろうに村人達の時を盗んでいってしまう。危うく難を逃れた少女は男を追い掛け時の世界へと迷い込む。そこには時の番人がいて数え切れないほどたくさんのロウソクの灯りを守っていた。実はそれは人の命の火だった。灯ったばかりで元気で明るい火、すでに半分解けはしたが安定した明るさで静かに燃える、ロウソクもあとわずか、消えかかる前に一瞬激しく燃えさかる火、そして今まさに消えゆく火、定められた寿命の火が揺らめく様が目の前の夜景の明かりに重なって見えた。
「似合わないな」
いつの間にかセンチになっていた自分に気づきソファーに座り直した。時計をみるとそろそろ約束の時間になろうとしていた。目を入り口に向けた。薄暗いラウンジ、テーブルに置かれたランプぐらいでは人の影くらいしかわからない。緊張で体の中で秒針がまわる。洋子は男と言っただけで名前は明らかにしなかった。果たして俺の前に現れるのは誰なのか？もし寺田の話が事実だとすればこの場に現れるのは大久保か黒岩以外にいない。つまり洋子が俺をどちらに引き合わせるかによって、彼女が俺をどう扱おうとしているのかハッキリする。ラウンジバーに流れるピアノの音、それに覆い被さるように鼓動が高鳴を増

していく。なぜか目の前のランプも同じリズムで揺れていた。不意に肩をたたかれた。振り向くとそこにいたのは大久保信士だった。メガネをしているが間違いない。あの喫茶店、あの雑誌で見た男だ。その瞬間、洋子もただ俺を利用して捨てるのだと直感した。でなければ洋子の本当の黒幕、黒岩に紹介されるはず。。。
「武田、武田祐二君だね」
金縁メガネの奥の瞳が俺を捕らえる。
「はい」
立ち上がろうとする俺に、大久保はそのままでと右手を上下に振り、自分も腰を下ろした。
「彼女からなにか聞いているかい？」
自分の名も言わず唐突に切りだした彼にムッとした。
「いえ、詳しい事は何も、ただここで待っていろと言われました」
「そうかい」
内ポケットからたばこを取り出した大久保は乾いた咳を二つ三つした。タバコの吸いすぎなのか喉がゼイゼイとなっていた。喘息のようないやな音だ、子供の頃小児喘息だった俺は気分が悪くなった。それでも大久保は平気な顔でタバコを吹かした。
「お名前をお聞きしてよろしいでしょうか」
「それは取引が成立してからの話にしょうじゃないか」
「なぜですか」
「簡単なこと、私が名のった時点で君は後戻り出来なくなる」
”なくなる”という言葉は”させない”と言っているも同じ。どこか浮ついていた神経が一気に冷えた。そんな俺をよそに大久保は舌を舐めながら、幾らも燃えていない灰を落とそうと灰皿にタバコをはじく。せわしない指の動きが神経質そうに見えた。
「解りました、じゃあまずその条件を聞かせて下さい」
これから提示される条件が、あの日寺田から聞いた黒岩の計画に何らかの影響を与えるものなのか。それとも洋子一人の考えなのか。もしかしてこうしている事自体も黒岩の計画の内なのか。大久保の目の奥を見ようした。
「君には私の会社の清掃作業員として赴任してもらう。たまたまうちに入っている業者の社長と君の会社の社長とは知り合いだったらしくてね。出向という形で来て貰うことになるよ」
「ただの清掃じゃないんでしょう？」
「なんの事はない。ある役員の部屋から彼が隠しているものを見つけてほしい」
「それはなんですか」
確信に近づいたのか大久保は煙草を左手に持ち替え、俺の方に体を傾けた。
「彼は現社長を追い落とそうと何かたくらんでいる。会社の株を買い集めているかも知れないし、もっと卑怯な手段を使うかも知れない。だから現時点で相手がどう出ようとしているのか君に調べてもらいたい」
「貴方が私をこのように使うことは卑怯とは言わないんですか」
大久保は笑った。
「教えてあげよう、テロを犯そうと企んでいる人間にはいかなる手段をつかってもそれは正義、反対に危険な芽を野放しにしておく事こそ許されぬ事であり悪なんだよ」

彼は自分が優勢なポジションに立っていると疑いもしていないのだろう。お前達は既に罠にかけられていると教えてやりたかった。
「で、報酬は？」
「彼女から聞いてるよ、もし君がそれなりの成果をあげたなら、会社に向かい入れてやろう。それも君なんかが到底つけない役職で」
大久保は煙りをガラス窓に向かって吹きかけた。漂う煙に夜景が霞んだ。
「君もいつまでも鎖につながれていたくはないだろう？」
何事もないように言い放った。彼は洋子がどんなことをしているか知っていた。だからといって俺も顔色を変えるようなこともない。
「この約束には保証がありませんが」
「もし今ここで書類的な物がほしいというならそれは無理だ」
「なぜですか？」
「君はそれを持って相手側に寝返るかも知れない。そうなったら、我々には計り知れない打撃になるんだよ。そんな危険まで冒さなくても、請け負う人間はいくらでもいる」
「じゃあ何を信じたらいいんです」
「甘えるのも大概にしたまえ、男は常に一人。だから私は自分しか信じない。それに今の君は入社面接の時に給料は幾らもらえますかと質問する愚かな人間とおなじだ、君が自分を信じ信念を持って仕事を成し遂げれば結果は自然とついてくるものだろ」
既に裏切られているともしらずにいる彼の言葉になんの説得力もない。経営においては秀でた才能を持っているのだろうが、策略に関しては黒岩の方が上手だ。すると大久保は名刺入れから名刺をとり、テーブルの上に裏返して置いた。名刺を捲ろうと手を伸ばした。
「それを捲ることが何を意味するか覚悟したまえ」
今にも落ちそうな橋の向こうにニンジンをぶら下げ、すべては自己責任たと逆踏み絵を踏まされている気がした。正直迷った。大久保がここまで念を押すからには、それなりの危険が待ちかまえていると考えるべきなのだろう。伸ばした手がぴたりと止まり指が震えた。
「決断の遅い人間は無能だと判断するが」
俺の指はまんまと挑発にのり名刺を捲った。オフホワイトのそれには横書きで古電人事部長という肩書きと大久保信士という名前、右隅には『この名詞は再生紙から出来ています』という文字。若干薄いかなと思うぐらいで別段代わりのない名刺に見入りながら、気持ちはまた一歩深みへ入っいしまったと重くなった。
「驚かないんだね」
大久保の目が光る。
「驚きすぎて声が出ないんです。下古電気といえば大企業でしょ？」
「だからこそ遊び半分でしてもらっては困るんだ、いいね」
ドスの利いた声が俺を縛ろうとする。
「今から私の部下だ」
すると大久保はこれからの予定を帳面を捲りながら話し始めた。驚いたのは古電に勤務するのは明日からだと言うことだった。俺の会社には既に了解は得ていたらしい。とするとさっきの踏み絵の結果を大久保は確信していたということになる。自信なのかおごりなのか、多少腹が立つ。

「くれぐれも言っておくが、社内では私と君は何の関係もない。分かるるね？もしなにか見つけたら洋子に渡してくれ。指示は彼女を通して連絡する。会社では私と目を合わせることさえ厳禁だ」
「携帯かメールのアドレスでも教えていただけませんか？」
「まだわからないようだね。全てが終わるまで君と話すことも、何かをやりとりすることもありえない」
しきりに念を押す大久保信士が哀れに思えた。父親、大久保重吾の為にやっていることとはいえ、人事部長がこんな裏の事まで手を染めるなんて。自分が全てを行わなければ気が済まない性格なのだろう。それに誰一人連れずやってくるところをみると、本当に信頼できる部下を持っていないのだ。裸の王様に見えた。
「わかりました」
俺は彼の目の前で名刺を破ってみせた。

翌日、大久保の言うとおり俺は下古電気に配属されていた。控え室で掃除夫用に指定されたうす緑色の繋ぎに着替え、朝の打ち合わせに出た。メンバーは俺を含めて総勢１３人、７０歳近くの男が３人、５０半ばの女性が４人、中国人男子留学生が４人、そして４０歳ぐらいの実直そうなチーフ。俺はそのチーフから本社直属の特別清掃要員だと紹介された。特別清掃の仕事とは常駐の職員では難しい高所作業や、技術を要する汚れを重点的に清掃で、普段彼らが日常行う作業は一切しない。助け合って仕事をする彼らにとって、多分俺は異端者としか映らないはずだ。しかしかえって、それがこのビルを一人で動き回るのには都合がいい。当たり障りの無い挨拶をした後、深々と帽子をかぶり、一通り連絡事項を聞いて部屋を出た。ビルの部屋割りは打ち合わせが始まる前に清掃区分表で確かめてある。俺は迷う事無く役員専用エレベーターに乗り込んだ。直通エレベータはさすがに快適だ、あっという間に最上階に運び静かに扉は開いた。赤い絨毯が敷き詰められた廊下が現れた。足を踏み出すと右手前のカウンターに座っていた受け付け嬢が俺を一瞥した。正確に言うと胸元の名札を確かめられた。帽子を取って軽く頭を下げたが女は何も言葉を返さず自分の仕事を続けている。かまわず奥に進んでいくと左手にガラス張りの秘書課が左手に見えてきた。秘書達は俺に見向きもしない、常にブランドもの身に付けている彼女たちには薄汚れた作業着姿のの清掃員など見る気にもならないだろうか？しかし俺は知っている。こんな奴らほどだらしない生き物はいない。どうせ誰かが掃除するだろうと洗面所は汚しっぱなし。髪の毛・パフ・生理用品の包装紙・トイレに詰まったタバコの吸いがら、鏡のヤニ、ことさら清潔を口にするくせに、反対に自分がどれだけ汚しているのかも気づかない。働いている女性の全てがそうだとはいわないが、そう思いたくなるような会社を俺は幾つも知っている。だから百合と生活を始めたとき、彼女が綺麗好きと知ってホッとしたのを今も憶えている。俺は道具を両手に秘書室の奥にある役員室を目指した。それぞれの部屋の前にはつや消しされたプレートが戒名のように貼り付けられていた。はじめに常務（黒岩二郎）、次に専務（下古彰、会長の息子だ）、奥に進むに連れて肩書きが重くなり、そこから７，８メートル離れた一番奥に社長室があった。（大久保信士は人事部の部長だからこの階にはいないのだろう）さっきプレートが戒名と言ったが、部屋の扉もあまりに重

厚すぎて洋画によくある棺桶の蓋に見えた。俺は帽子を深くかぶり大久保に指示されたように、黒岩二郎の部屋の扉を叩いた。しかし中からの返事はない。基本通りドアを全開にして部屋に入る。２０畳ほどだろうか、ゆったりとした室内には適度の光が差し込み、静けさが漂っていた。部屋の奥にある机には黒岩の姿はない、ある物と言えば調度品が２・３と壁に掛かった前会長の写真だけだ。馬鹿な話だが黒岩は俺が自分の部屋をこれから毎日調べることを洋子から聞いて既に知っているだろう、いやでなければおかしい。これは狐と狸のばかし合い、恐らく黒岩は洋子と同様大久保の目をだますような情報をこの部屋から意図的に俺に握らせるに違いない。この最上階の赤い絨毯の上で目に見えぬ戦いがある。それも醜く汚い戦いが。俺はこの部屋のよどんだ空気に脳の奥が重くなるのを感じた。そのうち決着が付き誰かがこのフロアーから去っていく。バケツを持つ手に汗が滲む。
道具を床に置き、黒岩の椅子に触れてみた。黒岩とは大久保信士のように高慢な男なのだろうか。それとも... そんな風に黒岩を思い描いていたその時、背中で男が俺を呼んだ。
「入っていいかね」
低く張りのある声、顔を上げると淡い緑ののスーツ姿の秘書の後ろに男が立っていた。彫りの深い顔、黒々とした髪、そしてがっしりとした身体、５０くらいだろうか。
「今掃除を始めたばかりですが・・・・・」
「何言ってるのあなた、常務に」
秘書がキッと睨んだ。するとこの男が黒岩？
「藤田君まあまあ、いいじゃないか。私がいても仕事は出来るだろ？」
「常務、後ほどまた来させますからお気になさらなくても」
３０過ぎているだろうか、その秘書は何度も顎で出て行けと促す。男は今俺が触れていた皮の椅子に腰掛けた。
「藤田君はだまっていなさい。いいから仕事を続けなさい、ごくろうさん」
身体の芯から響いてくるような低い声、楽器のウッドベースが耳元で鳴っているようだ。秘書は怪訝そうな顔をしていたが、黒岩は何事もないように机の上に置かれていた新聞を広げた。
「常務、他にご用は」
秘書は黒いアタッシュケースを両手で抱え、所在なさそうにしている。
「まだここにいたのかい、先方との打ち合わせは１時からだろ」
「はい」
「それなら、もういい。私もしたいことがあるし、この青年の仕事の邪魔にもなるだろう」
「でも事前のレクチャーは・・・」
「でも？君は秘書検定一級のはずだよね。『でも』という言葉遣いは直しなさい。目上に使う言葉ではないよ」
さっきまで出来る女を気取っていた秘書の顔は、途端に新入社員の小娘の顔に変わった。
「ああ、叱ったのではなくアドバイスだよ。そんなに悲しそうな顔しないで。さあ扉締めて自分のデスクにもどりなさい」
「はい、すいませんでした」
彼女の目が潤んでいるのが分かる。
「泣かんでいい。そんな顔で秘書室に帰ると私がいじめたと、後から秘書室長のお局様の

風当たりが恐い。ほら、キャンディあげるから」
黒岩はポケットからサクマの飴の缶を取り出して、中から二三個取出し、秘書に差し出した。初めはいらないと手を顔の前で振ったが、
「イチゴが言いかね？」
と缶の中を覗く姿に、彼女も思わず笑った。
「ああ、イチゴがもうないよ、これで勘弁してくれたまえ」
男は秘書の手にメロンとパインらしき飴を乗せた。
「ごちそうさまです」
笑顔の戻った秘書の顔を見て黒岩は優しげな笑みを浮かべた。
「そうかい、じゃあ後でまた呼ぶから、資料を揃えておいてくれよ」
「はい、承知しました」
そう言ってドアを閉めようとする秘書に
「ああもうひとつ」
「はい？」
「飴のことは秘書室長には内緒だよ。彼女は糖尿病だから」
「はい」
秘書は苦笑してドアをしめた。なんと黒岩という男は柔らかく暖かい気持ちにさせる男だろう。寺田の話から想像していた人物像とは重ならない。はつらつとした風貌、歯切れのいい指摘、何気ない気配り。おそらくあの秘書は怒られた以上に黒岩に上司としての信頼感を深めただろう。その姿は哀愁漂う誠実な紳士に見えた。
「君」
かしこまって立っていた俺に
「君も早く仕事したまえ」
と缶の蓋を閉めながら黒岩は促したす。
「何見てるんだい？君も飴がほしいのかな」
「いえ、優しい方だなと思って」
「私がかね」
黒岩は手に持っていた缶を棚に置いた。そこには買い置きなのか５つほど同じ物が並び、彼はそれを見て笑顔で答えた。
「それは受け取る相手の感性によって違うものだよ。ただ人をうまく使おうというなら、相手を理解しようとしなければ思い通りには動いてはくれない」
「はあ」
「あんな飴一つで君はどうなるものでもないと思うだろ？でも何もしなければ彼女は沈んだ気持ちでこの後仕事を続けなければならなかったと思わないかい？だれだって気持ちよく働きたい、かといって相手こびてもいけない。問われるのは本当の気遣いが出来るかどうかだ。君も偉くなりたいのなら、どうやった他人が自分のために働きたくなるかを考えなさい」
どういう気持ちで黒岩は俺を諭してているのだろうか。
「でも僕が人を使うなんて」
「いい生活をしたいなら覚えておきたまえ。自分で出来る事には限界がある、人を使えて

こそ金も名誉もついてくるのだから」
自分が仕掛けた友釣りのアユに対する儀礼的な挨拶なのか。彼の言葉の奥底を見通せない。俺はなんとなく礼儀的に頭を下げた。
「じゃあ、俺、あ、僕このガラス拭いちゃいますね」
黒岩に背を向けガラスを掃除を始めた。ガラスに写る黒岩が俺をじっと見つめていた。彼のいう言葉を借りるなら、黒岩は俺をどのようにしたらうまく使えるのか心を見透かしているのだろう。彼に見抜けないように心に黒い膜を張ろうとするが、背中が冷たく凍るようだ。黒岩の本性は天使か悪魔か？

土曜の夜、百合と愛し合う夜、しかしあれから１０日経っても彼女は帰って来なかった。ただ一昨日１通のメールが届いた。シンガポールの支所にいるらしい。以前テレビで聞いたことがあるが、株式市場は規制に縛られた東京のマーケットを見捨てシンガポールなどの国々へ大量の資金が流れ込んでいると。しかし、彼女がそんな場所へ出向かなけれけばならないほどの重要な仕事を任されていたとは思いも寄らなかった。喜ぶべきなのだろうが・・・、無性に声が聞きたい。タンスの上からぬいぐるみが俺を見つめていた。（なんで百合はいないの？）と問いかけるように。おもわずそれを手に取り顔に押し当てた。百合は俺の臭いがするといっていたが、俺には彼女の臭いがした。俺はこんなに女々しい男だったのだろうか。もうすこし・・・自信があったのに。自分に腹がたった。部屋にいることさえ虚しく思えた。俺は当てもなく夜の都会へ彷徨い出た。長引く不況と規制緩和で増えすぎた空車待ちのタクシーが長い列になっていた。雑居ビルの看板の明かりはピアノの黒鍵のように不規則に抜け落ち、ここから去ったクラブの多さを物語っていた。そんな活気のない町を何気なく流していると俺の肩をたたく人間がいた。振り向くとそこにいたのは寺田だった。
「おい坊主、また会ったな」
紺のスーツをさり気無く着こなし、いかにも出来る男よろしくの余裕を感じた。
「あ、寺田さん？」
「おう久しぶりだな、元気にしてたか？」
彼に何か変化のあったことはすぐ気付いた。
「この間はどうも」
「いや、この前はおまえと話してる間に酔いつぶれちまって、気付いたら朝だったよ」
頭をかきながら寺田は笑った。
「俺からまなかったか？よく覚えちゃいないんだ」
答えるのをためらった。本当に覚えていないのだろうか。それともとぼけているだけなのか？どうとでもとれるように少し首を傾け笑って見せた。寺田は勝手に答えを出し、悪そうに片手をあげた。寺田は左手を頭に乗せ気まずそうに言った。
「あちゃ、やっぱりからんだか。すまんな」
やはりこいつはおぼえていない。そうならばあえて寺田に警戒心を抱かせる必要もない。俺は無難な返事を返した。

「いいえ、そんな、こちらこそ寺田さんにはごちそうになって。でもなんか今日はこの前と雰囲気が違いますね。いい事でもあったんですか」
「いいや、たいしたことはない」
そういいながらも寺田の口元はゆるんでいる。
「そうだおまえ暇か？もしそうなら用事を一つ片づけたら上手い物食わせてやるよ」
別に断る理由も見つからずその誘いを受け、寺田の車に乗った。黒のセリカＸＸ、ハッチバックタイプの年代物だ。シートのスプリングは堅く乗り心地は最悪だ。しかし寺田は抱きなれた女を操るようにハンドルを回し、Ｆ Ｍ から流れるユーロビートに体を揺らす。口元が心なしかゆるんで見える。やはりなにか仕事がまとまりかけているのか？
「やっぱりいいことあったんだ」
否定しなかった。というより誰かに言いたくてたまらない感じに見えた。
「そういえば、寺田さんのお仕事は、眠ってる株をどうのこうのとかいってましたよね。いい客見つけてがっぽりもうけたんでしょ」
「俺そんなこと話したか」
「ええ、それぐらいで後は俺も酔っぱらったのと難しいのとで覚えてはいませんが」
怪しまれてはならないが、寺田に起きた変化を知るには有る程度の呼び水は必要と感じた。
「そうか？」
「えぇ」
ハンドルを握る左手をそのままに右手を内ポケットを入れた。そしてくしゃくしゃになったマルボロを取り出し左手の指に挟んだ。トントンとそれを叩きなんとか一本取り出すと口にくわえた。
「これから人に会う。でな、それが終わればようやく足かせがとれるのさ」
右手にハンドルをまかせると左手でシュガレットのボタンを押し込んだ。
「よくわかりませんが、それじゃあ思いっきりたかれるのかな？」
「調子にのりやがって」
寺田は笑った。この余裕、大久保を出し抜く株数を確保できそうなのか？
「どこに行くんですか」
このままついて行けば、何かわかるかもしれない。
「横浜」
寺田はアクセルをぐっと踏んだ。

高速を降り、セリカは波止場の倉庫街に入っていった。エアコンの吹き出し口から港特有の腐ったような潮の臭いが漂ってくる。貨物船だろうか沖遙か遠くに小さな明かりが見えた。立ち並ぶ巨大な箱を左手に見ながら進み広い場所に出た。ヘッドライトを煌煌とつけた車が１台止まっていた。
「はええなぁ」
スピードを落としその車を一周した。黒のデボネアだった。スモークガラスに小さな火が見えた。タバコの火だ、寺田は倉庫の陰にセリカを止めた。カーオーディオの緑色液晶にＰＭ０９：０４と浮き出ていた。寺田はバックミラーをのぞき込みながらネクタイを直し

「待ってろ、３０分ほどで戻ってくるからな」
といった後、後部座席から銀色のアタッシュケースを取り出した。ゼロハリとすぐに解った。中にあった大封筒を俺に差し出し言った。
「坊主、大丈夫とは思うがこのファイルをもっててく」
なんなのだろうこれは？聞き返すまもなく寺田は車から折り、デボネアの方へ歩いていった。相手もそれに気づいたのか車から男が一人降りて歩み寄ってきた。フロントガラス越しに寺田と迎えの者が何かを話している。羽虫が飛び交うライトの前で、寺田はアタッシュケースからもう一つの大封筒を取り出した。彼らの話がどうしても聞きたい。俺は静かにドアを開け、転げ落ちるようにコンクリートに腹をつけた。そして自衛隊のようにほふく前進、話が聞き取れる所まで近づいた。埠頭には怪しげな霧が立ち込め始めていた。おかげで気づかれず済む。
「良くやったな、お前ががんばったから借金は黒岩さんが全て返済してくた。感謝するんだな」
相手の男は４０歳半ばの頬のこけた目の鋭い男だった。男は満足そうに封筒を受け取った。
「ええ、わかっていますよ。」
寺田が金を借りていたという闇金だ。
「株の段取りは出来ています。あとは来週、そちらの資金ぐりがつけば全て終わりです」
うれしそうに話す寺田。
「じゃあ、もうこの借用書も不要だな」
男は懐から取り出した紙をこなごなにちぎって風にとばした。紙片は花びらのように舞い波間へ消えていく。なるほどと思った。寺田の仕事が終わり、約束の報酬が黒岩から闇金へ返済されたのだ。
「槌田さん」
寺田は男をそう呼んだ。
「なんだ」
「黒岩さん他になんか言ってませんでしたか？」
「なんのことだ？」
「このまえお話ししたじゃないですか」
槌田の顔をのぞき込む寺田。すると槌田はポケットからライターを取り出し火を灯した。デボネアの後部座席からスーツ姿の二人の男が降りてきた。寺田が一瞬にして凍り付くのがわかった。そして逃げるまもなく羽交い締めにされた。
「なんのまねだ」
男達から逃げようと寺田は必死に抵抗した。背広のすれる音が生々しく聞こえた。
「テレビドラマでよくあるだろ、『お前は知りすぎた』なんてな、まあそういうことだ」
思わず声をあげそうになった。手を口に当て息を止めた。
「俺がいなくなってもいいのか？まだ株は手に入った訳じゃないぞ」
槌田という男は手に持った封筒を寺田の目の前にちらつかせた。。
「これさえあれば後は俺と女でなんとでもするさ。どうせ遅かれ早かれうちで買う株だ」
寺田ははむかう事をやめがっくりとうなだれた。
「頼むから黒岩に会わせてくれ」

しかし槌田は目を合わせることをしない。
「もう用はないとさ」
必死になんども命乞いをする寺田、槌田は表情一つ変えず男の一人にあごで合図する。
「助けてくれ、だったら金も何もいらない」
弱々しいその声は叫び声にもならない。
「・・・」
槌田が寺田の背後から近づき、耳元で何かささやいた直後、男は寺田の胸に刃を上向きにしたナイフを突き刺した。うめき声も一瞬にして途絶え、もう一人の男に脇の下で支えられていた寺田の姿は十字架に張り付けられたキリストのように見えた。
「ご愁傷様だな、寺田ちゃん」
槌田はしらじらしく手を合わせた。その後遺体は岸壁に隠されていたボートに乗せられた。なにもかも用意周到に仕組まれていたのだ。結局、寺田は死ににきたようなものだった。
槌田は船の操舵室に向かって念をおした。
「免許証や身元の割れるものは剥いで、東京湾の外にしっかり重りを付けて捨ててこい。いいか、そのときは魚の餌になるように腹を切り刻んで腸でもおけ」
「もう死んでますよ」
男はそこまでしなくともと言いたげな口振りだった。
「おまえらアランドロンの『太陽にいっぱい』見たことないのか？」
今、人を殺したというのに彼の表情には笑みさえ感じられた。したたかなのか慣れているのかどちらにしても生臭い世界を生きてきたのだろう。
「よく覚えておけ、人間はな、何日かすると中から腐り始める、するとガスで腹が膨れ風船のように浮かんでくる、重りなんかつけたって無駄だ」
こんな事も知らないのか、おまえらバカだなと言わんばかりだ。
「それじゃばれるだろ。そうならないために初めから風船破っておくんだよ」
「わかりました、やっときます」
男は左手を上げ海へと舵をとった。白の船影が波間に消えていった。それを槌田ともう一人の男はじっと見つめた。もうボートのエンジン音も波音に消されるほど小さくなり、やがて波音しかしなくなった。突然俺の携帯の着信音がなった。あわててボタンを押したがもう遅かった。二人の男が振り返った。
「誰だ」
身をかがめ息を殺した。
「出てこい」
槌田のドスの利いた威嚇が俺の心拍数を跳ね上げさせた。このままでは捕まる。二人の足音が俺を挟み込むように忍び寄る。だめ押しするように再び携帯が鳴った。富田洋子からだ。遠く離れた彼女に殺されかけている。二人は完全に俺の居場所を特定したのだろう走り出した。これまでだ、一か八か逃げるしかない、身を低くし、寺田から預かった封筒を脇に抱え、彼らに向かって飛び出した。すると右肩が男の胸にあたった。彼は仰向けに倒れた。同時に俺の脇腹に痛みが走った。男の持っていたナイフがかすったらしい。
しかし傷を確かめている余裕などない、すかさず左から襲ってくる槌田のすねを蹴り上げた。車のライトのそばにいなかったぶん俺の方が少しだけ瞳孔が閉じていたのか、彼らの

居場所や自分の位置、倉庫街の外への出口が暗闇でもよく見えた。胸を押さえ暫く息のできそうもない男と、膝を抱えてうずくまる槌田の腹をもう一度蹴り上げ、港の出口に向かって走った。奴らが起きあがり追いかけてくる前に少しでも遠くに逃げなくては。無我夢中で走っているはずなのに足が前にいかない。腰が抜けているというのはこういう感覚のことをいうのだろうか。あっという間に寺田が死に、俺も崖っぷちにいるとおもうと舞い上がらずにはいられなかった。

悲観的な思いが浮かんだとき、エンジン音が背後に聞こえた。振り返るとライトを上向きにしたデボネアがもの凄いスピードで追いかけてきていた。明らかに俺をひき殺そうとしている。俺の足はピタリと動かなくなってしまった。ハンドルを握る槌田の顔が見えた。心臓が飛び出しそうだ。上を向いていたライトが下におろされたとき、俺は我に返った。逃げなくては、そう思った途端、脳よりも先に足は再び走り出していた。倉庫群を抜け、トラックの行き交う幹線道路に飛び出すと、反対車線に路線バスが停車していた。しかしは車は絶え間なく行き交い横切ろうにも横切れない。かといって遠くの信号機までいっては追いつかれる。覚悟を決め４車線の道路に飛び出した。向かってくる車をかわしながら走り抜ける。ほとんど自殺行為だ。何台もの急ブレーキ音が両側から聞こえ、怒声とクラクションが鳴り響く。振り返る余裕などない。

だがなんとかバスにたどり着いた。そして今にも閉じそうなドアを無理矢理こじ開け車内に潜り込んだ。運転手は驚き席を立とうとする。俺は首をふり訴えた。

「立たないで！車をだして！追われてるんだ！早く・・殺される」

運転手の顔は青くなり、一気にアクセルを踏み込みバスは走り出した。

「助かった」

乗降口のステップに右腕を乗せ、左腕には封筒を抱え大きく息をした。

「どうしたんだ」

運転手は前を向いたまま聞いてくる。

「ひき殺されそうなです。黒のデボネアに乗っている男に」

「えっ！！このバスの後ろに黒のデボネアがついてきているよ」

運転手の言葉にバックミラーをのぞき込んだ。あの車だ間違いない。どうしたらいい？どうしたら。。。。そのとき運転手は無線をとって本社に緊急連絡を入れた。折り返すようにスピーカーから「警察に通報しました。まもなくそちらに到着のもよう」と女性の声。数分もしないうちに遠くからサイレンの音が近づいてきた。警察だと思った瞬間、バスの後ろを振り返るとデボネアは既に姿を消していた。近づいてくるパトカーが右に左に車線を変えデボネアを探している。運転手は会社の指示で停留所前で停車し、警察のくるのを待った。迷った。このまま警察に行ったら何もかも無駄になる。寺田の死体が見つかれば、こんな騒ぎ起こした俺自身が犯人と疑われかねない。ここからも逃げなくては。そして警察官の為に運転手がドアを開けた瞬間、外に飛び出した。

「お、おーい君・・・」

運転手の呼び止める声もきかず、ビルの谷間に俺は消えた。

翌日の土曜の夕方、わき腹にぱっくり開いた傷のガーゼを変えながら、部屋で一人ニュ

ースを見ていた。しかし横浜埠頭で溺死体が上がったという話もなく、ましてや人が車に追いかけられて警察車両が出動した事など話題にものぼっていない。このまま寺田の死体が見つからず、俺が警察に告発しなければ、昨夜はなにもなかったことになる。ましてや人付き合いも少なそうな寺田の捜索機願いを出す者もいないだろう。人がこの世から消えるなんてなんと簡単だなんだ。そう思うと犯行を目撃した俺を槌田がこのまま生かしておかないだろうと感じた。
もう寺田が死んだことを嘆く余裕はなかった。既に自分自身が当事者になっていた。テレビのスイッチを切り、寺田から預かった封筒を開けてみた。そこには富田洋子の子供のカルテと、寺田も半信半疑で調べたのだろう、子供と自分のＤＮＡ検査の結果表が入っていた（確かに寺田の子供だ）なぜこんなものを持ち歩いていたのだろうか？だがその疑問は月曜、会社に出勤して直ぐ解ける事となった。

　俺は大封筒をディーバッグに入れ出勤した。持ち歩かないと不安だった。仕事の身支度を整しロッカーにバッグを入れ、普段かけたことのない鍵をかけた。朝９時２０分、いつものようにミーティングが終わり、清掃作業員は各部所に散っていく。俺はチーフに呼ばれた。秘書が役員フロアーの絨毯にコーヒーをこぼれたらしく、染み抜きを指示された。専用薬剤とブラシ、それにタオルをバケツに詰めエレベーターに乗り込んだ。役員フロアーにつくと既に秘書達は自分の担当役員の資料を手に、秘書室長と打ち合わせを終えようとしていた。その中の一人が俺を呼んだ。この前の黒岩の秘書だった。
「来て」
そう言うと黒岩の部屋へ秘書は入っていった。なんのことはない、黒岩の机の上を整理しようとしていたら、前日の飲みかけのカップを誤って落としたらしい。（ということは土曜日か日曜日、黒岩は会社に出てきたと言うことになる）絨毯の上にはロールシャッハテストのような焦げ茶色の奇妙な模様が広がっていた。秘書はそれを指さし。
「常務は夕方にはお戻りになられるから、それまでには終わらせておいて」
そう言うと自分の失敗を他の秘書達に知られたくないのか、普段掃除の時は開けさせておくドアを秘書自ら閉め出ていた。「お願いね」の一言ぐらいあってもいいだろう、それにあのうざそうな表情、この前見せた笑顔は上司にだけの仮面で、掃除屋に見せる笑顔は持ち合わせていないと馬鹿にされた気がした。一気に不愉快になった。しかし、この機会を逃す手はない。夕方までだいぶある、人目を気にせず部屋中を物色できる。実は最近少し焦っていた。というのもこの会社に配属されてから半月、黒岩の部屋からみつけたものはただ一つ、下古電気のメインバンクとは異なる飛鳥銀行の頭取へのお礼の手紙の書き損じだった。内容からすると最近黒岩はその頭取を『白鳥』という料亭でもてなしたらしい。なんの意図があってそうしたのか文面からは読みとれなかったが、「これからはなお一層。。。」という言葉からして両者の間に何かの利害関係が生まれていると考えられる。しかしシュレッダーにもかけず、ゴミ箱に捨ててあったところからして見られてもいいものなのか？何も見つけられないことで洋子を通し大久保から責められていた俺は、それを洋子に渡した。しかし、冷静になってみれば俺が大久保の命令で自分を探っていることは黒岩が知らぬはずがない、とすれば大切な資料を人目につくような場所に置く訳はないのだ。

だが大久保はその切れ端に大いに興味を持った。そして、その手の内容のものはないかと前にも増してせっつかれた。夕方まで黒岩は帰ってこない。それまでになんとかして見つなくては。俺はまず本業の絨毯の染み抜きから始めた。持ってきたバケツから薬剤を取り出しコーヒーの染みに少したらした。次に歯ブラシで染みをはたき、徐々に汚れを浮かせていった。絨毯は化学反応と歯ブラシの効果で少しずつ元に戻っていく。あとはスチームで毛足を整え作業完了。作業時間わずか１５分、楽勝だった。しかしそれではここにいる理由もなくなってしまう。俺はシミのあった場所をタオルで隠した。これなら誰が入ってきても未だ作業は終わっていないと誤魔化せる。そうとなったらいよいよ本番、俺は部屋中を物色し始めた。机や戸棚は毎日少しずつ調べていたが何もないことは分かっている。しかし、どこかに黒岩の秘密が隠されているに違いない。黒岩は寺田やその他の関係者とどうやって連絡をとり、どうやってその情報を保管しておくのか？確かに机の上にはパソコンがあるがパスワードでロックされてあり、万が一ロックがはずれパソコンの内容をみれたとしても、社内メールで連絡取り合うような危険なことを慎重な黒岩がするとは思えない。社内メールはＬＡＮで管理されており、システム管理者によって簡単に検閲することができるので黒岩が密かに連絡を取りあうには不向きだ。（最近は会社個人宛の恋愛メールなど危険らしい）こういう場合は、社内ＬＡＮと切り離された自分個人の連絡手段が秘密の保持には適している。自然に考えるなら携帯電話だろう。だがそれだけでは秘密文章の管理には不十分だ。それならノートパソコンとＰＨＳモバイルカード通信？あり得る話だ。しかしノートはテーブルの上に普通に置かれている。まるでどうぞ見てくれと言わんばかりだ。とすれば肝心のデーターは別の所（外部ハードディスク・メモリ）に保管されていると考えるのが自然だ。腕組みをし部屋を見回した。絵画、花瓶、テレビ、本棚。いったいどこに隠した？すると部屋のドアが空き誰かが入ってきた。
「何してるの？」
秘書室長だった。
「あ、はい、絨毯のコーヒー染み取りです」
「あなたがこぼしたの？ということはないわよね。今朝私がここに来たときには何もなかったということは、藤田さんね」
「・・・・・」
「仕方ない子ね」
そう秘書室長がぼやいていると、後ろから当の本人が現れた。
「すいません、整理していてうっかりして」
女が女の上司にしかられているところを初めてみた。しかしこの前のように彼女は涙見せるわけでもなく、かしこまって秘書室長に頭を下げ続けた。今回は黒岩のように飴をくれる上司ではない。ん！！飴？
　そういえば棚には買い置かれたサクマドロップの缶が５つも並んでいる。さっきまで気にもしなかったそれがこの部屋には不似合いに感じた。俺の興味は一転に集中した。
「気をつけさいよ、この部屋の絨毯はとても高価で、シミなんか残ったら大変よ。あなたのお給料じゃ払えないんだから」
秘書室長はこれでもかと言い込めたあとすぐ、こちらに向かって目をつり上げた。
「しかし君ね、部屋にいるときはドアを開けとくものよ、基本でしょ」

非難の矛先はこちらに変わった。
「あの・・・・」
俺の目が秘書室長の脇の秘書に目をチラリと向けるた。すると藤田という秘書は何も言わずに横を向いた。それを見た秘書室長は何かを感じたのか、それ以上の追求はしなかった。
「まあいいわ、あとどれくらいかかるの？」
「３０分くらいで終わると思います」
秘書の尻拭いさせられているようで、ぶっきらぼうな口調になっていたかも知れない。
「そう、じゃあ早く終わらせて」
秘書室長はスーツの袖を押さえ、ブレスレット型の腕時計を見た。そして、こんな事にこれ以上時間をは使えないと部屋を出ていった。もちろんこの間、藤田という秘書がドアは自分が閉めたと弁解するわけでもなかった。ただ小さくなりながら秘書室長の後をついて出ていってしまった。やりきれない。重い空気だけが部屋に残り、開けることの出来ない大きな一枚ガラスを見ると壊したらいい風が吹き込んでくるだろうなと恨めしくなった。
「くっそ馬鹿女が」
ムカムカしてはみたものの、かといって調度品に当たるわけにもいかない。そう思うともう一人の自分が冷静に、そして大人になれと肩をさする。もう一度舌打ちをし、わだかまりに手を打った。
「さっさと仕事すませるしかないか」
ドアは開け放れたままだが、秘書室から見えるわけでもない。俺は気持ちを切り替えさっき気になった棚においてある飴の缶を調べ始めた。埃をはらうように見せかけ飴の缶をひとつずつ手に取り耳に当て振った。カラカラコロコロ、どれもこれもそのまんまの音。食ってやろうかと思ったが蓋にシールが貼ってあり、開けるとばれるので止めた。だが中に一つだけシールの貼られていない物があった。すかさず１０円玉を溝に差し込み金色の蓋を押し上げた。ポンという音と共にはずれた。蛍光灯の下に持って行って中をのぞいた。缶の底にＵＳＢメモリーが頭を覗かせていた。やはりあった。缶を逆さにして取り出した。そして全開だった扉を少しだけ締め、テレビの電源を入れた。この中にきっと何かが隠されているに違いない。
　急いでノートパソコンにを起動しＵＳＢメモリーを差し込んだ。しかし、それはパスで強固にロックされていた。何とかしなくては。時計を見た。夕方までならまだたっぷり時間はある。奴に鍵（パスワード）を解析してもらおう。思いだしたのはハッカーの駒沢隆二という男だった。彼とは以前秋葉原の裏通りで知りあった。ここからさほど遠くないところに住んでいる。俺の数少ない友人の一人でもあった。奴ならこのメモリーのパスワードくらい解読出来るはずだ。メモリーをノートから抜き部屋を出た。秘書課には作業は一応終わったが、また後で見に来るから乾ききるまで歩き回らぬようと断っておいた。そして正面玄関を飛び出しタクシーに乗った。渋滞もなく１０分程度駒沢のアパートに着けた。いつとり壊されてもおかしくないぼろアパート。ペンキの剥げかかった階段の手すりをたぐり寄せるように二階へ駆け上がった。６部屋並びの一番奥の部屋。俺はノックもせずに部屋に上がり込んだ。薄暗い部屋の中で何台ものディスプレーが光りを放ち、そのほんのわずかな空間に駒沢は眠っていた。
「おい駒沢、起きてくれ、おい」

「ん？」
彼は何事が起きたのかとこちらを振り返る。
「なんだ武田か」
顔にボタンの跡がいくつもついて、まるで魚の鱗のように見えた。
「なんだ、血相かいて」
「頼みがある。このメモリーの中のファイルが見たいんだ、今すぐに」
駒沢は俺が差し出したＵＳＢメモリーをつまむと、なにも聞かずに自分のパソコンに差し込んだ。そしてネットにつなげすぐに解析を始めた。
「ネットなんかにつなげて何をしているんだ」
「急ぐんだろ？」
「ああ」
「そういうから米国の製薬会社のスーパーコンピューターをちょっと借りているのさ」
映画でしか見たことのないハッカーがここにいる。
「凄いな」
他になんと言えばいいのか分からない。普段清掃会社の作業計画作成にパソコン使っているだけの俺からは想像もできない世界だ。こんな奴らに狙われたら秘密なんて何の意味もない。だが感心をしている暇もなくあっという間に解析は終わった。
「解けたぞ、パスワード」
そういうと彼はディスプレイにファイルの中身を開けて見せた。
「さすがだな。で、なんのファイルか聞かないのか？」
「そんなのいちいち気にしてハッキングなんかするか。それにそれ、どうせおまえのじゃないだろう」
言葉に詰まった。やっぱりなという顔で駒沢は俺を見た。
「他人のもめ事に首つっこむ物好きじゃないからな」
そういうと解析したファイルを開き俺に席をゆずった。
「すまんな、確かに知って得になることじゃない。でも驚いたよ、さすがだ」
賞賛の言葉を並べながら俺はファイルに目を通した。１７インチのディスプレイには数件のメールとともに秘密の住所録と所得株式の総数を記した Excel のファイルがあった。これこそ大久保が知りたがっていた情報。しかしそんなことよりもその中の２つのメールを見て驚いた。それは寺田からのもので、彼の殺される二日前には既に黒岩が必要としている大口の株の手配をすませており、あとは手に入れるための資金が黒岩から振り込まれるのを待つのみだったということ。excel のリストからすればそれを収得した時点で大久保を解任するに十分な株数になる。つまりはこれで黒岩の計画は達成される事を意味する。しかしもっと驚いたのはその後だった。それは黒岩から槌田へ送ったメールの返信だった。

受信メール①----------
　送信者：槌田
　日時　：2000 年 7 月 29 日　12:00
　宛先　：KUROIWA
　件名　：RE:あとは頼んだよ。

分かりました。明日、寺田をやっときます。
又連絡します。あと女はもそのうちやるんですか？
なんかもったいないですね。百合という女、黒岩さんに
仕込まれただけあって何でもいうこと聞きますよ。
まあ、すぐということでないならそれまでたっぷり
楽しませてもらいます。
なによりのおみやげでした。では。

office:大山商事
name：槌田　大樹
Address:港北区港新町１－３－２
Tel：03-5855-2222

----- Original Message -----
From: kuroiwa 〈kuroiwa69@stry.co.jp〉
To:　槌田　大樹〈tutida@syuop.ne.jp〉
Sent: Fri, July 28, 2000 11:48 AM
Subject: あとは頼んだよ。

〉全ての用意は整った。
〉しかし寺田は最後の最後で約束した額以上に
〉要求してきた。その条件をのまないと大久保にばらすと
〉脅してきた。奴は知りすぎた。
〉株購入に当たっての条件等の重要書類は寺田が持ってくる。
〉それを受け取ればもう彼いなくとも困ることはない。
〉始末しておいてくれ。
〉あと女二人も利用価値は減った、すべて決着がついたら
〉後腐れの無いようにするつもりだ、今のうち楽しんでおけ。

受信メール②----------
送信者：槌田
日時　：2000 年 7 月 30 日　22:30
宛先　：KUROIWA
件名　：まずいことがおきました

寺田は始末しましたが。若い男に見られました。
たぶん寺田の連れだと思います。
顔は見たので見つけだし、そいつも直ぐに始末します。

office:大山商事
name：槌田　大樹
Address:港北区港新町１－３－２
Tel：03-5855-2222

送信メール①----------
送信者：kuroiwa
日時　：2000 年 7 月 31 日　06:40
宛先　：槌田
件名　：明日横須賀の事務所に行く

ヘマをしたな。とにかく今日昼に横須賀のマンションで
待っていろ。そのときまでは他の者にも下手に動き回らせるな。
いいか何度もいうがお前の会社名義でうちの株を買い受けるの
だから変な噂をたてられないようにしろ。
株を手放す先方もお前の会社がダミー会社でその大株主が俺だという
ことも知っていたうえでの取引だ。大久保には俺が飛鳥銀行から融資
を受けて何かたくらんでいると思い込ませておいた。
金曜日には海外の投資先から、ダミー会社を迂回してお前の会社に流れる。
お前が先方から株を手に入れるだけだ。
もしお前が捕まるようなことになれば、この話は
全て泡になる。売買が終わる翌週の水曜の夜までじっとしていろ。

内容からして間違いなく槌田とはあの日の寺田を殺した男だ。やはり寺田は黒岩の指示によって消されていた。黒岩は槌田の会社をとおして下古電気の株を購入させ、自分はその会社の隠れた出資者として表に名前をださず、形だけの社長として槌田を置き大株主として大久保を引きずりおろそうとしている。そして飛鳥銀行の頭取宛の手紙は、大久保の目を騙すための囮だった。黒岩という男、一見穏和そうに見えるがしたたかな人間なのだと改めて思った。社長の大久保は業績を上げているが、黒岩のいやらしいまでの性格が本業に向けられたなら違う意味で会社は大きくなるような気がした。

それよりも、気になったのはメールにあった百合という名だ。まさか・・・自分を笑った。あるわけがない。だがこのままでは百合という女、確実に殺される。黒岩達の内輪もめだと目を放り出す気になれない。一旦そう思うと、そうでないことを確かめずにはいられなくなった。時計を見た。既に１１時２０分を回っている。今から行けばまだ間に合う。

「駒沢、すまん、帰る。データ全て俺宛にメールで送っといてくれ。この礼は必ずするから」

持ってきたメモリーを抜き取り胸ポケットにいれると、ハの字に脱ぎ捨てておいたスニーカーにつま先をつっこんだ。

「そうだな。礼なら、今度おまえの自慢してる彼女に会ってみたいな。飯でも食わせてくれよ」
玄関ドアのノブを回す手が固まった。
「どうかしたか？」
「いや、なんでもない」
「もしかして、もう別れとか？」
「おあいにく様だな」
「ほう」
「嘘だと思うなら、今度つれきてやるよ。驚くなよ美人で料理もうまいぞ」
信じたくて自分に言い聞かせたようなものだ。
「楽しみにしているぞ、最近飯らしい飯食ってないから」
駒沢は何も知らずにただ明るかった。俺も笑った。
「おい、頼まれついでに、おまえのバイク貸してくれ」
玄関脇の流しのフックにかかっていたバイクのキーを抜き取った。
「おいおい」
呼び止める声も聞かず後ろ手でドアを閉め、階段を駆け下り降りた。そして下にとめてあった４００ｃｃのバイクにまたがるとキーを差し込んだ。メーターのＬＥＤが点灯したのを確認しエンジンボタンを押した。ヤマハ特有の振動が身体をふるわせた。確かめなきゃ・・・。

　途中、会社に寄りメモリーを元に戻し、その足で横須賀へ向かった。市街地にはいるとさっそくファイルの住所録にあった黒岩のマンションを探し始めた。神奈川県横浜市中区伊勢佐木町『マンションフェミナ』、立ち並ぶビルの間にそれらしき建物がないか電信柱の番地区域と見比べながらバイクを徐行させた。そして探し初めてから２０分、地区の公園から１００メートル行ったところに、ようやく茶色の煉瓦タイルの建物を見つけた。全部で６階ほどあるのだろうか､最上階は日陰制限の為斜めに切り取られ下からは見えない。バイクを玄関前に止め防犯カメラを気にしながら近寄った。スモークガラスを巧みに配置した都会的なセンスのいい玄関だと感じた。もちろん扉は暗唱番号で入室管理され住人以外は入れない。どうにかしてマンションの中に入る方法を考えなくて。勤務する会社が管理する建物ならなんとでもなるが横須賀は全くの管轄外だ。しかし、だからといってドアを壊して警察に沙汰になるわけにもいかない。昔あった宅配業者になりすましてという方法も考えては見たが、最近は管理人が代わりに荷物を受け取るようになりそれも無理。いいアイデアも浮かばず玄関に長居も不自然と思いいったんバイクに戻った。暫く考えあぐねていると若い女性がマンションから子犬を抱え出てきた。顔はよく見えなかったが年は２７．８だろうか、短めのスカートからのびるすらりとした足に少し高めのヒール、フェロモンぷんぷんの彼女は抱えていた子犬をアスファルトにおろした。そして赤いリードを手のひらに巻き付けると犬に散歩を差し始めた。悩ましい腰つき、自然に目が追ってしまう。緩やかな歩道のカーブ、彼女が視界から消えようとした寸前
「キャー」

という悲鳴がした。ヒールのかかとが溝に挟まったのだろうか？彼女はバランスを崩し身前のめりになっていった。俺が声を
「あっ」
とあげた時すでに彼女は顔から歩道に激突していた。昼の１２時、普段、人通りも多い場所なのだろうが、その時に倒れた彼女の近くに人はいなかった。
「うぅぅぅ」
切なそうにうめき声を上げうずくまる脇で犬が所在なさそうにウロウロする。俺は駆け寄り
「大丈夫ですか」
と声をかけた。
「痛い」
肩を抱き起こし怪我はないかと見ると頬が赤くすりむけ、右の手首を痛そうにしていた。恐らく左手に犬の紐を握っていたために、右手から転んだのだろう。
「歩けますか？」
彼女は首を振った。
「足が... 痛くて」
ヒールの脱げた足を左手でさすりながら俺の方を見た。
「あの、マンションすぐそこなので連れて行っていただけませんか？」
「骨折れてるかもしれないから救急車呼びましょうか？」
「いえ、たぶんねんざだと思います。帰れば薬もありますし」
大事にはしたくない、そんな口ぶりだった。本人がそういうならと俺も無理には進めなかった。
「わかりました。この先ですね、いいですよ。俺もこのままにはしておけませんから」
スカートがはだけあらわになった太股を隠そうと痛みを堪え裾に手を伸ばす彼女、俺は見ないように目線を外した。
「すいません、直ぐそこのフェミナというマンションの６階です。よろしくお願いします」
チャンスは向こうから転がり込んできた。とにかくどうであれこの女性を送り届けなくては。そういっている間にもくるぶしは赤くパンパンに腫れていった。
「じゃあ抱えますからね。ちょっと痛いかもしれませんが我慢してくださいね」
横たわる彼女の背中と膝の下に両腕を入れ、今度は下着の見える事の無いよう抱き上げた。
「ごめんなさい、重いでしょ？」
彼女は俺の首に左手をかけ、頭を下げた。
「いいえ全然、痩せているから抱き上げるてこわしちゃわないかと怖いくらいです」
「そんなこと無いですよ」
彼女をもう一度深く抱きかかえ、その抱きかかえた右手の指に犬のリードを引っかけた。
「クゥーンクゥーン」
ヘンテコな顔の犬（ブルテリアという犬種らしい）は主人を心配して鳴いた。
「よしよし大丈夫だからな」
「優しいのね」
「動物好きなんで」

そう答えると彼女抱えマンションに向かって歩き出した。しかし本当に軽い女性だった。普段もっと重い物を持ち運び仕事をしている自分には物足りないくらいだ。だが、おかげで玄関の踏み段も難なく上がれた。
「すいません、そこのインターホン押していただけません？」
他人にロック解除の暗証番号を教えるのを躊躇った彼女は管理人を呼んだ。
「すいません、黒石です。怪我をしてしまったのでここ開けてもらえませんか？」
俺の押すボタンの先のマイクに向かって彼女が言った。管理人は壁に取り付けてある防犯カメラから彼女と俺を確認し、程なく玄関のドアを開けた。ロビーに足を踏み入れると、管理人室から６０後半の背中の丸まった男が驚いた顔で飛び出してきた。
「だいじょうぶですか、黒石さん」
管理人と思われるその男性は、彼女を抱き上げている俺を怪訝そうな眼で見た。その視線に気づいた彼女が
「違うんです。私がすぐそこでつまづいて、この方に助けてもらったんです」
それを聞いて管理人は表情を変えた。
「そうですか、それは、それは、エレベーターはこっちです。黒石さん確か５階の５０４ですよね」
「いいえ６階です」
降りてくるエレベーターの回数表示を三人の目が追っていた。
「ああそうそう５０４は黒岩さんだった、だめですねえ物覚え悪くて」
管理人がこちらを向かなくてよかった。俺の顔はにやけていたに違いない。黒岩の部屋、つまり槌田に事務所として貸している部屋をこうもたやすく突き止められるとは。神のいたずらかそれとも俺は強運の持ち主か？管理人に誘導されエレベーターに乗り込んだ。俺に抱かれているので彼女の生足が管理人の目の前に来ていた。
「いやーほんと災難ですね」
彼女は恥ずかしいと俺の胸に顔を埋める。髪のいい香り、どうして女性はこんなにいい香りがするのかいつも不思議だ。この柔らかな体。以前親戚の赤ん坊抱いたことがあるけれど、その時なぜか守ってあげたいと自然と腕の力が抜けるような感じを思い出す。こうやって男は昔から女を守ってきたのかなと漠然と思う。エレベーターが５階に止まり、管理人の後ろをついていった。彼は腰に下げていた鍵のなかから彼女の部屋のものを選び鍵穴に差し込んだ。ドアを開けると部屋の中からの冷気が流れ出してきた。散歩から帰ったときのことを考えてクーラーを適度に利かせておいたのだろう。俺は犬のリードを玄関脇のフックにかけ、かかとを踏みながらスニーカーを脱いだ（そういえばこんなマンションで犬を飼っていいなんてめずらしい。大型犬でなく鳴かない犬ならいいのか？）部屋の奥に進むと、大きな白い皮のローソファがあり、テーブルにはファッション誌が積み重なっていた。窓ガラスも磨かれてあり、床にゴミも落ちていない。調度品も少なく部屋の印象としてはスッキリとまとまっていた。
「じゃあ　ひとまずソファーに」
管理人に指示されるとおり彼女の身体をソファーに置いた。そして
「ふぅ～」
一息ついた。重かったからではなく緊張から解かれ自然に出たものだった。

「ありがとうございました」
彼女は痛む右手を左手でかばいながら頭をコクンと下げた。
「いえ、気になさらずに」
じゃあ後は頼みますよと俺は管理人を見た。
「じゃあ俺もこれで失礼します」
「ああそう言わないで、もうすぐうちの人が帰ってくるので、待ってて下さい。お礼しないと」
「黒石さん、私管理室あけておけないのでこれで失礼していいですか？」
蚊帳の外に置かれていた管理人が場の空気を読んだのかそういった。
「ああ、すいません管理人さんにもご迷惑かけて、私は大丈夫ですからお仕事に戻ってください」
「わかりました、何かご用があったら管理室まで連絡下さい。お手伝いしますから」
女性は頭を下げた。それを見た管理人はそれじゃあと俺に視線を返して部屋を出て行った。管理人と彼女が話している間、彼女のほほに出来た擦り傷があまりにも痛々しそうで気になった。
「あの～、薬箱ないですか？」
「えっ？」
「だって頬から血で出てますよ」
「いいえ、そんなことまで」
早く黒岩の事務所を探らなくてはいけないと分かっていながらも、彼女をこのままにしてこの場をさるのも可愛そうだった。
「いいから薬箱はどこですか？」
はやる気持ちが俺の語調を強くした。それに驚いたのか彼女は冷蔵庫の上を指さした。磁石でいくつかのメモが張り付けられているモスグリーンの大きな冷蔵庫の上、海苔の缶の隣に薬箱らしき木箱があった。中にはコンドームや妊娠検査薬と一緒に封の切られていない一通りの薬類がそろっていた。そこからマキロンを取り出すと自分の手のひらに彼女の顎のせ、二三度吹きつけた。小さな悲鳴が一つ二つ、流れる薬と血を清潔なガーゼでそっとふき取った。そのあと傷用の軟膏を見せた。
「早く乾くように薬塗っておくだけにしますね」
薬を塗っている最中自然と目が合った。可愛い人だった。すこしぽっとなった。
「はい、頬はこれでよし、後は手首と足ですね」
湿布に切れ目を入れ、足のカーブに沿うよう自分なりにこだわって貼った。軽くテープで留めた後、これまた綺麗に包帯で巻いていった。同じように手首も湿布をはると芸術作品でも完成したかのように達成感がわいてきた。俺を見て彼女はクスリと笑った。
「おかしな人、でも本当にありがとう、んこんな事までしていただいて」
「いいんです。美人だったからつい、なんてね」
頭をかく俺を見て左手で口元を押さえ彼女はまた笑った。
「黒石静香といいます。お名前聞かせていただける？」
「ああ、武田祐二です、って名のるほどの男でもないんですが」
「いえ、素敵ですよ」

「止めてください。そういうこと言われなれてないんでどんな顔していいかわかりません」
クスリやテープ、湿布やあれこれ箱に戻しながら、はみ出していたコンドームや妊娠検査薬を土地区画整理事業でもするように置き直した。なにが入っていたか彼女は気づき顔を赤くした。でも気づかないふりをして蓋を閉めた。
「じゃあこれで帰りますね、電話近くにおいときますからなんかあったら管理人さんに」
「そんなもうすこし待って。主人がもうすぐ帰ってきますから、お願いこんなに迷惑かけてそのまま帰したら主人に怒られます」
冷蔵庫の上に薬箱を戻しながら言った。
「留守の間に若い男が上がり込んでたら、反対に旦那さんに怒られますよ。それよりもこれ以上腫れないといいですね、おかしいと思ったら早めに病院に行ってくださいね」
彼女も俺の言う事に納得し、それ以上引き留めようとはしなかった。
「なら電話番号だけでも」
「お礼の言葉で十分です」
カッコつけすぎたかなと思った。でも実際こんな事をしている暇はなかった。俺は彼女に一礼し背を向けた。
「またこちらにおいでになったときには寄って下さいね、きっと」
「ありがとう」
軽く会釈をし部屋を出た。何か惜しいことをしたような気もしたけれど、このチャンスを物にしなければ。一発顔をはった。
「さあ、いくぞ」
気合いを入れたはいいものの、問題はどうやって槌田の部屋を探るかだ。結局、思い浮かんだのは一つだけ、天井裏！マンションには大抵各階の階段下に物置があり、配管ダクトや電気系統保守用に天井裏へ通じる点検口がある。そこから入れば各部屋の天井までいける。俺はいつもそうやって天井裏のネズミの死骸始末をしている。（マンションはコンクリートの建物だから適温の台所の裏側などネズミの常磐ハワイアンセンターなのだ）内階段を５階へ降り、フロアーを見回した。誰もいない。南向きに８室、北向きに８室、ワンフロアーに１６の部屋、５０４号室は建物の中央付近にあった。天井裏から５０４号室にたどり着けるよう各部屋の位置関係を確認した。これならいけると点検口から天井裏に潜り込んだ。ネズミの尿とカビの混ざった臭いが充満していた。小型のペンライト（米国の警察が使用する小型で高性能な物）を内ポケットから取り出し暗闇を照らした。光の円の中にほこりが漂っていた。そしてその先には何本もの配管が天井を貫く。隙間は３０センチ、ほふく前進ほふく前進、各部屋の天井はコンクリで仕切られ、通り抜け用に開けられた穴を進み５０４号室を目指した。ここら辺かなと室内換気扇接続付近に耳を押し当てた。トランペットを逆さにしたような換気扇とダクトの構造は部屋の中の音をダクトに集める。時間は午後の１時、テレビから聞こえるみのもんたの怒り声、そして間髪入れず
「そうよね～」
と相づちを打つ主婦の声、絶対ここじゃない。さらに這い進みまた耳をつけてみる。部屋の中から何台ものエンジン音が響いている。どうやらグランツーリスモで遊んでいるようだ。熱中しているのか根暗なの声がまったく聞こえない。ここでもない。そしてさらにさらに奥へ、点検口から４０メートルほど入った区画に到達した。なにやら男二人が話して

いる声が聞こえた。そのなかに聞き覚えのある黒岩の声があった。
「じゃあ、まだ港から逃げた男の手がかりは無いんだな？」
黒岩の言葉が威圧的にもう１人に詰め寄った。
「はい、寺田の友人にも当たりましたがさっぱり」
槌田の声のような気がした、
「使えない奴だ」
「すいません」
今の槌田から寺田を殺ったときの偉そうな態度は感じられない。
「それで手がかりになるような物はすべて回収してあるんだろうな」
「はい、それは大丈夫です。奴の事務所にあった、関係資料は持ち出してきました」
「ならいい、なにしろ正念場だ、あらゆる不安材料はつぶせ」
「承知しています。で・・・肝心の資金の方はいつごろになるんでしょうか？」
「コブウエブキャピタルから金曜に振り込むと連絡があった」
槌田の返事はなかったが、それと同等の振る舞いを彼は見せたのだろう。黒岩は不機嫌になることもなかった。
「その日のうちにお前のところに移しておく」
そういえば黒岩宛のメールの中に Cobweb Capital から英文のものが何通かあった。
読もうにも専門的単語が多すぎて一行も訳せなかった。あれは海外の投資家からのものだったと理解できた。
「それより、７日（翌週の月曜日）の取引、抜かりはないんだろうな？」
「はい、今朝電話で、寺田が準備した内容の再度確認を先方と済ませました」
「となるとやはり残るリスクはその若造一人だな」
ライターの蓋が開く歪んだ金属音がした。それが黒岩の手に握られているのか、槌田が黒岩に火を差し出したのかまではわからない。しかし耳に感じる部屋の空気からすると黒岩の指先に火のついたタバコがあるような気がした。
「しかし、おかしくはないか？その若造、なぜ警察に通報しない」
「おっしゃるとおり私もそれは考えました。あの後（寺田を殺しを見た後）男が警察に駆け込み、事件性ありと判断されているならとっくに刑事がきているはずです」
「だろうな」
「考えられるとすれば怖じ気づいたか、もしくは・・・」
含みのある言い方、黒岩は槌田に言葉の先を促した。
「あくまで推測ですが、向こうから取引を申し込んでくる気がするんです」
「金目当てか？」
「私はそう見ています」
「わからんでもないが甘くはないか？」
「どちらにしても寺田の遺体がは絶対にあがりっこありません。そんな証拠もない状態で若造一人いくら喚いても今の警察じゃまず取り合わないはずです。それなら下手にこちらから仕掛けるより相手が出てくるのを待った方がいいかなと」
「わかった、しかしこれ以上のミスを犯したら」
「はい、覚悟は出来ています」

槌田の声は先ほどより心持ち自信らしきものを感じた。槌田の考えに一定の理解をしめしたのだろう黒岩もそれ以上はいわなかった。そして、ようやく話も一段落したのか
「しかしこれで彰氏が社長になり、黒岩さんが実権を握ることになりますね。元会長の奥さんももう黒岩さんの女のようなものですからね」
と二人の口調も心なしか軽くなった。
「女は怖いな、５０半ばでもどんどん締めつけてくる。よっぽど死んだ会長がかまってやらなかったのか、ベッドの上じゃ雌そのものだ」
もう疲れたよとでも言いたげな黒岩の言葉、苦笑しながら槌田は聞き返した。
「ところで洋子はどうするんですか。もう大久保をだます必要もなくなるわけですし、用済みだから始末すると」
「そこだ。確かにもう用はない。しかし今殺したら大久保が怪しむ。だから本当に会社が私の手に入るまでそのままにしておくつもりだ。なに、金を与えておいて見張っておけばいいだろう。病気の子供を面倒見なちゃならないのだから逃げる心配もないだろう？」
「しかし、寺田と連絡が取れないことに洋子があやしみませんかね」
「槌田お前、俺がやつに与えた携帯を取り戻したろうな？」
「それは間違いなく」
「そのほかのメールの設定情報は？」
「なにもかもうちの事務所にあります」
「それなら寺田になりすまし奴のアドレスで洋子にメールを打っておけばいいだけの話だ」
そんなこともわからんのかと怠惰そうに黒岩はいった。
「準備は整った。暫く黒岩との打ち合わせがあって、連絡できなくなる。全て終わって金を受け取ったら電話する。それまで静かに待っていろ。必ず連絡する。赤ん坊のためにも下手なことはするな。とでも書いておけ」
「大丈夫でしょうか」
黒岩は自信ありげに言葉を返した。
「ほかにあの女に何ができる。子供と暮らすための金がどうしてもほしいんだ。何にもできやしないさ、なんなら女の口座に見せ金１００万ほど振り込んでやったらいい」
「わかりました。で全て片づいたら？」
「海外にいい病院があるからといって誘い出し、子供ごと父親（寺田）と同じ海に沈めてやれ、どうせ長くは生きられないのだから親子三人その方が幸せだろう」
なんとむごいことを、胸の奥から激しい怒りがわき上がってきた。
ダウン症の我が子をかかえ、人生のぎりぎりのところ、血を吐きそうな毎日を送っている洋子。その彼女が必死に守ろうとしている小さな命までも黒岩は利害の計算の中に入れようとしている。ふと寺田の泣き顔が目に浮かんだ。
「そうですね」
槌田の返事はただ媚びへつらうだけ。彼の言葉には意志は感じられなかった。
「早く株主総会にならないですかね。その時は儲からない弁護士家業とはおさらばして、私も取締役の１人として下古電気に加われるのですから」
その時初めて槌田は本来の仕事は弁護士だと知った。
「その前に株主議決権３分の２を手にしないとな。追い出す者も追い出せない。後何ヶ月

もない。一年越しの計画だ、しくじることのないようにな。そういえばユリはどうした。あれだけ仕込んでやったんだおまえの手には余るほどだったろう」
槌田は咳を一つした。
「たしかに、あんないい女が証券会社みたいなお堅いところによくいたもんですね。百合ぐらいなら銀座に勤めても十分やっていけますよ」
「あはは、あいつはな寺田と同じ会社で働いて、奴とつきあっていたらしい。あんな男でも百合にはいい男に見えたんだろうな。恋に惑わされて自分の客の株も寺田に回していたはいいが、当の寺田がポシャッてしまったわけだ。お前から利用できそうな男がいると紹介された寺田についてきた金魚のフンだ」
この時点で俺の記憶はかすれ始めていた。黒岩が語るユリという女、勤めている証券会社から年齢、役職にいたるまで俺の知っている百合と限りなく近かった。しかしまだ半信半疑でちがうちがうちと口の中でぶつぶつ唱えた。黒岩の話によると寺田の分析能力は高いものがあったが、彼を表に出して株を集めさせるわけにもいかず、会社に残っていたユリという女を利用し２重３重の幕で自らの存在を隠していたらしい。
「さすが黒岩さん、そつがないというか無駄がないというか」
「あの身体、ただ遊ばせておくのはもったいないと思うだろうが」
「据え膳食わぬはですか？えへへ」
同姓としても身の毛の寒くなるような槌田の薄笑いだった。
「なに、ユリも俺についていたからこそ寺田に注ぎこんだ負債も返済できたんだ。それどころか今じゃ社内で業績がトップというんだからな」
「自分から毒饅頭を食って肥えた女ですか、元会長の奥さんもですがユリも怖い女ですね」
感慨深げに語る槌田に黒岩は諭すように言った。
「たいていそんな物だ」
「はあ」
「いい年した男が今更何女をに夢みてる、そんなことじゃあそのうち女に食い殺ろされるぞ、しっかりしろ」
「わかりました」
「でどうなんた、俺の作品試してみて感想の一つも聞きたいものだな」
槌田はむせた。
「感想なんて。それはいいなんてもんじゃないですよ。どうやったらあんな風に仕込めるんですかね。何もかも搾り取られるような気がします」
「ほほう」
「やっぱりユリも始末するんですか？」
未練たっぷりの声は黒岩をさらに喜ばせた。
「お前の言うのもわからんでもないがなあ」
「けれどユリは私が寺田を殺した事も知らないわけですし、さして危険はないんじゃ？」
動機がどうであれユリという女の命乞いをしたいと、黒岩の譲歩を引き出したい槌田。
「あまいよ。寺田がこの世を去った以上、彼の存在を知る洋子と百合がいつ不審を持って脅してこないともかぎらんだろ。用のない者に情けを掛けて後々悔やむより、切り捨てるときは切り捨てる、それが最前の防衛なんだよ。それに最近百合の様子が少しおかしい、

もしかしたら洋子より先に始末すべきかもしれんぞ」
「そうですか・・・」
残念そうな槌田の口振りに
「そう嘆くな、まだ日はある。その前にこれから俺とおまえで楽しむか」
黒岩の提案に槌田は一も二もなく同意した。
「こんなスケベな弁護士見たことないぞ」
「勘弁してくださいよ」
「あははは、でユリは今どこにいる」
「使いにやったんでもうすぐ戻ってくると思います」
「槌田そんなに目をぎらつかせるな、はずかしい」
それでもまだ信じられなかった。どうしてもこの男達がいうようなユリという女と俺の知っている百合の姿が重ならない。とにかくここを出てその百合という女の顔を確かめなければ。もし俺の百合なら彼女が部屋に入る前に連れ出さなくては、でないと殺されてしまう。俺は天井裏から抜け出そうと身構えた。しかし遅かった。ドアを開ける音がして誰かが部屋に入ってきた。
「黒岩さん！」
その声に心臓がもぎ取られた。動けなかった。涙があふれてきた。コンクリートの上の埃が点々と涙で固まる。百合の声だった。間違いない。聞き慣れたあの優しい俺の百合の声だった。
「珍しいですね、こんな昼間に、なにか？」
「いや寺田とさっきまでうち合わせをしてきてな。ついでだから槌田にも最終確認をと思ってな。それにお前のことも気になって」
「。。。」
「最近仕事の打ち合わせ以外、寺田とまったくあわないらしいじゃないか」
黒岩に水を向けられたが百合の声は何かを吹っ切るように答えた。
「逢いたくないんです、もう。。。」
「まあいい、それならそれで。もうすぐ予定通りことが終わる。ここまで来たのも寺田と君のおかげだ。槌田君から聞いたと思うが寺田には他の仕事をしてもらうために海外へ行ってもらった。必要な書類は槌田君にわたしてある。優秀な君なら彼がいなくてもできるだろ」
「ええ、もう整理だけですから」
「いい子だ」
黒岩の言葉に甘い匂いが織り込まれた。百合もその変化を感じ取ったのだろう。
「一つお願いがあります」
黒岩の声が百合に近づく。
「いってごらん」
「この仕事が終わったら暫く故郷に帰ってきていいですか？」
「何かあったのかい」
黒岩が百合の身体にふれている。
「いいえ、でも少し疲れて、母の顔も見たいし」

「なんだそんなことか、いいよ、帰って親孝行しておいで」
黒岩に愛撫されているのか百合は悶え始めた。
「ほんと？」
「ああ、その代わり百合、久しぶりにおまえの身体が見せてくれないか」
「そんな槌田さんの前で」
「何も恥ずかしがることはない。今君の事を彼に聞いていたんだ、誉めていたよ。”凄いって”」
沈黙が敷かれその上に百合が押し倒される音がした。何秒もしないうちにベルトを外す音が聞こえ、彼女に群がる男たちの薄ら笑いと歓喜の声が耳に響いた。俺は夢遊病者のようにその場を去った。どうやって天井から降りたたのかも覚えていない。気づいたときには埃まみれの身体で、マンション前の塀にもたれていた。

　あれから何時間過ぎたのだろうか。黒岩はもう会社に戻っただろうか、それともまだ・・・。俺はマンション近くの公園のベンチに座り、流れる鼻水もかまわないで泣いていた。なんで百合があんなことに。鈴のようにケラケラとよく笑う百合の顔が目浮かんだ。今彼女はあんな男達にもて遊ばれている、それもソープの女のように。今思えば部屋に置いてあった暴露本も、あの夜濡れていた髪もここに繋がっていたんだと気付いた。でも何故あの雨の夜彼女は泣いたのだろう？俺はまだ何も知らなかったのに。真実を知ったからこそ尚更、涙の意味が分からなかった。様々な思いが駆けめぐり俺を縛った。そして最後に返ってきた答えは自分自身の愚かさだった。俺も富田洋子に身をゆだねた。百合だってそれを知ったら今の俺と同じ気持ちになるに違いない。なんと愚かな事を俺はしていたのか。全て虚しいママゴトのようだ。百合をもてあそぶ太鼓のような二つの腹。シミの浮き出た汚い男の肌がちらつく。でもどうしたらいいんだ？このまま放っておけば百合は間違いなく殺される。夕暮れの風が涙で濡れた頬をなでていった。
　電灯が一つ二つとつき始めた。しかし一番端の電灯が灯りそうで灯らない。点滅するそれに心は振り子のように揺れた。そして俺は思った。彼女がしていた事、俺がしていた事、どちらの裏切りが重いか軽いかなんて意味のない。引き算をし例え答えが０になったからといって何もなかったことにはならいだろう。そんな卑しい整理しか思い浮かばない自分を恥じた。それならいっその事は何もかも棚に上げて考えよう。消して逃げたいのではなくそうすれば百合の事だけ考えられる。ようやく最後の電灯が灯った時、俺の気持ちも固まった。百合を救いだそう。彼女と暮らした半年、俺は確かに幸せだった。それを与えてくれた百合を見殺しになど出来ない。無事救い出せた時、全て話せばいい。答えを０にする為ではなく真に向き合うために。たとえそれで彼女を失う事になろうとも俺はいい。
結局、百合がこの世からいなくなるのは絶えられなかった。今更ながらこんなに彼女を想っていたんだという自分に驚いた。ズボンのポケットからアイロンの利いたハンカチを取り出した。それはいつも彼女がかけてくれていた物だった。涙混じりのしょっぱい鼻水を拭いた。彼女の香りがした。また切なくなって涙ぐんでしまいそうになる。女々しくて情けない男だと思った。
「泣くな」

そう自分に言い聞かせた。泣いている暇などないはずだ、なんとしても百合を連れ出さないと。しかしどうすれば、そのとき公園の脇を両手に青いゴミ袋を抱えたおばさんが通っていった。彼女はあたりを伺い誰もいないことを確かめるとゴミ収集用の鉄籠にゴミ袋を押し込んだ。おそらく回収日は明日なのだろう、朝早くのゴミ出しが嫌で彼女は闇夜に紛れ一日早くそれをすませたに違いない。それを見てピンと来た。ヒントを掴むとアイディアが膨らんだ。いけるかもしれないと思った。しかし突き詰めて考えると、それを実行するにはマンションの住人の協力が必要だとわかった。黒石さんの顔が浮かんだ。彼女に手伝ってもらえないだろうか？だめもとで頼み込むことにした。俺は管理人をインターホンで呼び出し黒石さんにつなげてもらった。
「はい、黒石です。武田さん？どうなさったの？」
「あんなかっこいいこと言って、直ぐにお呼びしてしまいすいません。少しお願いしたい事あって」
他人からお願いがあると言われて警戒しない人間はいない。
「ご迷惑はかけません。インターホンではなんですから、僕の携帯に電話をいただけませんか」
少し間をおいて
「はい」
と彼女は答え、俺が番号を伝えるとその数分後に携帯が鳴った。
「もしもし、黒石です」
すこし緊張した声だ。やはり嫌がられたのだろうか。
「武田です、本当に申し訳ありません。ご迷惑だとは十分わっているんですが、貴方にしかお願いできなくて」
「なんでしょう？」
「実は今日僕がこちらに来たのは偶然じゃないんです」
「どういうことかしら」
「ある人を捜しに来たんです」
「？」
「恋人です。彼女は騙されて貴方と同じマンションにいます。危険なんです。助けたいんです。信じて下さい。僕はストーカーじゃないし、ただ」
彼女の言葉に緊張は消えていた。
「それはわかってますよ。嘘をつく人とは思ってないは」
「それじゃあ手伝って頂けるんでしょうか」
「ええ、でも一度だけだけよ」
「ありがとうございます」
携帯越しに何度も頭を下げた。
「わかったから、で、私は何をすればいいのかしら？」
俺はまず前提となる条件を彼女に確認した。
「明日はこの地区一帯のゴミ収集日じゃありませんか？」
「ええそうよ」
「明日の朝、管理人さんに言って欲しいんです。」

「何を言えばいいの？」
「５階の黒岩さんところの女性のように見えたけれど、出されたゴミの中身から水が出てるし、瓶も缶もごちゃ混ぜだから本人に確かめて注意してくれ、と苦情を言って欲しいんです」
「それだけでいいの？」
拍子抜けしたようにもほっとしたようにも聞こえた。
「それで十分です。それ以上決してご迷惑はかけません」
力の入った俺の言葉に彼女は一拍おいて同意した。
「わかったわ。明日７時に管理人にいうわね」
「良かった」
俺は礼を言うよりも、自分の気持ちをそのまま言葉にしてしまった。
「親切にしてくれたお礼よ」
携帯を耳に当てたままマンションの玄関の壁にもたれ、夕暮れを家路につく人々を見ていた。
さっき黒石さんが転んだ場所のあたりだろうか、蛍光色ベルトをした初老の夫婦がウォーキングをしてこちらにやってくる。それを眺めながら言葉をつづけた。
自分が親切なんて微塵も思わないが、だれかには良い人間と思われていたいとは思う。
「あの、初めからこんな事頼もうとして貴女に近寄った訳じゃありませんから」
「ええ、わかってるは」
それ以上言い訳をするとかえって彼女の機嫌を損ねそうで止めた。
「足の具合はどうですか？」
「うん、ずいぶんいいみたい、顔は腫れて暫くは人に見せられないけどね」
「二三日もすれば大丈夫ですよ。あとは化粧でごまかしちゃえばなんとか」
「厚化粧しなきゃ？って」
彼女は笑った。
「もうお電話もする事はないと思いますが、お大事に。本当にありがとうございました」
「君も元気で。彼女、大切にしてあげてね」
「はい、さようなら」
礼儀と思い自分の方から電話を切った。目の前を夫婦が通り過ぎていく。その脇を耳障りなマフラーの音と大音量で音楽を鳴らす車が走り去った。妻の身を案じ旦那が手を広げその車から守った。さりげない旦那の優しさが俺の心を温かくしてくれた。さあ明日の朝までベンチで横になろう。

『ラジオ体操第１。。。』その音で俺は目を覚ました。子供達が砂場の横で首に葉書大の大きさの紙を下げ怠惰そうに体操をしていた。前の方では上級生がラジオを傍らに置き、下級生に見えるように大げさとも思えるほど手足を動かしていた。（夏休みか）ゆっくりと身体を起こし下になっていた肩をもみほぐしす。公園の真向かいのコンビニで梅とおかかおにぎりを買うと、早いとは思ったが公衆電話から下古電気の警備室に『今日は具合が悪いので休ませてほしいと清掃主任が出勤されたら伝言をお願いします』と連絡をいれた。

今まで無断欠勤した事は一度もない。だが変則的な作業予定の確認ミスで遅刻しそうになった時、自覚が足りないと百合に叱られた時があった。彼女は慌てて出勤しようとする俺を引き留め『会社に連絡するのが先よ』と教えられた。それからはメモを持ち歩くようになり電話連絡も欠かさずするようになった。生活のあちらこちらに百合が残っているんだな思った。俺はベンチに腰掛け食事をはじめた。子供達はラジオ体操第二も終え、判子をもらおうと班長の前に並んでいる。俺はそれを見ながらおかかにかじりついた。一人また一人と公園から子供が帰っていく、２つ目の梅干しにぎりをコーラで胃に流し終える頃には誰もいなくなった。人間とはおかしいものでいくら悲しくても腹が満たされると精気が沸いてくる。俺は水飲み場の水道で顔を洗い、比較的綺麗な公衆トイレで出すものを出した。さあ行くぞと心に鎧を身につけベンチを立った。空を見上げると夏の太陽はもう存在感を発揮していた。ギラギラと照りつける日差し、出勤する会社員はハンカチを握りしめていた。時間を確かめると針は６時５０分をさしていた。ヘルメットをかぶりバイクにまたがると、マンション住人専用のゴミ収集箱が見える場所までバイクを押していった。マンションから次々と夏ばて気味の住人達が出てきた。朝、ゴミ袋を置いていくのは大半が夫らしき男性ばかり、女性の姿は見えない。７時１０分、男性の群が去った後ようやく一人二人ＯＬらしき女性がゴミ袋を抱えて出てきた。おそらく彼女たちは独身なのだろう。

　７時２０分、玄関の奥に女性があらわれた。目隠し様に薄く青みがかったガラスにぼやけよく見えない。自動ドアが開いた。その姿は紛れもなく百合だった。ツーピースにサンダルを引っかけゴミ収集所に降りていく。そして

「なんなの、もう、私ちゃんと出したのに」

そうゴミに向かってぼやいた。俺は彼女の背中にそっと回り声をかけた。

「百合、おい百合」

彼女の身体が固まった。

「え！」

俺の声だとわったのだろう。しかしなぜという疑問と恐怖とでこちらを振り向けない。

「百合」

彼女の身体を引き寄せ自分に向けた。

「百合、君は槌田達に殺される。嘘じゃない」

「なんのこと？」

「みんな知ってるんだよ」

肩が震えていた。

「・・・、なら帰って、もういいから」

「だめだ」

俺はマンションの中に絶えず視線を振った。いつ槌田が現れないとも限らない。

迷っている彼女に言った。

「俺を信じろ」

百合は俺の目を見ていった。

「わかった」

彼女の手首を掴みバイクの後ろに乗せた。そして力無く俺に身を預ける百合の腕を俺の腰に抱きつかせた。その時玄関に人影が見えた。黒石さんだった。びっこを引きながら

OK サインをだしていた。心の中で礼を言い頭を下げた。
「さあ、行くぞ」
その言葉に彼女は頷いた。
「ごめんね、ユウ」
「しっかり捕まっていろよ」
アクセルを回した。早く遠くへ安全な場所へ行かなければ。疾走するバイク。背中に雨雲がいるというのに、本当に天気のいい朝だった。海が遠くでキラキラ光っていた。

午後４時、二人は駒沢隆二の部屋にいた。彼には悪かったがマンションに戻るような馬鹿なまねは出来ない。百合がいなくなって今頃槌田は必死になって探しているはずだ。間違いなく奴は追い掛けてくる。そうなれば一緒に暮らしている俺の事も直ぐに知るだろう。いま帰るのは自殺行為だとおもった。
「駒沢、約束通りつれてきたぞ」
百合は軽い会釈だけして視線を落とした。
「おう、でもすまんおれ用事ができて出かけなくちゃいけないんだ。夜までここで待っててくれないか」
駒沢は俺達の重苦しい空気を感じたのだろう。今まで寝ていた彼が気を利かし部屋を出ていこうとする。パソコンおたくというと感情のない無機質な人種かと思われそうだが、それは明らかに偏見だった。俺が駒沢と仲良くできたのも彼のお仕着せのない優しさを感じたからだと思う。
「すまん、迷惑をかけて」
「いいよ、その代わりＤＶＤ－Ｒ１００枚な」
笑いながら駒沢は出ていった。彼が出ていくときに閉めたドアの音が裁判のはじまりを告げる音の様に聞こえた。百合は膝を抱いて黙ったまま俺が何か言うのを待っている。けれどなかなか切り出せない。やっとの事で口からこぼれた言葉は
「逢いたかった」
だった。我ながらなんと間抜けな言いぐさだ、しかし後悔したところで代わりの言葉を持ち合わせているわけでもない。結局、何を言ってもしっくりしない気がした。
「やめて」
俺は沈黙で応えた。
「私は腐ってる」
俺は沈黙で泣いた。
「あなたの知らないところで私は・・・」
あなたと呼ばれたことに俺は戸惑った。一緒に暮らしてからそんな風に呼ばれたことがなかったからだ。しかしそれをぐっと堪え彼女に真実を話した。
「百合があの部屋に帰ってくる前、奴らはいつ君を殺すか相談をしていんだ」
「何であなたがそんなこと知ってるのよ」
「あの部屋の天井裏にいたのさ。百合が帰ってくる寸前まで奴らの話を聞いていた」
それを聞いた途端、百合の表情がさらに曇った。

「寸前って、いつまでいたの？」
「いつまでって・・・」
「酷い」
「いいから黙って聞けよ」
百合の両腕を掴み指先に力を入れた。
「痛い」
腕を振りほどこうとする百合。
「俺に百合を責める資格なんてないんだ」
「慰めなんかいいわ」
「慰めなんかじゃない、俺も同じような事してたんだ」
鍵をかけ封印していた重い扉、それを鍵を使わず力ずくでぶちこわす気ようだった。
「もう何も聞きたくない」
耳をふさごうとする百合の両手を俺の両手で挟み込んだ。暴れようとする彼女、俺は彼女の手をしっかりと握ったまま目を見た。
「聞くんだ」
自分でも驚くほどの怒鳴り声、百合は体を硬くした。
「俺は、仕事中ある女の存在を知った」
「富田洋子、君も知ってるだろ？」
それ誰という顔で百合はこちらを見た。
「もしかして知らないのか？」
「知らない」
てっきり洋子／寺田／百合達三人は互いに連絡を取り合っているものだと思いこんでいた。意外だった。ならどこから話せばいいのか？ビデオテープを再生しながら巻き戻すように記憶の映像を早回しで後戻りした。そして酒に酔いつぶれたあの日まで遡った。
「俺が酔いつぶれて倒れてたときあっただろ」
「うん」
「あの日、俺は百合の読みかけの経済誌をみつけたたんだ」
その雑誌がなんだったのかすぐに百合は思い出したようだった。
「じゃあ、そこに書かれていた下古電気社長の息子、大久保信士の事は知ってるね」
その記事を読んだ後、以前から知っていた富田洋子という女と大久保信士が知り合いだと言うことを百合と言った喫茶店で目撃したこと。そして二人に興味を持った俺は富田洋子に近づき調べたこと。そこにはドロドロした過去が会社の主導権抗争に利用されていた事など百合も知らない真実を彼女に話した。
「そのとき、富田洋子に関係をせまられ」
百合は悲しそうな目をした。卑怯な言い方だと思った、しかし少しでも逃げ道が、やっぱり卑怯だった。
「好きになったの？」
「いいや、そんなんじゃない。ただ単に利用し利用されているだけさ」
「そう」
彼女は俺を咎めなかった。

「どういう女性なの？その洋子という人」
「なぜ寺田が順調に下古電気の株を調達できたか百合は不思議に思ったことはないか？」
「寺田のことも知ってるのね」
「ああ」
「そう」
『そう』という言葉は相づちなのか溜息なのか。
「寺田は富田洋子とも関係してた」
「”も”って事は私ともってことね」
百合にとっては一時は結婚まで考えていた男、俺はどうやってオブラートに包みながら寺田の話をしたらいいのか必死に考えた。
「でも仕方なかったんだよ」
客とホステスという関係だったはずの富田洋子が身ごもり、寺田が百合との関係を守る為に洋子の出産に反対したこと。しかし洋子は反対を押し切り一人で産むために寺田の前から姿を消したこと。そして古電の創業者、下古健三の愛人となり下古の子と偽って産もうとした子が臨月に入ってからダウン症だと知り寺田に泣きついた事。その後、洋子と寺田のたどった経緯や、病院にいる彼女の子供の存在を利用した黒岩の罠、そしてその策略に乗って下古電気に清掃員としてもぐり込んでいる今の自分の状況も全てを話した。百合は半信半疑に聞き返した。
「でもわからない。なぜあなたがそんな事を知る必要があったの」
「このチャンスものにして這い上がりたかった」
「馬鹿、なに危険な事してんのよ、言ったでしょ私は今のままでいいって。殺されちゃうよ」
最近、上ばかり見ていた俺が知らぬ間にこんな事までしていたのかと百合は自分の事を忘れ目に涙を浮かべ怒った。
「槌田の話を聞くまでは俺もそう思ってた。でも今はこれでよかったと思う」
「？」
「じゃないと百合を助けられなかった」
俺は来週水曜日に株売買の契約が成立した後、黒岩が槌田に洋子や百合を殺すように強く指示をしていた事を話して聞かせた。
「嘘よ、だって黒岩は私と寺田を必要としているし、ありえない」
「ならその寺田が今どこにいるのか知ってるかい」
「なにが言いたいの」
百合の顔から血の気が引いていく。
「確か、今、海外へ行っているはずよ」
そうあってほしいと願うのだろう百合の目が俺を掴む。
「本当にそう思うかい？」
「ちょっとまってよ」
その言葉を振り切り俺はたたみかけた。
「来週には寺田が苦労してまとめた商談がまとまるというのに、なぜそんな大事な時期に、の仕事を離れて海外へいかなくちゃいけない？」

「ならどこにいるというの？」
恐る恐る聞き返してはいるが既に予想がついているように見えた。
「槌田に殺されて東京湾の沖合に沈められたよ、先週の日曜日だ」
震えが止まらない彼女。しかしまだ信じたくないと首をしきりに振る。
「なぜあなたがそんなこと知ってるのよ」
「俺は寺田から情報仕入れたいと思って近づいていた。そんな時、日曜の夜、街で偶然彼にあったんだ。とてもうれしそうだった。仕事を片づけたら飯に連れて行ってやると誘われた。それで一緒に車に乗って港まで行った。待っていたのは槌田さ。そこで寺田は俺の目の前で殺されたんだ」
「嘘よ、彼が死んだなんて」
ヒステリックに叫ぶ彼女の両肩を捕まえる。
「俺だってもう少しで殺されるところだったんだ。これを見ろよ」
Ｔシャツをめくり脇腹のガーゼをむしり取った。二日たっても傷跡は生々しく口を開け筋肉と筋肉を繋ぐ白い筋が見えていた。突然そんなものを見せられ、彼女はまるで自分が切られたように傷口を自分の手で覆った
「いやや」
「目を背けるな、まだ証拠はある。このメールを見ろよ、昨日黒岩のところから盗んできたものだ」
昨日、ここから俺宛に送ったメール（解読した黒岩宛のメール）を見ようと、駒沢のパソコンを借りてｗｅｂ上の受信箱を開いた。リスとされているメールを見て心臓が凍り付いた。目的としたメール意外に槌田からメールが届いていた。共に見ていた百合が真っ先に俺に尋ねた。
「なぜ槌田さんからきているの？」
「わからない」
こっちの方が聞きたいぐらいだ。なぜ俺のアドレスを槌田が知っているのか？薄暗い部屋で俺と百合は画面を見つめ、そこから放たれた青白い光りに二人の顔は照らされていた。とにかく駒沢から送られた黒岩のメールを見せた。それを彼女は食い入るようにそれを読んだ。
「本当なのね黒岩さんが寺田さんを殺したというのは」
口ごもる彼女の動揺は益々その大きさを増し､彼女の手が僕の服のスソを握りしめていた。
「黒岩は言っていたよ。百合は知りすぎたって。いつ寺田の事に疑問を感じて裏切るかわからないと、だからそうならないうちに消してしまおうと」
青ざめる百合。へたり込み彼女は動かない、俺は槌田からのメールをなかなか開く勇気がでなかった。マウスをクリックする人差し指に力が入らない。しかし覚悟を決めカチンと左ボタンを押し下げた。その音がとても鮮明にそして大きく聞こえたのは百合も同じだろう。

From:槌田　大樹〈tutida@syuop.ne.jp〉
To:　武田　祐二〈yuji16@hotmail.com〉
Sent: Thu, Aug 01, 2000 02:00 PM

Subject: こんにちは

はじめまして武田君、今君たちのマンションにいるよ。百合が急にいなくなって、もしやと思ってあちらこちら探させてもらったよ。机の上の写真たてに百合と一緒に写っている人物を見て驚いたよ。寺田を始末したときあそこにいたのは君だったんだね。探したよ。それにもっと驚いたのは君宛のメールに書かれていた内容さ、ああ君のパスワードはノートにご丁寧に書いてあったから助かったよ。おそらくこのメールを直ぐ見るだろうから、君に忠告しておく。君は黒岩さんと僕の計画を知ったようだね。いったい何がしたいのかな？何が目的だ。金か？たぶん寺田の件も百合に話したんだろうね。まあ馬鹿な真似はしないことだ。場合によっては君たちの命を助けてやってもいいんだ。さもなければ寺田以上に苦しんで死ぬ事になるよ。わかったなら明日までに連絡をよこしなさい。電話番号なら百合に聞きけばいい。

しかし君は知っているのかな百合の本性を。いいことを教えてやろう。
鏡に手をついて死ぬほど恥ずかしい自分をみながら突き上げられるのが好きなのさ。笑

お前達を逃がしはしない。日本のどこにいても隠れようとも必ず見つけだしてやる。

－－

「終わりね」
うなだれる彼女。とうとう俺自体が表舞台に出る事になってしまった。今までは脇役の控えのように身の危険を感じなくていい場所にいたのに、黒岩達に知られた以上、もう今までのようにはいかない。
「あなたは、なんて馬鹿なことを。私を助けなければ気づかれずにいたかもしれないのに、今度は本当に殺されちゃうよ」
何もかも知った彼女には先までの強がりはなかった。あるのは諦めと疲労だけだった。
「覚悟のうえさ」
「なんで、私が騙していた事知ったなら，ほっといて逃げればよかったのに」
「百合は俺を騙していたのかい」
「ううん、でもおなじことよ」
たぶんその時、俺の顔は情けないものだっただろう。
「こんな恥ずかしい姿あなただけには見せたくなかったよ、死ぬより恥ずかしい」
「だから俺だって」
「もういい、終わりにしよう。罵り合うことなくさよならしましょ。私のことは忘れて、お願い。嫌いになるなら嫌いになっていいから、こうしているのが辛いの」
百合の手がら俺から離れようとしていた。嫌だった。耐えられなかった。彼女を引き戻した。母親に抱きついて離れない子供のようだった。
「聞いて、寺田と知り合う迄、ずっと窓口業務していたの。大学でいい成績取ったからっ

て私の上司は女を馬鹿にして何一つさせてくれなかった。」
彼女の顔に悔しさが滲んでいた。
「でも寺田は違ったは、私を認めてくれていた。彼ね誰もが認める有能な人だったのよ。そんな人と一緒に仕事がしたいと思うようになり、そのうち彼に惹かれていった。今思うと彼といっしょなら自分も高い所へ登れると思い込んでしまった」
彼女の隠されていた部分が解けだしていた。
「価値観」
一言言って百合は笑った。
「今思えばそんな言葉に酔っていた気がする、終いには何にも見えなくなっていたは」
百合の視線が遠くへ流れた。それは記憶の奥底に積もった後悔を眺めるような目だった。
「だから、寺田が使途不明金を出した時も理解しようとした。きっと何か理由が有るんだってね。だから彼の求めに応じて私も同じようなことに手を染めたの。そして、気づいたときにはどうにもならなくなっていた」
「寺田から黒岩を？」
「そうよ、もうその頃には寺田も私も追いつめられていたの。初めは黒岩のいうとおりに寺田の手伝いをしているだけだった。けれどそのうち、荒んでいく寺田よりも黒岩の力強さが魅力的に思えてきたの。後は簡単に彼の誘のってしまった。・・・・・私から彼を求めたのかもしれないわね」
夕暮れが近づいたのだろうか、ブラインドの隙間を通り抜けた光が百合の目元を照らした。彼女の絞り出す声と、ブーンというパソコンのファンの音がこの部屋の空気を固めていく。
「私は黒岩に溺れていった。彼は何もかも力強くて。抱かれている時しか生きてるって感じられなくなっていたの」
「もういいって」
「聞いて」
百合はそういうと腕を俺の腰に回した。
「黒岩は私が変わるのを待っていたの。そして私は彼の思うとおりの女になった。すると彼の態度は変わり、私を物のように扱いだした。でもその時の私は彼に逆らえなくなっていたの」
洗脳が解けた信者のように、百合は眉間にしわ寄せ尚も話し続けた。
「でも次第に私は不安になった」
「不安？」
聞き返す俺の言葉を待っていたのだろう。もう一人で沈黙に話しかけるには辛すぎると、彼女は俺の目を見つめた。
「そう、身体は黒岩にたまらないほど燃えるのに、心の中がどんどん空っぽになっいくの。私を見ていてくれる人がいない、側にいてくれる人がだれもいなくなっていく、笑うこともなく、優しい気持ちにもなれず、ただの人形のようだなって」
百合の話を聞きながら何故か富田洋子が脳裏に浮かんだ。彼女も俺を責め立てている時『何してるの、君は人形よ、何も考えなくていいんだから言われたとおり腰を使いなさい』と何度も言っていた。そして俺が何かを考える事を執拗に嫌った。
「そんなとき俺と？」

「初めはほんの気まぐれだったの」
「・・・」
「怒っていいよ、ただ誰でもいいから抱きしめて欲しかった。惨めな私を包んでほしかったの」
洋子も本当は誰かに支えてほしくて、孤独が怖くて鎖で男を縛ったのだろう。どんなに傷つこうとあれが彼女の心の嘆きだったのだと思った。
「何も知らない貴方は私の不安を癒してくれた。それがとても心地よくて、でも怖くなって、本当の事知られないうち逃げ出そうとしたは。何度も何度も。でもできなかった。あなたいないと一人じゃ寂しくて、強がりもいえなくなって、もう他の人じゃ駄目になっていたの、貴方が側にいないとどうしていいのか」
「だからあの夜、泣いたんだね」
彼女は何も応えなかった。
「百合、まだ黒岩の元に戻りたい？正直に言っていいんだ」
頭を小さく横に振り、
「疲れたは。例え黒岩殺されなくてももう彼の所には帰らない。結局何もかもなくなってしまったもの」
「俺の所へ」
「無理、もうこれ以上あなたとはいられないよ」
その言葉が強がりでないことは鈍感な俺にもわかった。惨めな関係になるのが怖いのだと。
「このまま別れる訳にはいかないんだ。だってそうだろ、奴らは必ず君を殺しに来る」
「でしょうね」
「だったら一緒に警察に行ってこの事を話そう」
「それはだめ、絶対だめ」
「どうして」
「槌田が書いてたじゃない『馬鹿な事するなって』それってそういうことでしょ」
「俺がついてる」
「だからよ、そんな事したらあなたまで間違いなく狙われるでしょ」
「俺はいいんだ」
「私がいやなのょ・・・」
押し黙る彼女の頬を涙がつたい俺の胸元を濡らした。ほのかに香る懐かしい彼女の香り。
「なんで早く出会わなかったんだろうね。こんなに好きなのに、駄目にならないと２人とも大切な事に気づかないなんてね」
前髪の間から覗く彼女の瞳は、沈む夕焼けを見つめたまま瞼を閉じようともしない。まるで目をつぶしてこのまま何も見えなくなりたいというふうだ。
「百合がなんと言おうと俺は守る」
百合の目から涙が溢れだした。
「ユウに今殺されるなら本望なのに、もうまかせるよ、みんな」
百合は頬を俺の肩に乗せ身を預けた。張りつめていた最後の糸が切れたようだった。
「やっとユウと呼んでくれたね」
「辛いもの、あなたと呼ぶのは」

「俺も」
未来を無くしてしまった。二人にそんな敗北感が漂っていた。でも百合さえ生きていてくれたらそれでよかった。多くを望まない。かっこつける訳でなく。自分と彼女のどちらを取ると自分に聞いたならその答えしかなかった。百合の顎を右手で引き寄せ口づけしようとした。彼女は咄嗟に手で俺の口を覆い、頭を激しく振った。
「お願い、やめて」
俺を押し退けようとする腕を掴み強引に唇を奪った。彼女がそれを望まない事もわかってる。けれど俺だって強くないんだ。声にならない言葉で百合に白状した。
「俺もユリがいないとだめなんだ、愛してる」
ブラインドから差し込んでいた夕映えも夜の戸張に飲み込まれていた。互いの顔の輪郭が見える程の暗い部屋。いつのまにか俺の目からも涙が流れだしていた。やっと正直になれた気がした。そうやっと。

その夜、迷惑は承知の上で駒沢のアパートに泊めてもらった。せめてものお礼と百合は簡単な料理を作りテーブルに並べた。俺達の様子を見かねて、普段あまり話すタイプではない駒沢が、何とか笑わせようとはしゃいでいた。
「百合さん、気に入った。こんなにうまいもん作れて、こんなに美人で、華があるね～華が」
百合の顔に笑顔が少しもどる。
「武田なんかにゃもったいないけど、俺にももったいない」
俺も同感だった。男二人して久しぶりの食事らしい食事に喉をならした。駒沢が大きな口で料理を頬張り美味い美味いを連発する。そんな駒沢を見ていると、一瞬、何もかも忘れて可笑しさこみ上げてくる。さんざん騒いだ挙げ句駒沢は酔いつぶれそのまま寝てしまった（ふりかもしれないが）。俺はその夜、久しぶりに百合の寝顔を眺めながら眠りについた。綺麗な寝顔だった。それを見ていると全てが夢のように思えた。

悪夢は覚めていなかっかった。一晩たった俺達は昨日より冷静に現実を感じていた。
俺は駒沢に礼を言い部屋をあとにした。バイクは好きなだけ使えと彼は言ってくれた。
「武田じゃなくて、百合さんに貸しますよ。その代わりまたご飯作ってくださいね」
と笑う。
「食い物の力は偉大だな」
冗談をいってはみたが、本当は彼の優しさに感謝の言葉が見つからなかっただけだった。
「祐二」
彼は俺の名を呼んだ。
「なんかあったらまた来い、遠慮するな、わかったか」
二階のさびついた手すりに寄りかかり駒沢は左手を振っていた。
「おう」
このとき俺は駒沢が本当の友人になったことを感じた。都会に出て友といえる人間を俺は要約見つけたんだ。鍵を差し込みエンジンを目覚めざせた。背中に感じる百合の鼓動、守

る女が俺にはいる。拳を駒沢に向かって高く突き上げた。

午前１１時２０分、新宿中央署の防犯課。都の財政難の為か署内のクーラーは殆ど利いていなかった。ひっきりなしにやってくる問題を抱えた市民、連行されるチンピラ達の対応におわれ、署員の背中には汗が滲んでいた。まるで夏のアメヨコのようなその場所で俺達はさんざん待たされた。２時間後ようやく受付カウンターの内側にある小さなテーブルに案内された。話を聞いてくれたのは４０代後半の浅田という刑事だった。小太りで二重顎、タバコの吸いすぎなのかそれとも元々気管支が悪いのか受け答えする彼の声は、どこか空気が漏れているような、喘息のような何とも不快で耳障りな感じがした。聞いていてこちらが病気になりそうだった。

俺達はこの人が助けてくれるのだと信じ、彼の目を見つめ失礼にならぬよう言葉を選び今までの事を説明した。しかし話せば話すほど浅田の関心は薄くなっていった。そればかりか俺の年の若さや職業、家出の事、年の離れた彼女の関係など今回の事とは無関係な内容に質問は向けられていく。俺は苛立ちのあまりテーブルを両手で叩いてしまった。

「だからこのフロッピーのメールに書いてあるように、黒岩が槌田を使って寺田を殺したんです。嘘じゃない、俺達狙われてるんです助けてください」

寺田という男の死体もなく、身元不明の捜索願いも出ていない。ましてや殺したのは大会社の重役と仲間、そんな告発を二十歳前の男にされて、すぐ真に受ける馬鹿な刑事じゃないといいたげに脂肪で分厚く膨らだ瞼の奥の濁った瞳は笑っていた。

「武田君と言ったね。もう少し具体的な証拠がないと事件としては捜査はできないな」

「だからこのメールが」

「自筆ならいざ知らず、インターネットのメールかなんだかわからんが、そんな物は証拠にならないんだよ」

俺は語気をあらげた。

「警視庁にインターネット専門の捜査班が出来たとニュースでやってましたよね。そこで調べて・・・」

浅田は内耳をかきながらさも怠惰そうに

「君ねえ、そんなことはこちらが判断することなんだよ。第一あれだろ」

爪の先についた耳垢をフゥと吹き飛ばし、その指を背広に拭い付けた。

「その寺田という男が横浜の倉庫で殺されたというなら、なんでこの新宿の警察に来るんだい、管轄違いだよ。あちらに優秀な刑事がいるだろ」

どこの警察に行けばいいかなんて一般人がわかるはずもない。浅田がそういうなら先方の警察に連絡を取ってくれるのかと思えばそんな素振りもない。ただ早く帰ってくれないかとでも言いたげに左足が貧乏揺すりをするだけだ。

「じゃあ、どちらの警察署に行けばいいんですか？」

奥歯をかみしめながらも浅田に訪ねるた。

「そうだな、あそこは確か？ゲホゲホ」

痰のからまったような咳に手を当てる出もなく、机の脇にぶら下げてあるファイルの表を眺め始めた。するとそこに２０代の若い刑事がやってきて浅田に耳打ちをした。そして浅

田は若い刑事からなにやら書類を受け取ると百合の方へ膝をむけ一つ咳をした。
「すいません。さきほどお名前をお伺いしましたが、もう一度お聞きかせいただけますか？」
彼女はなんで？という顔で俺の方を向いた。
「百合が何か？」
「武田さん、あなたに聞いているんじゃありません。彼女に尋ねているんです」
刑事という職業柄、その言葉には太い骨が通っている感じがした。胃の下がキュンと締め付けられるような恐れとでもいうのだろうか､百合は唾を飲み込みようやくそれに答えた。
「飯田百合です」
「お勤めは桜庭証券ですか？」
「はい」
「昨日、会社があなたを横領の容疑で東京地検に告発しました」
百合の顔が見る見るうちに青ざめていった。
「あ、あれは黒岩さんがお金を補填してくれてお返ししたはずです」
「おかしいですね、会社の告訴状にはその黒岩氏の株を貴方が無断で売却し、それを私的流用で生じた損失に穴埋めしたとありますよ｡それに今の話では横領はしたが金は返した。犯罪は認めるんですね」
彼女の喉がごくりとなった。
「それには訳があるんだ」
俺はみんなに訴えた。
「君、五月蠅いよ、静かにしなさい、第一おかしいだろ、彼女の話が本当なら、負債の穴埋めをしてもらった相手を自ら告発する事になる？私が言うのもなんだが感謝する事はあっても訴えるなんてね」
俺たちが警察に来ることを予想して先回りして手を打っていたと直感した。甘かった。。。あのしたたかな男が指をくわえて待っているはずはなかった。百合は何が起きているのか理解できないのか足をふるえわせ、手の中のハンカチをギュッと握りつぶした。浅田は俺たち二人の動揺をはっきり感じ取ったのだろう血の臭い嗅ぎつけたハイエナのように目を輝かせ、その怠惰な態度を一変させた。
「とにかく、ここではなんだから奥に来てくれませんか。もうすぐの会社の方と弁護士さんがこちらに来られるから」
俺は側にいた若い刑事の背広をつかんで詰め寄った。
「お願いします。信じてください。その黒岩が一番悪い奴なんだから。あんたら警察は金持ちのいうことは信じて、俺達みたいなのがいうことはバカにするのかよ。悪い事してるのは金持ちばっかだろう」
若い刑事は言葉に一瞬詰まりはしたが、すぐに俺の手を払いのけ言った。
「そんな事は思っていないさ。それより君達のような若者が信じられないんだ。いい加減で、すぐ切れ、そのくせ権利ばかり主張する。俺達もウンザリしてるんだよ」
横でそれを聞いていた浅田も笑っていた。そうかもしれないが今の俺は違う。
「あんただって若いだろ、若いってだけで括るなよ。それに俺は今まで人に迷惑かけたことはない。一生に一度警察を頼ったときに、あんたがもし俺だったら、警察以外に何頼れ

ばいいんだ」
若い刑事に食い下がった。それを脇から面白可笑しそうに見ていた浅田は
「もういいだろ、話は別の部屋で聞くから」
と腰を上げた。いつの間にか制服の婦人警官が百合の側に立っていた。
「行きましょう」
婦人警官は百合の背中に手を添え取調室へと連れていこうとした。
「俺も行きます」
立ち上がろうとする俺に向かい、
「君はここにいなさい」
浅田は手のひらを突き出した。引き離されてしまう。百合は恐怖のあまり動けない。
「ユウ、怖いよ」
悲しい目をして彼女は助けを求めた。その時、カウンターの外で手錠をはめられたままの男がパイプ椅子を振り上げ暴れ出した。男は頭から血を流しながら中国語でしきりに何かを訴えている。みんなの視線が一瞬その中国人に集まった。俺は咄嗟に浅田を押し倒し、彼女の手をつかんだ。夏だというのに氷のように冷たくなった指先。不意をつかれた浅田は側にあった机の角に背中をぶつけてうめき声をあげている。周りにいた職員が振り返る。
「百合、逃げるぞ」
「うん」
人でごった返す警察署のロビーを全速で駆け抜けた。なぜ逃げなくてはいけないの自分でもかわからない。しかし逃げなくては、振り返るとあの若い刑事が追いかけてきていた。彼は落とし物を尋ねに来た老婆にぶつかり、老婆もろとも床に転んだ。俺は振り向いて手に持っていたフロッピーを若い刑事に向けて投げつけた。
「あんたが刑事なら、その目で事実を探し出して見ろよ」
若い刑事は膝を強打したのだろう、立てず悔しそうに床をたたいた。
「じゃなきゃ、あんたを偉そうに刑事面するんじゃねえ、ただの犬だ」
言葉を投げ付け玄関を飛び出した。すると出会い頭に男とぶつかった。叫び声をあたのげは百合の方が先だった。
「部長！！」
倒れた男は百合の上司らしい。しかしもっと驚いたのはそのあとに続いて階段を登って来たのが槌田だった事だ。彼らが俺達に気づかないほんの２、３秒、それはスローもションのように流れていった。槌田と入れ替わるように階段を下り、バイクに飛び乗った。雪崩のように玄関口から警察官があふれ出してくる。それに気づいた槌田も振り返り、階段からアスファルトへと飛び降りた。エンジンがかからない、何度もキックする、槌田がバイクに駆け寄ってくる。
「早く、ユウ、早く」
百合が俺の背中たたいたその時、エンジンが目を覚ました。それと同時にテールランプに槌田の手がかかる。次の瞬間クラッチのつながったエンジンはタイヤを回転させ、アスファルトをけり出すようにバイクを前方に押し出させた。槌田は手を離さざるを得なかったが、その時彼は言った。
「二人とも終わりだ、覚悟していろ」

それを聞いた百合の腕の力が抜け、彼女の体が俺の背中から離れていこうとする。右手でアクセルを回し、左手を後ろ手にして百合の腰を支える。車体が右左に揺れバランスを崩しそうになる。
「しっかりしろ百合、捕まれバカ」
転倒しそうになる直前、彼女の腕を捕まえた。俺は凧の紐を持つようにバイクを操った。追いかけてくる槌田、その前を署に戻ってきたパトカーが運良く阻んだ。いける。俺は一気に加速し奴を振りきった。渋滞の道路を縫うように宛もなく逃げた。俺達が犯罪者なのか？

翌日、国道沿いのモーテルに二人はいた。俺はタバコで焦げた絨毯の穴をただぼんやりと見つめていた。しゃれた照明もない、呆れるほど毒々しく赤いベッドのシーツ、手垢の付いた大きな鏡、隣の部屋から微かに聞こえる女の悲鳴とも間違えそうなあえぎ声。警察から逃げ、あちらこちらを彷徨いこの場所に辿り着いたのが昨夜の１１時。気がつくと千葉にまで来ていた。追われているという精神的な重圧と長時間バイクに乗っていたせいで百合も俺も疲れ果てていた。気を失ったのようにベッドに倒れ眠りについた。
目覚めると時計は午後の１時を回っていた。既に百合は起きていたが、俺に背を向けベッドの角に腰掛け押し黙っていた。２人は視点定めていいのかさえも分からなかった。百合が泣き出した。
「もう誰も助けてくれないんだね」
日本の警察が世界一優秀なんて誰が言ったんだ。テレビに取り上げられる不祥事もごく一部の出来事だと思っていた。しかし浅田刑事の怠惰な対応は警察全体へ不信感を持つのに十分すぎた。若いというだけでまともに話しを取り合おうとしない刑事の目。あの目を思い出すと怒りがこみ上げてくる。この国で生きて行くには自分の身は自分で守らなければならないのか？言いしれぬ虚無感とそれに反比例するように、自己防衛本能が燃えさかっていく。
「いったろ俺が守るって、信じろ」
どれ程の説得力が彼女にあったかはわからない。
乱れた髪を直しもせず泣きはらした目で、百合は俺に抱きついた。
「怖いよ、ユウも私も本当に殺されてしまう」
「絶対に奴らの好きにはさせない」
ややもすると彼女の言葉を受け入れてしまいそうな、気弱な自分自身に杭をさす。
「どうやって？」
そう問われる前に思考は始まっていた、生きの伸びるにはどうしたらいいのか。
「あと二日で黒岩への融資が完了し、来週の月曜日には株の売買が終わる。つまり奴らが神経をとがらせているのは今週中がピークということだろ」
「うん」
百合は頷いた。それを確かめると一つ考えが浮かんだ。俺は切り札を持っていた。寺田から預かった富田洋子のカルテと親子鑑定のＤＮＡ検査証だ。
これを餌に黒岩を呼び出そう。金と引き替えだと持ちかければ、話に乗ってくるだろう。

間違いなくその時黒岩は俺を殺そうとするはずだ。
「百合、きのう富田洋子とその子供のことは話したろ」
「ユウが関係した人ね」
チクリと胸を刺した。百合の答えに嫉妬があったとは思わないが、彼女のわだかまりを感じた。
「黒岩は月曜まではなんとしても、彼の仕掛けた罠を大久保に知られたくない。だから俺達を殺そうとする」
「大久保に話すの？」
「大久保がこの秘密を知ったなら黒岩の計画を潰すことは間違いない。しかしそれが黒岩の辞任にまで繋がるかはわからない」
「じゃあ何にもならないよ」
「それよりも計画を潰された黒岩と槌田が、寺田の事も知っている俺達をこのままにしておくはずがない」
「大久保が助けてくれない？ユウのおかげで彼は助かるのだから」
普通なら確かにその論理は当てはまるのだろう。
「大久保も同じだろう。つまりは会社の問題さえ片づけば、あとは関知しないんじゃないか？約束してとしてもどれ程信用できるものか」
八方ふさがりの俺の言葉に百合はあきらめのため息をもらす。
「結局、使い捨てなのね」
「そう腐るなよ、考えがある」
俺はさも名案が浮かんだかのように笑顔で答えた。彼女はいぶかしそうに問い返した。
「なんなの？」
しかしそれをいうわけにはいかなかった。
「まかしておきなよ、一発逆転、起死回生の満塁ホームランさ」
なぜなら彼女は俺の考えていることを知ったなら、ウンとは言わないだろうと思ったからだ。
「百合は何にも心配しなくていいよ」
「教えて、私も知りたい」
「敵を欺くにはまず見方からって言うだろ。きっと大丈夫だから」
その言葉には足りない部分があった、それは『百合が生き延びること』だった。
「ずるいよ」
口をとがらせ、俺の身体を揺さぶる彼女には疲れが感じられた。ブラウスの襟元や髪は汗で汚れている。仕方ない二日も着替えていないのだから。女にとってそれがどんなに不快なことかいくら鈍感な俺にだって解った。
「お願いがあるんだ」
「私にも出来ることがあるの？なにをすればいいの」
俺の袖を掴む彼女の心の中は今どんなに不安なことだろう。
「買物につき合ってほしいのさ」
もっと重要な事だろうと思っていたのだろう、からかわれたと思ったのか横を向いてしまった。

「大切な物を買いに行くのさ、君一人にはしておけないだろ。さあおいで、そう怒らない」
今俺のすべきことは、泣き言をいわず、彼女に弱みを見せなず堂々としている事。自分に言ってくれないとふてくされた彼女の両脇を抱え上げ抱き起こした。
「任せなよ、昨日いったろ、俺に殺されるなら本望だって、そのつもりならあれこれ言わない。どっちにしてもずっと一緒さ」
「約束よ」
「ああ」
ある意味２人とも腹をくくったのか、百合からも悲壮な表情がふっと消えた。
昨日まで別れるのどうのこうのと言っていた二人、今は怖くてその言葉を使えない。
「さあこんな汚い所を出よう、じゃないと」
ニャリとおどけて見せると、彼女に鼻の頭をつかまれた。
「バカ」
むろん今彼女を抱く気にはなれないが、そんな冗談を冗談として軽く受け流してくれた事に感謝した。
　緑色の目隠しのカーテンを潜ってモーテルを出ると、まずは銀行に向かった。時間は午後５時を少し過ぎていた。ＣＤコーナーにはＯＬが数人いたが、塞がっている端末はなかった。壁の上に設置されている監視カメラが気になった。告発されたのは百合であって、実際のところ俺自身はこれといった罪を犯しているわけではない。しかしやはりカメラの向こうで行員が俺に気づき通報するんじゃないかと気が気じゃあない。外を見るとバイクにまたがった彼女がガラスの向こうからこちらを伺っていた。平然とした顔でカードを差し込んだ。普通口座に１００万近くいっていた。百合に定期にしたらと進められていたが、この低金利でさしたるメリットも感じられずに、会社から振り込まれるままにほうってあった金だ。マンションに戻れない今、カードがあるからこそ簡単に引き出せるのだから通帳と印鑑が必要な定期にしておかなくてよかったと思った。利息の小銭部分２３０円を残し、百万千円を受け口から取り出し銀行の封筒に入れた。それをジャンパーの内ポケットに入れるとＣＤコーナーを早々にでた。金はあるぞと胸を叩くと彼女は頷いた。しかしその金を何に使うのか彼女は聞かなかった。
　バイクが着いたのはダイエーだった。閉店までにはまだ１時間ほど余裕があった。一階にある宝石店のガラスケースを覗いている主婦の手には地下の食料品売場で買った総菜の詰まったビニールが握られていた。へそくりをあてようと思っているのか、次の宝石のセールはいつからかと店員に訪ねていたようだ。
「百合」
辺りをただそれとなく見回していた彼女は不意に呼ばれて、キョトンとした。
「なに？」
「下着と着替え何着か買っておいで」
先ほどおろしてきた封筒の中から５万を彼女に手渡した。
「その為に？」
「ほんとはもっといい物買ってあげたいんだけれど、今このお金が全てなんだ」
「ありがと、気をつかってくれて」
「男なんてどうでもいいけれど、女はそうもいかないだろ。とにかくそれで買えるだけ買

ってきなよ、少ないか？」
「ううん、十分、いっしょにいこ」
そういって俺と腕を組もうとする。
「いやいいよ、女の下着売り場なんて恥ずかしくていけないから、一人で行ってきてよ」と照れて見せた。確かに下着売り場についていきたくないという照れも合ったが、彼女のいない間にしなくてはいけないことがあった。
「６時にバイクの所で落ち合おう、俺も買い物あるからさ」
「じゃあユウの服も買ってくるね、嫌だよ待っててくれないと、絶対だよ」
「俺のはいいよ、このジーパンとＴシャツで十分、下着なんか寝るとき洗って干せばいいだけ」
俺には必要なくなるかもしれないと口からこぼれそうだった。
「汚い男は嫌いよ、買ってくるよ、一緒に逃げるんでしょ」
百合は俺が金と下着を用意する事で、逃亡するのだと勘違いしたようだった。
「さあ、早くしないと閉ちゃうよ」
百合の勘違いをそのままにしておこうと思った。それで気が休まるならと。。。
　彼女の尻をたたき店の奥に向かわせると俺は行動を開始した。公衆電話の横に置かれた長椅子に腰を掛け懐から携帯を取り出した。日祭日なら買い物をする奥さんのお供に疲れ、タバコをふかして待っている男性のたまり場のようなこの場所も、今は誰もいない。店内に流れるＢＧＭと入り口から聞こえる車の雑音が解け合って．２．３メートル離れた場所にいる店員達のおしゃべりも聞こえない。
ボタンを押す指が震える。携帯の番号が液晶で点滅しながら呼び出し音が２度なり男の声がした。
「はい、槌田です」
俺が電話した相手は槌田だ。一昨日百合から一応彼の携帯の番号は聞いておいた。
「武田です」
ゆっくりと落ち着き払った自分を演じる。
「そろそろ電話が来る頃だと思っていたよ、観念したのかな」
「いいえとんでもない」
いくら装っていても鼓動は高鳴り、ともすると声がうわずりそうになる。
「ほほう、勇ましいものだ」
「実際のところ俺はあなた達の犯罪に興味はないんですよ」
「ならなんで警察にいったのかね」
耳にあてたスピーカから、二つに裂けた蛇の舌が伸びてくるような気がした。
「それはあなた達が俺達を殺すというから仕方なくしたまでの事」
「そんな物騒なことは言わないさ」
電話の向こうで余裕綽々に話す槌田。
「まあ、逃げ道はないということだけは確かだな。この国で戸籍を隠して生活するという事はまともな仕事には就けないということさ、そんなの耐えられないだろ？」
「あなた達に見つけられるんですか？」
「隠れて生きる奴の落ち着く先はきまってる。女は水商売で男は日雇い、そんな場所なら

かえって見つけだすには好都合なのさ」
槌田は弁護士という表の顔よりも裏の世界に通じた顔の方が本当の彼なのだと感じる。
「取り引きしませんか？」
「警察も見捨てた君たちにまだ何か手があるというのかな」
「俺は富田洋子の産婦人科の本当のカルテと、寺田が子供の本当の親であるというＤＮＡ鑑定証を持っていますよ。これと黒岩のメールを大久保に見せたらあなた達の計画は終わってしまうでしょ」
槌田が絶句するのがはっきりとわかった。
「何故それをお前が持っている、はったりならやめとけ」
俺はカルテの内容を話し始めた。彼は静かに聞いていたが、もういいと俺に読むのをやめさせた。
「わかった、なにが望みだ」
「金と身の安全です。それさえ保証してもらえば大久保にも言わないし、あなた方の前からも去ります。もちろん彼女も一緒に」
引っ掛かってくれと願った。手の中の携帯を握りつぶしてしまいそうだ。
「いくらほしい？」
「１０００万、会社を乗っ取るあなた達に取ってはなんの問題もない金額でしょ」
「取引の場所は？」
彼の声にはさっきまでの余裕がなくなっている。
「明日の夜、寺田の殺されたあの倉庫で、夜の９時、ああ、それと黒岩さんにも来てもらいますよ。あなた達２人が現れないと取引は成立しないと思ってください」
「いい気になるなよ」
ドスの利いた声で槌田が威嚇する。内心叫びだしそうなほど怖かった。
「嫌ならこのまま大久保の所に行くまでです。株の取引は来週でしたね、もしもこれを彼が知ったらどうなるか、俺以上によくおわかりだと思いますが」
恐喝とは相手をどう喝でねじ伏せるものだと思っていたが、そうではなく相手を誘導し、そうせざるを得ない状況に追い込むことだと感じた。
「よしわかった、明日９時あの倉庫で待っている」
「交渉成立ですね。悪いようにはしませんよ、じゃあ」
槌田の言葉を待たずして俺は電話を切った。これで第一段階は終わった。槌田が黒岩にどう報告し明日やってくるのか、彼らのやり方からすれば答えは明らかだ。間違いなく俺は殺される。いや、そうあってほしいと願いながら、もう一カ所に電話をかけた。相手先はあの新宿の警察、もちろん１１０番ではなく、横の公衆電話の台の下に置かれていたイエローページに載っていた電話番号だ。
　受付に出た署の電話交換手にあの若い刑事を呼び出してくれるよう頼んだ。交換手は聞き返した。
「若い刑事は何人もおりますが、名前おわかりになりますか？」
「すいませんちょっと、わかりません」
「困りましたね、じゃあ何課かだけでもわかりません？」
「玄関入って右の一番奥のカウンターがある」

「防犯課ですね、待ってください」
交換手はそういうと待ち受けの音楽に変わった。警察には似合わないＬｅｔ　ｉｔ　ｂｅのオルゴール調の音楽だった。なすがままか。３０秒ほどしてまた交換手の声が聞こえた。若い刑事は出払っていて、防犯課に残っている浅田ではだめかと聞き返された。あの刑事かと気は進まなかったが、迷っている時間はない。しぶしぶ繋いでもらうことにした。
「はい防犯課浅田、なにか？」
喘息気味の声でスピーカーから響くその声は、生で聞くよりも聞き取りにくい。
「昨日そちらに伺った武田といいます」
それを聞いて、一気に彼の口調が変わった。
「おまえか、昨日は手荒い事してくれたな。おかげで腰が痛くてたまらんぞ」
怒鳴り散らされると思っていた俺にとって、彼の言葉は拍子抜けするものだった。
「すいませんでした」
「今どこにいるだ？君の彼女はどちらにしろ問題がある。出頭して事情聞かせてもらわないと困るんだよ」
「あなた達はまだ信じてくれてはいないんでしょ。表に出たら俺達は奴らに殺されてしまいます」
「信じるも信じないも、君の証言だけで、社会的地位のある大企業の重役をそう簡単に調べることが出来るわけないだろ」
昨日とは口調が違った。浅田の語尾に迷いらしきものを感じた。昨日のように取り付く島もないという雰囲気ではない。何があったのだろう？片方に振り切っていた天秤がこちらに少しだけバランスを戻していた気がする。俺は彼に誘いをかけてみた。
「彼女を捕まえたいというなら、それもいいでしょう。しかし一つ条件があります、浅田さんにとっても損な話ではないと思いますよ」
「ほほう、大きく出たなね、逃げ回っている君たちに何か切り札でもあるかな？」
「じゃなければこっちから電話しません。もしそれを受け入れていただけるなら、喜んで彼女と一緒に警察に行きますよ」
「なにかねそれは？まあ聞くだけは聞こうじゃないか」
「昨日僕がお話したことが本当なら大きなニュースになりますよね」
「それはそうだろうな、会社が脱税したのとは種類が違う。社内の派閥争いで重役が殺人まで犯したとなると古電の信用はなくなるだろうな、まあ事実ならの話だが」
「もしこの事件を浅田さん一人で解決したら、どうなりますか？」
「なにがいいたい」
「きっと手柄になると思いますよ、そうなれば昇進するのも夢じゃありませんよね」
浅田は無言になった。見透かしたような俺の言い方に反発しながらも、それを否定出来ずにいる。
「だがたとえそれが事実であっても、何度も言うようだが今のままでは私が手を貸すわけにはいかないな。早く切り札というやつを聞かせてくれないか」
浅田は少しずつ食いついてきている。やはり役人は手柄を独り占めにするという言葉には弱いのか？目の前に血のしたたるような分厚い肉が、黒い鉄板の上で音を立てながら焼けている、そんな美味そうな臭いを彼の頭の中でイメージさせるように俺は言葉を選んだ。

「もし貴方の見ている前で彼らが人を殺そうとしたなら捕まえられますよね、現行犯として」
「どういうことだ？」
「実は明日黒岩達と取り引きします。彼らは俺を殺すはずです」
「その時ということかな？」
「隠れて見ていてください。いざというときに彼らを捕まえて欲しいのです」
「自分の身を危険にさらそうというのか？」
「もうこれしか方法は考えられませんから。とにかくこれなら貴方も文句ないでしょ」
「君は本当にそれでいいのか？」
浅田にそう問い直されると何ともいえない。こうやって話していても迷いだらけなのだから。しかし一つだけ癒える事があった
「少なくとも彼女は助けられます」
「そんなにあの女に惚れているんか？」
「俺の命なんておまけのような物です」
心なしか自分の声に笑いが混じっている。格好を付けているわけではない、真剣に考えれば考えるほど笑わずにはいられないのだ。自虐的な俺の態度に遊びではない覚悟を感じとったのだろう。
「よし解った、しかしなにも起きなかったその時は、約束を果たしてもらうよ」
「わかっています。逃げやしません、けれどそんな小さな事に手間取るより、大物捕まえて出世してくださいよ」
そんな気持ちなど更々ないけれど、浅田に対して俺が言った唯一のお世辞だった。しかし彼の関心はもう他の処に移っていた。
「ところでこの事は他の警察や刑事には話していないだろうね、もしそうなら手を引くよ」
こちらから誘い込んだとはいえ、浅田が何故こうもしっかりと食いついて来たのか不思議でならない。彼のその言葉から、折角の獲物を誰にも渡したくないという嫌らしさがにじみ出ていた。普段手柄という栄誉に無縁な生活をしている俺には、そんな物に涎をたらす彼の心理が滑稽に思えた。
「あんな騒ぎ、あちらこちらで起こすほど勇気はありません。今こうやって話しているあなただけです、それが俺にとって良かったのか悪かったのか」
「それはこっちも同じだ」
皮肉を言ったつもりはないのだが、浅田の返事は生意気だとでも言いたげだった。その後、明日の時間と場所を細かく打ち合わせ、電話を切った。ようやくこれで役者はそろった。自分の墓穴を自分で掘り、坊さんまで予約したような気分だ。後は葬式に来てくれる参列者を待つだけ。だがこれだけでは不十分だ。大久保など宛に出来ないと百合には言っては見たものの、この計画が１００％上手く行くとは限らない。その時の手も打っておかなくては。俺は店を出た。最初に携帯Ｓｈｏｐからプリペイド式の携帯を購入し、次に大手ＯＡ文具店に向かった。店内には最新の業務用カラーコピー機が置かれてあった。俺はリュックからカルテを取り出し店員に見せた。そして同程度の厚さの紙をセットしてもらい、内容がないようなので自分で複写をした。トレーに吐き出されていくカラーコピーは複写とは思えないほど手触り、もちろん見た目も精巧だった。文明の進化は偉大なものだと年

寄り臭い余韻に浸る。客の為に解放してあるテーブルに陣取ると、俺は二通の手紙を書き始めた。

ーー
大久保人事部長へ

貴方に、黒岩を調べるように命じられた武田です。
今私は黒岩に命を狙われています。
なぜなら、知りたがっていた彼の秘密を突き止めたからです。
あなたは私に危険が及ぶことまで考えていましたか？
本来ならあなたから守ってもらう事が筋とは思います。
しかし、初めて会ったあの日、貴方を信用できる相手とは
とても思えませんでした。確かにあなたの求める秘密を
提供したならば、私は約束通り社員としての生活を保証
されるのかもしれません。
しかし私は黒岩の恨みを買い、いつ殺されるかもわからな
い状態です。泣き言をいても仕方ありません自分の身は
自分で守ります。
明日、木曜日、私は黒岩と会って取引をします。もしかし
たら殺されるかもしれません。そうなった時の為に貴方にも
取引を提示しておきます。
実は、今回の事で私と同様に私のつき合っている彼女も黒岩に
命を狙われています。詳細を書いている時間はありません。
この手紙があなたの手に届くのは金曜の午後でしょう。
その時までに黒岩に何の変化もない場合、私は殺され、
そのままにしておけば会社はまもなく黒岩の手に渡ります。
止めさせるには、今私が持っているこの書類が必要です。
貴方が信じようと信じまいとは勝手ですが、張ったりではありません。
もしこれを欲しいのなら、以下の番号に電話をください。
先ほど書いた彼女が電話に出ます。書類は彼女が持っています。
どうかそれと引き替えに、彼女を黒岩達から守って海外に
逃がしてください。
貴方が考えているよりも黒岩の計画は緻密で根は深いのです。
貴方を信用できないと言っておきながら最後は貴方にしか
頼れない自分を歯がゆく思いますが、彼女だけは助けてやって
欲しいのです。お願いです。即決してください。
迷っている時間はないと思います。

百合　０９０－７５５５－＊＊＊

－－
百合へ

おはよう、百合が目覚める頃には俺はもう、君の側にはいない。
今、俺は君が買い物をしている合間にこれを書いています。
君は２人でどこかへ逃げるのだと思っているようだね。
本当のことを言うと引き留めるから、この手紙に書いていきます。
だからしっかり読んで。俺は今日これから黒岩達に会いに行く。
実は寺田からある書類を預かっていたのです。大封筒の中に入って
いるカルテと鑑定証がそれです。
これとあのとき君も見た黒岩のメールを大久保に渡すと脅し、
金と安全を交換条件にして取引を持ちかけた。
君の手元に本物を置いていきます。俺はコピーを持っていく。
それを受け取ったら彼らは約束など守らず、俺を殺そうとするだろう。
でも心配しないで。昨日のあの浅田という刑事が見張ってくれています。

俺も百合の所に生きて帰りたいと思います。
君にもう一度会えるれば黒岩も捕まっているということ。
俺が死んだなら、なおさら奴らは犯罪は決定的になっている。
どちらにしても土曜までにはなにもかも終わっているよ。

もし俺が土曜の夜まで戻らないときは、大久保から同封した
携帯に電話が来るかもしれない。その時は、そのカルテと
引き替えに海外に遠くに逃がしてもらいな。
いいかい、しかし大久保に騙されてはいけないよ、最後の
最後まで書類は渡さないこと。君の命だと思って大切に。

百合、俺は君に出会えて自分の弱さを知ったよ。今思えば
出会った頃、君みたいな大人の女性とつきあったらいいの
正直は戸惑っていたけれど、反面、そうやって君の事を想
える自分が嬉しかった。君がしてくれた事や教えてくれた事
そして、百合の事をいつも想っていられた日々に感謝の気持
ちでいっぱいだ。本当に百合に出会えてよかった。なのに
俺が君にしてあげられた事があまりにも少なくて、ごめんね
もし生きて君の元に戻れたら今度は精一杯、俺のできる事
するよだから泣かないで待っていて。
好きだと書くのは照れくさい。愛していると言のも似合わ
ない。でもこれはいえる。俺に必要なの百合君なんだ。
だから戻るよ、戻るから、絶対に君の所へに戻るから

百合宛の手紙はいくら文字を連ねても終わりが来そうもなかった。もしかしたらという不安が文章をとりとめない物にしてしまう。遺言なのかラブレターなのか、これを読む彼女は戸惑うだろうと申し訳ない気がした。死ぬことより彼女に二度と会えなくなることが怖い。俺の祖父は祖母の為、俺の父を含めた５人の子の為、異国の地で戦火に命を落とした。祖母に祖父は泣き言一つ言わず、後は頼んだぞと、出兵していったと聞かされた。一枚だけ残された祖父の写真を見上げる祖母の表情は凛としていた。男らしく生涯を終えた夫を誇りに思ったからこそ再婚もせず子供達を育て上げられたのだと言いたげだった。それに引き替え覚悟を決めたと言葉ではいっても、膝を振るわせているような自分の姿が情けなくなり文字を書く手が止まった。言葉足らずのまま終わった便箋の余白には書き残した文字が浮き出してくるようだった。

彼女宛の手紙には封をせず表に「百合へ」と書きリュックの中へ。そして大久保への手紙は会社の人事部へ宛て裏書きをせず封をした。コンビニで買った切手を貼り店の前のポストに投函しようとした。しかしそれを押し込める手がふるえてしかたない。自分で書いたようにこの手紙が読まれる頃には俺はもう生きていないかもしれない。テレビによくある死者からの便り。これを開く大久保の指先が想像できた。手に張り付いたかのような真っ白な封筒、引きはがすように押し込んだ。それはパタンと音をたて落ちた。

日が傾き始め、夕焼けが郵便ポストを尚一層赤く染めている。家路を急ぐ人波がそのうねりを大きくし始めていた。気づくと時計は６時３０分過ぎていて、急いで先ほどの場所に急いだ。

彼女は背中を丸めうつむいたままモルタルの壁に寄りかかていた。両手に大きな紙袋をさげ肩を落とす姿は迷子の子供が親に探しに来てくれるのをただひたすら待っているようだった。

「百合」

後ろからぽんと肩をたたく。彼女は手に持っていた袋を落として抱きついてきた。その目には既にいっぱい涙が溢れていた。

「遅いよバカ、おいて行かれたと思ったよ。なんでよもう、ちゃんと側にいてよ、ユウいないと怖いよ、独りぼっち怖いよ」

人目もはばからず泣きじゃくる彼女。

「ごめんな遅れて」

「どこにも行かないでよ」

あまりに激しく泣いたせいかしゃっくりで言葉にならない。

「さよならしなくていいのか？」

「うん、別れない。絶対この腕はなさない。ユウと一緒にいる。ずうっと側にいる」

「俺の事も許してくれる？」

百合は首を振り俺の胸をたたいた。

「ダメ許さない・・・でもユウじゃないと嫌なの、待ってる間にはっきりわかった、なにがあってもいいよ。ユウとこうしていたいの、じゃないと不安で死にそう」

彼女の頭を抱えていつものように顎を乗せた。車のクラクション、ゲームセンターからもれる若者のはしゃぎ声、そして雑踏が響かせる何千という靴音。大音量のノイズに取り囲まれながら、かえってそれが２人だけの空間をつくっていた。彼女の願い通り側に入れたらどんなにいいだろう。
「俺の手握ってな」
彼女の両頬に手を添え口づけをした。今までで一番優しくて長いキス、重ねた唇から温もりが体中に広がった。彼女の睫毛をこぼれ落ちる涙が夕映えに光り、小さな手が俺の右手を握りしめた。

　そのあと２人でよく行った店で食事をした。目の前の大きなボールにたっぷりと入ったスパゲッティ、もう入らないというまで２人とも胃の中に押し込めた。「食べたね」と俺の口に付いたミートソースを彼女はハンカチで拭こうとする。恥ずかしがって嫌がる俺を見て、さっきまで泣きはらしていた顔に笑みが戻った。そんなに多くの言葉を交わすわけではないけれど、気持ちのカサッペタが少しはげたのだろう弱々しいピンク色の皮膚が現れた気がした。
　その夜はビジネスホテルのベッドで抱き合った。何の蟠りもなく男と女としてつながった。ほの暗い間接照明、俺は彼女の髪から足のつま先まで丹念にキスを繰り返した。
喘ぐ彼女を見ながら俺は入っていった。そして近づいてくる限界。必ずこの女の元に帰ってくる。そう誓い俺は果てた。
「ありがとう」
そう言って俺はもう一度瞼にキスをした。
「うん、でもこんなホテルじゃなくて、早く２人の部屋に戻りたい。ジジが寂しがってる」
百合は寂しそうな目をした。
「俺よりあんなぬいぐるみの方がいいのかい？」
「あれはユウだもの、あのぬいぐるみあればユウはいつも私の側にいるもの」
「今すぐはむりだけど取ってくるよ。ちゃんと」
それを聞いて安心したのだろう、百合は眠りに落ちていった。俺は彼女の前髪を漉きながら一晩中見つめていた。
　次第に夜が白み始め、なにも知らずに深い眠りについている彼女をそのままに、ベッドを抜け出した。昨日書いた手紙・書類・携帯電話そしてありったけの金を全てを枕元に置き、もう一度額にキスをして部屋を出た。俺の帰ってくるまで眠っていて欲しい、そう思う。あれほど側にいてという約束を破るのだから。
「ごめんな」
あと数時間後に俺のいないことに彼女はまた泣き出すだろう。後ろ髪を引かれながら、俺は部屋をあとにする。まだ都会の朝は野良猫しか起きていなかった。

　夜８時３０分、寺田が殺された港。月明かりに眠る倉庫達の群。そのなかの一つ、鉄の扉の前。バイクに寄りかかり、黒岩達がやってくるであろう倉庫と岸壁の間を通るコンクリート道路を眺めていた。港特有の腐った海水と錆びた鉄の臭いが混じり合っていた。たしかあの夜もこんな臭いがしていた気がする。

子供の時から嗅覚に過敏でほんの少し嫌な臭いを嗅いだだけでも吐きそうになり、涙目になっていた。今は緊張感がその感覚をさらに鋭敏にし、マグマのような胃液が食道をゆっくり上ってきていた。不快な光景が脳裏をよぎる。なぜこんな縁起の悪い場所を、それも自分から指定したのだろう。サスペンスドラマで犯人を犯行現場に呼び出す、という設定になれすぎていたせいだろうか。背中に寺田の亡霊が抱きついている気がする。
「寺田さん、あなたを殺した奴らがもうすぐここに現れますよ。とりつくなら彼ら達でし0ょ。相手を間違えないでくださいよ」
お経のように口の中でつぶやいた。それにしても頼みの綱は浅田刑事だけ。実はここに来る前、やはり心配になり署に電話をした。しかし彼は非番で出勤しておらず、結局連絡が取れぬまま、かえって心細さが増しただけだった。例えていうなら家を出て目的地に着いたとき、急にストーブは消したかなと思う不安に似ている。そんな時、人は火事になるなら火事になれと居直るか、自分はそんな不注意はしないしっかり者と楽観主義者になるかのどちらかだろう。なぜなら不安に気づいた時点もう遅いとあきらめるしかないのだ。

楽観主義者になろう、浅田を信じようと自分にいい聞かせる。時間も場所も間違いなく伝えた。彼も最後には積極的になっていた。ここに来ないはずはない。きっとどこかに身を潜めこちらを監視しているのだろう。物陰に目を凝らすがそれらしき人影は見あたらない。刑事である彼が自分の気配を感じさせるようなそんなお粗末な隠れ方をするとは思えない。ただやるせないというか、手持ちぶさたというか、気持ちの置き所の定まらなかった。

ふと百合の事が心に浮かんだ。いま頃どうしているだろう。たぶん俺の携帯に彼女からの伝言が入っているはず、もし聞いてしまったら平静でいられないような気がして電源を切っておいた。しかしそれを聞かなくても彼女が何を言ったは想像できた。あんなに側にいると約束したのだから。。。。

泣いているだろうか恨んでいるだろうか、残酷な時間が彼女を包んでいることは確かだろう。早く帰らなくては。いつしか俺のなかで百合は帰るべき場所になっていた。故郷でもなく家という物理的なものでもない。ただただ。女とは不思議な存在と改めて思う。

時計は８時５０分をになっていた。胸の右のポケットに入れたおいたＭＤレコーダーの録音ボタンを押す。ここに記録されている会話があとで警察の証拠になるだろう。左胸のポケットに護身用に買ったナイフを忍ばせておいた。実際どうやって使えばいいのかもわからない代物だ。様々な思いが交錯した。顔を上に向け胸の奥にたまったもやもやを呼吸とともに吐きだした。

見上げた空は気圧の谷間が近づいているらしく、雲が駆け足で通り過ぎていく。それに遮られるように星も月も比較的短い周期で見え隠れを繰り返す。こんなにしみじみ夜空を見た事など子供の時分もなかった。星座など何一つ知らない俺にとって、どれとどれが対をなす星なのか区別できるはずもなく、ただ何となく連なっている群のなかの一番輝く星を見つけた。

そしてそれを目印に雲に見え隠れする星の輝きを数えた。１回・２回・３回・・・・・・・・・・２２回目、星が雲からその姿を現し、１羽のカモメが月を背にして闇夜を駆け抜けたとき、銃声がなり響いた。反射的に首をすぼめ、バイクの車体に身を隠す。タイヤのホイールの隙間から音のした方に視線を向ける。俺に向けて放たれたのか？更に続けて２

発。５０メートルほど離れた数基のコンテナの間からそれは聞こえてくる。
「あぁぁ。。。。」
男性の悲鳴が空気を切り裂いた。曇った声、浅田刑事だと直感した。追いかけられる一人の靴音は軽快そのものだった。
「待て」
追いかける側の浅田の声に痛みを感じた。靴音がコンテナの間を縫うようにカツカツと地面を蹴り、向かいの倉庫の壁に跳ね返る。ともすると何人もの人間がそこに存在するような錯覚に陥る。
「死にたいのか、待て」
双方から激しく撃ちだされる銃弾がコンテナに跳ね返り、金属音をたてつづける。
　暫くすると人陰らしきものが飛び出してきた。すかさずバイクのライトを点灯し、その方向に向けた。夜の暗さに目が慣れていたせいで光に瞳孔の収縮が追いつかない。誰なんだ？焦点をはっきりさせようと目を細め、手を額にあてひさしにする。次第に見えてくるその顔は槌田だった。後ろからおぼつかない足取りでやってくるもう一人の人物、浅田刑事だ。
「うぅぅぅ」
すでに彼の声に力はなく脇腹を押さえ、もう片方のピストルを持った腕を前に左右に振り、身体のバランスをかろうじて保っている状態だった。槌田は振り返り、もう一発浅田へ向けて引き金を引いた。玉は当たりはしなかったが浅田の足元をかすめた。ヤジロベイのように不安定だった彼の身体はバランスを保てず、力無くコンクリートの水たまりによろめき、音をたて倒れ込んだ。それに気づいた槌田は浅田に銃口を向け、ゆっくりと後戻りし近寄っていく。そして長渕剛のように自分の身体を弓なりにし思いっきり腹を蹴り上げた。浅田の口からかすかなうめき声が漏れた。しかしもう彼は動くことはなかった。
　槌田の表情は見えないが背中が笑っている。彼は浅田の心臓めがけてまっすぐに右手を下ろし、ピストルの照準を固定した。乾いた音が１発、そしてまた１発、最初の１発で浅田が絶命したはずだった。もう１発に槌田の残忍な執念を感じた。
　動けずにいる俺を槌田は振り返った。次はお前の番だといわんばかりにピストルをちらつかせながら大股でゆっくり近づいてくる。浅田がやられてしまった。唯一の味方が。
「坊や、甘いんだよ、おまえの考える事なんて」
こちらに銃口を向けたまま、左手でポケットから携帯を取り出し、誰かに短い電話をした。俺は唯一の武器であるナイフを取り出し、槌田に向かって突き出した。ライトの明かりが刃先に反射する。
「ナイフかい、どうした手が震えてるぞ、さあ向かってこいよ、さあ刺してみな」
彼の言うとおり、ナイフが何の護身用具にもならないことは俺にもわかった。かえって自分の弱さを引き立たせる情けない男性器にさえ見える。槌田の口元の笑い皺が憎らしい。このままどうしようというのか？前にも後ろにも動けぬ状態のまま時間が過ぎていく。
　その時、海から強い風が吹きつけ、うねる波間から一艘のクルーザーが近づいてきた。ゆっくりと岸壁によこづけされる船、見覚えがあった。
「やあ、武田君、久しぶりだね、約束通りやってきたよ」
下りてきたのは黒岩だった。槌田は彼に歩み寄り頭を下げる。

「驚いたかな、槌田から連絡を受けたとき、君が何か罠を仕掛けているのは察しがついたよ」
黒岩が煙草をとりだすと、すかさず槌田の左手がライターを取り出し火をつける。
銀色の細かな凹凸のあるライターをポケットに仕舞いながら槌田が話す。
「武田、私はね、おまえが来るずっとまえからこの倉庫の隅で待っていたんだよ」
「するとどうだい、約束の１時間前に車が倉庫の裏に止まったじゃないか、君かと思ったよ。しかし現れたのは新宿西署にいた刑事だった」
話し続ける槌田の傍らで余裕綽々にふかされる黒岩の煙草。その小さな火が俺の命に見えた。呼吸する火、弱々しくともる赤い火。
「これが君の仕組んだ罠とすぐ気づいたよ、他にも刑事がいるんじゃないかとあちらこちら調べるのに時間がかかったが、浅田一人しかいないとわかった時、いい案が思いついたのさ」
「いい案？」
「ああそうだ」
黒岩は煙草の灰を風にとばし、横たわる浅田刑事の死体をながめながら口を開いた。
「君はここから無事に帰れないと思ったから、この刑事を呼んだのだろ。この刑事も欲をかいて一人で来たばっかりにこんなことになったのさ。彼も君に手を貸さなければ死なずにすんだのにねえ、責任感じるだろ」
浅田は俺の罪を一人で背負い、命を落としたのだと黒岩は裁判官のように断罪する。
「どうしろと？」
「罪人は死をもって謝罪すべきじゃないかな」
「俺が罪人？」
「他に誰がいる？じゃなければこの刑事は不公平だと君を呪い殺すかもしれないよ」
黒岩の言葉に槌田は苦笑した。
「そうなると困るだろ」
黒岩の指は煙草を海にはね飛ばした。煙草は赤い放物線を描いて波間に消えた。槌田は横たわる死体に近寄り、手に握られていたピストルを取りあげた。それを見て黒岩がいった。
「君はこの刑事と争って死ぬんだ」
黒岩が何を言おうとしているのか直ぐにわかった。それは槌田が自分のピストルではなく、浅田のそれを俺に向けたからだ。黒岩達は浅田と俺が争い、その結果互いに撃ち合って死んだと偽装しようとしている。
　今回ばかりは刑事を海に捨ててくるわけには行かないからだろう、だからわざと浅田のピストルで。
「待ってくれ」
「何を待ったらいいのかな、君を助けるはずの刑事はもういないはずだろ？」
黒岩は自ら発する一言一言に興奮していく。俺はバッグを彼の目の前に掲げた。
「この中に洋子のカルテが入っている」
「それはわざわざありがとう、君が死んだ後にありがたく頂くよ。まさかそれと引き替えに助けてくれと言うんじゃないだろうね、そんな馬鹿なことはいわないでおくれよ」
殺すのも殺されるのも正当な権利と義務と言わんばかりだ。

「本物は百合が持っている、俺が戻らなければ彼女が大久保社長にそれを届ける。それでもいいのか？」
精一杯威圧しているはずなのに、語尾の声が裏返ってしまった。
「おやおや、声変わりの途中なのかな坊や、君には悪いが大久保社長は二日前から海外に出張している、息子もそれに同行してるんだよ。百合が大久保にこのことを告げられるのは早くて来週水曜日だ。君ならそれがどういうことかわかるね」
今日明日にも大久保に知らせなければ、黒岩は株を手にしてしまう。それから大久保が富田洋子の事実を知ってもなんの意味もないのだ。つまりは黒岩が俺をここで殺してもなんの支障もないということ。でもそれなら殺す必要もないだろう、俺の気持ちを読むように槌田はいった。
「なら、なぜ君を殺すんだって思っているんだろ、簡単なことさ。全てを知った者を生かしておくのは危険なんだよ」
もうだめだ。全ての保険が粟のように消えた。
「百合は？」
「君も馬鹿な男だな、裏切られた女の為に命投げ出すなんて、おろか以外の何者でもない」
二人の笑い声がこの前のマンションでの、百合を弄ぶときの歓喜の声にオーバーラップする。この中年の男達の肉体で。死がそこにあるというのに、怒りと同時にそんな奴らにやられてしまう自分の弱さが情けなくなった。
「彼女ならそのうち捕まえるさ。この日本で女が逃げるところなんて、水商売みたいなもんしか無いんだよ。逃げようなんて事自体おろかなのさ、殺すのを君が止めて欲しいと願うなら百合だけは助けてやってもいい」
「本当か？」
「シャブづけにして廃人同様になるまでもてあそんでから、１７・８の子供にくれてやるよ。最近のガキは女を簡単におもちゃにするからな、いつまで生きていられる事やら」
槌田はやくざそのものだった。俺はなんと身の程知らずのことをしたのか、ホテルで俺の帰りを待つ百合の姿が目に浮かぶ。じっとシーツにくるまり白い壁を眺めていることだろう。あんなに守るといったのに。側にいてと求められたのに。いとも容易くへし折られてしまった。
「武田君、もういいかな、こういうことは素早く済ませるのが肝心だから」
そう黒岩がいい終わらないうちに、槌田の持つ浅田のピストルが引かれた。乾いた音と共に熱い物が右胸の中ではじけた。吹き出る血を止めようと手のひらが傷口を探す。指の間から流れ出す鮮血はライトの光をうけ真紅に輝き、こんなに綺麗な液体が体の中を流れていたのかと驚く。
「おお、はずれたね、ピストル重心がくるっているらしい。この刑事、そんな事もわからないほど下手だったんだな」
槌田は横たわる浅田の身体を足でこづきながら呆れた顔をした。
「どちらにしろこの刑事じゃおまえを守ることなど出来なかったよ。さあ、あと２発残ってる。一発で楽にしてあげるから安心しな」
槌田の最後通告に恐怖を感ずる余裕など既になかった。打ちぬかれた右胸の筋肉が硬直し麻痺していくような、反対に傷口が広がっていくような、どうにも手の付けられない痛み

に支配されていく。とうとう我慢できずに胸を押さえたままコンクリートにひざまずいた。（百合、ごめんよ）槌田はしっかりと両手でピストルを握りしめ、銃口を左胸に向けた。
「ゆっくり寝なよ」
次の瞬間銃声が立て続けに三発鳴り響いた。。。。。。。終わった。。。そう思考する自分が生きていると気づいたのは、槌田が悲鳴をあげて俺の目の前に転がってからだ。何が起きたのかわからなかった。それは黒岩も同じだった。虚ろな目に遠くから腰を落とし、ピストルを構え近寄ってくる男が見えた。槌田の部下か？違う。あの時俺が警察で食い下がった若い刑事だった。
「みんな動くな、動くと撃つぞ」
若い刑事は銃口をそれぞれに向け、逃げようとする黒岩の行動を封じた。槌田は両足と腕を撃たれ悲鳴をあげ、のたうち回っている。
「たすかった」
俺は全身の力が抜け、そのまま前のめりに地面に突っ伏した。塩臭いごつごつしたコンクリート、流れ広がっていく血が頬を赤く染める。若い刑事は槌田から拳銃を取りあげ、黒岩に手錠をはめ俺のバイクにその片方を固定した。
「だいじょうぶか、おい」
刑事の問いかけに何とかうなずく。しかし徐々に意識が薄れていく。大量の血が急激に流れ出しているからなのだろう。
「なんでここに?」
刑事に返すその言葉がうまく出ない。肺がおかしい、穴が空いたのかもしれない。
「しゃべるな、今救急車を呼ぶから」
携帯を取り出し、彼は警察に連絡し、署員の応援と救急車の手配をした。
「浅田さんが」浅田の倒れている方向を目で知らせた。意志を持たないその遺体が大きな流木に見えた。若い刑事の目にも間違いなく死んでいると悟ったのだろう。それに駆け寄ろうともしない。
「お前は死ぬな。気をしっかり持て」
ハンカチを取り出すと胸の傷口に強く押しあてた。「なんで」俺の口を手でふさいで話すなと首を振った。
「君がいっただろ、警察しか頼るものがないって。それに”おまわり”って言われたのが妙に腹が立ってな」その声は俺の捨てぜりふに怒っているという感じとは違い、それが彼をここまで来させたとでも言いたげに聞こえた。
「君が逃げた日、君の会社に電話して君のことを聞いてみたよ。ちょうど君の上司に当たる小林という人が対応してくれてね、仕事も真面目だし若いが嘘つくような人間じゃないと。そんな君が無断欠勤しているから心配していたよ。でそんな話を聞いたら、私も無下に君の話しを否定できないと思ってね。知り合いの金融関係者に聞いてみた」
バイトの穴を俺に押しつけて逃げていったあの小林だ。普段は優柔不断で気にくわない奴だがこのときばかりはあいつをほめてやりたかった。
「それで？どうだったんですか」
「確かに君の言うとおり、下古電気で旧会長派と現社長派の対立はあったよ。しかしそれは何処の会社でも多かれ少なかれあること」

確かに彼の言うとおりだ、俺も最初は一企業のありきたりなもめ事と高をくくっていた。その結果が今の自分の姿。
「そこで君から預かったフロッピーを本庁に出かけて、ネット犯罪担当者に見て貰ったのさ、この出所には信憑性があると言われたよ。で、その日の夜帰ろうとする浅田さんに、このことを報告した」
若い刑事はうなだれた黒岩に目をやりながら話し続ける。
「君のいった事が事実の可能性も出てきたのだから、捜査すべきじゃないかとね。だが浅田さんは半人前のお前が、一人で勝手に捜査してたのかと反対に怒られて取り上げてもらえなかったよ」
彼の顔に悔しさを表す皺が寄った。
「どうにも割り切れなくてな。ところで、昨日の夕方、君、浅田さんに電話しなかったか？」
ダイエーの長椅子から電話をしたときだ。
「取り次いだ職員が浅田さんの話しを小耳に聞いて、あれは昨日の昼間署内であばれた青年、つまり君からの電話じゃないかと夜勤に出てきた俺に話してくれた。そこで入れ替わりに帰宅しようとする浅田さんに彼から電話があったんですか？と訪ねたんだ。そしたら『うるさい、まだそんな事に気を取られているのかと』といわれてね。どうもその時の様子がおかしかったんだ。何か隠しているようでね。浅田さんが帰った後で知ったんだが、君が電話をよこす少し前、海上保安庁を通して関東近県の所轄に報告があったらしいんだ。沖合の定置網に腹部を切り裂かれた男性の水死体が発見されたというものだ。君が話していた寺田という男性が殺害された方法に当てはまるだろ。この報告を聞いて、浅田さんが私に何も言わなかったのか不思議でならなかった」
これであの電話の時、浅田の対応が違ったのか漸くわかった。彼はこの事件が作り話ではないんじゃないかという疑いを持ち始めたんだ。だから俺の話に自分か乗ってきたのだろう。冷たくなった浅田を見つめ彼の不快な声を思い出していた。
「そのこともあってもう一度浅田さんと話をしようと思ったんだ。けれど今日彼は非番でね、仕方なく夕方、自宅におじゃましたんだ。そうしたら奥さんが今し方、仕事だといって出かけたというだろ、ピンときたよ。行き先を聞いたら『港で張り込みがある』と言って出かけたらしい。思いだしたのは君の言っていたこの港、半信半疑でやってきたら銃声が聞こえたというわけさ」
彼の直感に救われた。
「ありがとう」
かすれる声で、瞼を閉じ礼を言った。
「礼を言われる事じゃない。君もこれで少しは警察を信用してくれよ、安い給料で文句言われながら命張って働いてるんだから」
若い刑事は同僚の死にそれほど悲観するでもなく、はにかみ笑顔を見せた。
気がつくと雲に見え隠れしていたはずの星達が、プラネタリウムのように空を占領していた。雲はどこかへいったようだ。
「これ」とポケットからＭＤを取り出し刑事に差し出した。
「なんだ？」
そう聞かれたような気がするがハッキリ憶えていない。ふうっと意識のスクリーンに絵が

映らなくなった。そして遠くにパトカーのサイレンの音が聞こえたのを最後に俺は気を失った。死んだのではないと思いたい。

白壁の個室に夕日が射し込み、クリーム色だった目隠し様のカーテンが鮮やかな黄金色に変わっていた。部屋の外では夕食を乗せた配膳車がガダガタと車輪を鳴らし通り過ぎ、
「お食事ですよ」
と年増の女性の声がした。点滴のフックにつり下げられた生理食塩水の入ったプラスチックボトルと、抗生剤のガラス瓶を俺は眺めていた。看護婦は時計を見つめ、何滴落とそうかと管の流量を調節する。傷口のガーゼは先ほど医者が自分で変えていった。処置を終え部屋を出ていこうとする看護婦、俺の本能が何とはなしに白衣に透ける下着のラインを探していた。あれから２日たっていたらしい。というのもあの事件の後、意識を失ったまま病院に運ばれ、手術を受け今日の昼まで昏睡状態でいたからだ。
担当の医者の話によると銃弾は右肺の多くを壊し、玉の破片が他の太い血管も傷つけていた。短時間ならと医者は警察に事情聴取を許可した。実際胸に痛みはあったがぼんやりとした意識も次第にハッキリし、この時間になるとようやく何が起こったのか整理がついてきた。看護婦と入れ替わりに２人の刑事が部屋に入ってきた。一人はあの若い刑事、もう一人は一度も見たことのない白髪交じりの老齢な刑事だった。
「武田祐二君だね、私は芝山、こっち若い方は前島、もう説明はいらないね」
彼は警察手帳を右手に持ち、かるく挨拶をした。若い刑事としか呼べなかった男の名が前島と知ると何かほっとした。
「この椅子借りるよ」
芝山は側にあったパイプ椅子を引きよせた。前島は腰掛けず、腕組みをしたまま壁により掛り先輩刑事の話を聞く。芝山の話によると黒岩と槌田が寺田殺しも素直に自供したらしい。というより現行犯逮捕の上、ＭＤに記録されていた内容を聞かされては、いくら辣腕の弁護士がついても手も足も出なかったというところが真実のようだった。
浅田刑事は殆ど即死の状態だった。今朝遺体が荼毘にふされ先ほど自宅に遺骨が帰ってきたらしい。芝山の口振りからすると、一人点数稼ぎばかりしていた彼を疎ましく思っていた刑事は多く､死んで当然とまでは言わないが仕事がやりやすくなったとも受け取れた。それを聞くとやはり浅田と組んでよかったのなとも思える。結果的に殺されはしたが彼の不自然な行動で前島に助けられた。これが初めから前島に言っていたら浅田が動いたかどうかは疑問だ。
その後、芝山に聞かれるままに全てを話した。頭の中の靄を追い払うようにここまでの経緯、下古電気のこと、富田洋子や寺田や百合の事など、自分自身の愚かな行為もうち明けた。これ以上胸の中に押し込めておく事に耐えられなかった。そんな気持ちを芝山刑事は察したのだろう。
「世の中には罪の意識もなく次から次へと犯行を繰り返す者がいる。しかしそれも初めはふとしたことなんだ、君のように一瞬心が淀んで犯罪に手をそめる。そして運良く成功してしまう不幸が重なりいつしか人間が変っていってしまう。しかし君は運良くつまづいたんだよ。犯罪者の道に行き止まりの札がたったのさ」
汚れた白壁にもたれて芝山の話を聞いていた前島がうなずく。

「前島さん、ありがとうございました」
頭をさげる俺をみて、前島は満足そうに目元を緩ませた。
「甘い夢など見ないでちゃんと働け、おまえの会社の社長、早く帰ってきてほしいっていってたぞ。多分あの上司が掛け合ってくれたんだろう」
こんな不祥事を起こしたにもかかわらず、そういってくれた社長や上司の顔が浮かんで目頭が熱くなる。
「いいか、こうやってお前を認めて必要としてくれる人もいる。それはお前が努力したからだろ、若いからどうだなんて言わせない生き方すればいい。俺が助けたその命、精一杯自分のために使え、いいや約束しろ彼女の為にもな」
「おまえもだ」
芝山は前島の背中を軽くたたいた。
「がんばって、仕事します」
死の淵に立たされた自分が、今こうして明日を口に出来ることがうれしかった。そう思ったら一刻も早く百合に連絡したくなった。
「すいません、彼女に連絡したいので、俺の携帯かしてもらえませんか」
「私たちも彼女にも聞かなくてはならないことがあるからな」
前島は部屋の入り口の棚に載っていた携帯を俺に渡そうとして、老刑事にその手をとめられた。
「ここは病院だぞ、おまえ電話番号聞いて公衆電話でかけてきてやれ。俺もこの前入院したとき、娘より若い看護婦にこっぴどく怒られたよ」
老刑事は大きめのハンカチで首筋の汗を拭きながら、したり顔をした。前島は百合の携帯の番号と宿泊しているホテルの電話番号をメモリーから手帳に書き写し部屋を出ていった。しかしどうしたことかなかなか彼は戻ってこないかった。
　ようやく引き戸のドアが開き、前島が顔をのぞかせたとき、その表情は堅かった。
「どうしたんですか？」
「いや、何度かけても通じないんだよ」
「つながらない？圏外だけ何じゃないんですか」
「俺もそう思ってホテルに電話したんだ。そうしたらフロントのマネージャーがでて、君の言う女性が昨日、玄関脇でなにやらうちの署に電話していたらしいんだが、その後真っ青な顔してすぐチェックアウトしたと言っていた」
何か嫌な胸騒ぎがする。
「もしやと思って署に電話してみた。確かに昨日の夜、女性が訪ねてきて事件のこと聞いたらしい。運悪くその時ちょうど関係している刑事が捜査に出払っていて、よく知らない女性職員が対応したようでね。」
くちごもる前島の眉間にしわが寄る。
「だからどうしたんだ」
俺より先に芝山刑事がじれったいと言わんばかりに彼を促がした。
「実は亡くなったのは浅田刑事じゃなくて、君だと勘違いして伝えてしまったらしい。そうしたらその彼女、呼び止めるのも聞かずふらふらと署を出ていってしまったらしい」
俺は何もかまわず携帯の電源を入れた。そして百合の携帯をならした。２人もそれを止め

ようとはしなかった。呼び出し音が無情に鳴り続ける。いったん切ってマンションにかけてみた、やはりだれもでない。留守電にきりかわり俺の吹き込んだメッセージが聞こえた。（ピーと鳴ったら。。。）
「百合聞いているか、おい、俺だ。祐二だ聞いてたら返事しろ、生きているぞ、俺は生きてる。百合応えてくれよ、頼む。。」
しかしその電話に彼女が出ることはなく、設定通り２０秒で通話は切れた。プープーという音が小さなスピーカーから音がこぼれるばかり、やはり部屋にいないのか？もしやと思い留守電を聞いてみた。「お預かりした伝言は１０件です」
１０件。余りの多さに聞くのが怖い。しかし携帯が耳にくっついているのか、腕が硬直しているのか離れない。
「ユウ、今どこにいるの。。答えて」
その声の後ろに張りつめた空気の音がする。
「帰ってきて、あなた一人危険な事しないで、嫌だよ怖いよ、凄く怖い、私一人でここにいるなんて死ぬより怖い、電話して」
同じような内容だが口調は回数を重ねるたびにヒステリックに変化していった。そして昨日の夜１０時の伝言。
「バカ嫌だよ、嘘つき死んでいいなんて私言ってない、バカ、私を置いて行かないで、ユウが。。もう貴方しかいなかったのに私を抱いてくれる人、私にキスしてくれる人、もう誰もいなくなっちゃったじゃない」
かすかに電車の音がした。
　そして１０件目の伝言はそれまでの物とは全く違っていた。
「これからいくよ、待っててね」
例えて言うなら、洞窟の天井から染み出した一滴の滴がその真下の岩に落ちたような、静かでか細い音だった。百合が危ないと直感した。一人でいるのは死ぬのより怖いという言葉を裏返せば彼女がこれから何処に行こうとしているかはいうまでもなかった。１０件目の伝言は今日の正午頃、ようやく俺の意識が戻りかけている頃だった。
「前島さんお願いします、百合を探してください。あいつ死ぬつもりだ」
「探すったってな、何処探せばいいんだ、宛でもあるのか？」
前島の問いに、彼女の言葉を必死に思い出そうとした。確か？、ふとさっき聞こえた電車の音が頭の中で鳴った。あれは俺達の部屋に聞こえる私鉄の発車ベル。
「二人の暮らした部屋に戻りたい」
百合はそう言っていた。彼女はマンションにいる。しかしそれならさっきマンションにかけたときに電話に出ない？いるなら何故でない？その後を想像しないなんて不可能だった。俺はベッドから起きあがり、前島刑事のスーツの端を引き寄せた。
「俺達の部屋に連れて行ってください。百合が危ない、まだ間に合うかもしれない」
急に服をつかまれ驚いた前島刑事は、俺の手をふりほどき声をあらげた。
「おい無茶いうなよ。医者が許可するわけないだろ、俺が行って来るからおとなしく寝てろ」
老刑事も俺をベッドに押し戻そうとする。
「お願いです、あなた達も自分の奥さんや子供が死にそうなのに寝てなんかいられないで

しょ、今は自分の命より百合の方が大切なんだ。早く、こうしている時間にも」
暴れる俺を大人２人でも押さえきれず、芝山刑事はよろめいた。自分でいうのもなんだが、誰も俺を止めることなど出来なかっただろう。もしどうしても止めようとするならそいつを殺したってかまわないとさえ思った。前島の手をふりほどき、腕に刺されていた点滴の針を引き抜き右胸を押さえながら立ち上がった。針の抜けた腕から血が流れ出す。
「お願いです、行かせてください」
上着は病衣のまま、ズボンをはき俺は部屋のドアノブに手をかけた。
「待て、わかったから待て」
老刑事は仕方ないと前島刑事に看護婦を呼びにいかせた。医者と看護婦がバタバタとサンダルをならし駆け込んできた。医者は俺の肩を鷲掴みにし、事情は察するが自殺行為だと刑事達にもあきらめるよう言ってくれと促がした。芝山刑事は曇った顔でいきりたつ俺を眺め、
「今引き留めても、直ぐ抜け出して一人でも行くでしょう、実際私も彼なら・・」
芝山刑事はそういって医者に看護婦一人を同行させてくれるよう頼んだ。医者は納得しなかったが何かあっても責任はもてない、そのつもりなら行きなさいと怒って部屋を出ていった。しかしそうはいいながらも、看護婦に救急の支度をさせて俺達に同行させてくれた。わがままを言っているとは百もわかっていた。ナースルームの前で俺は頭を下げた。婦長と主任そしてさきほど点滴を取り替えた若い看護婦が心配そうにこちらを見てた。その奥で背を向けている担当医が壁に向かってどなった。
「馬鹿野郎、死ぬなよ」
「すいません」
そう言うと俺は前島に肩を抱かれた病棟をあとにした。

パトカーはサイレンをならして２４６を走り抜けた。芝山刑事は事前に、マンション近くの派出所に至急部屋に向かうよう指示し、少しでも早く事態の把握に勤めようとした。何か変化があるんじゃないかと警察無線に耳をそばだて、誰もが息を殺した。
マンションに着いたのは病院を出てから３０分後の午後７時。各部屋の窓には明かりが灯り、カーテンには子供の姿が影絵のように映り込む。俺は胸を押さえ階段の上り口に向かった。そこには派出所の自転車が止められてあり、サドルの上にはどこから登ったのか小さなカエルがじっとすわっていた。夕食時のサイレンに何事かと驚いた住民が次々に窓から顔をのぞかせる。ある者は部屋を飛び出してきた。階段の壁にピケッケルの様に爪を立て俺はよじ登った。確かに身体はだるかった。しかし不思議と胸の痛みを感じない。というより自分の身体ではないようなまるで雲の上を歩いているような気分だった。
５４段を登りきり５階の踊り場に着くと、制服の警官が管理人にドアの鍵を開けさせようとしていた。管理人はいくつもある鍵の束から、この部屋の物を探そうと眼鏡を外し、警官の照らすライトの明かりで鍵を確かめている。
俺は彼らを突き飛ばし、持っていた鍵を穴に差し込んだ。警官は憤慨し俺の襟をつかむ。追いついてきた前島刑事が警察手帳を見せてなだめた。警官もようやくその場の俺の状況を把握したのだろう、襟をつかんでいた手を放した。少し錆びかかったノブを回した。ギイという音ともに扉は口を開けた。

　部屋は暗く物音もしない。警官のライトが履き物を照らす、綺麗に履きそろえられたモスグリーンのパンプスがライトに浮かびあがる。これは彼女があの時ダイエーで買ったものだった。
「百合！！」
土足のまま部屋に上がり、灯りをつけたが彼女の姿はなかった。しかしあるはずのネコの縫いぐるみも見あたらない。浴室の方で前島の叫び声がした。玄関口の直ぐ横、洗面所と共用の小さなユニットバス、百合はそこにいた。真っ白な腕から真紅の血が浴槽いっぱいに流れ出し、青白い唇が微かに微笑んでた。
「ばかやろう」
彼女に駆け寄り抱きしめた。大事そうに黒猫のぬいぐるみ抱えて眠る横顔は幸せそうに見えた。
「おい起きろ」
返事が返ってこない。付き添ってきた看護婦が百合の首に手を当て、直ぐに目を伏せ首を振った。今の看護婦の素振りはなんだ？彼女が死んでいるとでもいうのか？そんなはずはない。
「看護婦さん、うそだろ、うそだよな、まだ身体暖かいんだぞ」
百合の小さな手を看護婦の頬に押し当てた。
「な、あったかいだろ、まだ生きてるって、たすかるって」
看護婦は百合の手を握りしめて自分の白衣の膝の上に置いた。そして顔を右下に逸らして
「浴槽のお湯が温かかったからね、でももう心臓は動いてないの」
とぽつりと言った。
「嘘だ、いい加減なこと言うな、死ぬわけけないだろ、いい加減なこと言うな」
百合を抱きかかえたまま、看護婦の袖を掴み激しく責め立て罵倒した。すると前島刑事は俺を看護婦から引き離した。
「武田、もう寄せ」
脇では芝山が既に手を合わせ目をつぶっていた。
「なあ看護婦なら助けてくれよ、さっきまで息していたはずなんだ、さっきまで、看護婦さん、頼むよ、百合を」
看護婦は顔をそらし涙をぬぐった。
「ごめんなさいね」
謝られたら俺はどうすればいい？百合の頬をさすりながら頭の中が真っ白になっていく。なにがどうなってんだ。物言わぬ百合の身体を抱きしめて揺さぶった。まだ暖かくていい匂いがした。
「百合、なあ起きてくれよ、なあ、俺が助かったのにおまえが死ぬなんておかしいだろ」
ここに来る間こんな事態を予想しなかったわけじゃない。でも現実を前にして気持ちが追いついていかない、あまりの衝撃に涙がでない。ただ狭い浴室に俺の悲鳴が共鳴し、何もかもわからなくなる。
「ばかやろう、おっちょこちょいが」
腕の中の百合に怒鳴りつけた。その時彼女の右手から何かが床に落ちた。あのぬいぐるみだった。

「こんなもの、俺だと思って一人で逝ったのかよ、俺ならここにいるぞ。ばかやろ、なんか言えよ、遅かったと怒れよ、はやく俺のこの胸、たたけよ」
浴槽の中の彼女の左手を掴み、自分の胸の傷口に押し当てた。手首の傷と俺の胸の傷の血が混ざり合う。前島刑事がぬいぐるみを拾い、肩をたたく。心臓が握りつぶされ、一気に涙が絞りおちてきた。幼子のような嗚咽が鼓動の代わりにリズムを刻む。
「さあ彼女を放しなさい」
強引に俺の腕を百合からふりほどこうとする。
「いやだ、放さない」
「子供みたいな事言うんじゃない。遺体を調べなくてはならないだろうから、いったん署に引き取るよ」
調べる？彼がなにを言っているのか、わからなかった。
「どうするんですか？まさか傷つけることしませんよね」
老刑事は白髪交じりの眉毛をかきながら声のトーンを一つ下げた。
「必要と判断されれば、メスをいれる事になるかもしれない」
信じられない、こんな風に安らかに眠る彼女の死になんの疑いがあるというのか。警察の手続きだからといって何故甘んじてそれを受け入れる義務があるといういんだ。いまもし、百合が口が利けたなら、俺にしがみついて言うだろう。
「恥ずかしい、もうこれ以上他人に肌見せて惨めな思いするのはいや」
俺には聞こえる。
「やめてください。彼女、きっといやがります。看護婦さん、あんたも女ならその気持ちわかるよね」
「そうね」
看護婦はその言葉のあと、絶句してしまった。
「なんでそっとしておいてくれない、ここは俺達の場所なんだ。ここで笑ったり、喧嘩したり、抱き合ったりしていたんだ、ここがいいに決まってる。何処にも行きたくないに決まってる、俺の女だぞ、二人にしてくれ、みんな出て行ってくれ」
自分の言っていることが支離滅裂なのはよくわかっている。しかし夕立のように思い出が心に降り注ぎ整理ができない。彼女の前髪がまつげにかかり、じゃまそうに見えた。そっと摘んで耳にかける。何故こんな事に、悔しさと情けなさが自分をさいなむ。誰に詫びたらいいのか、誰に怒りをぶつけたらいいのか、もう話しかける相手もいない。俺は発狂しそうだった。目も耳も感覚の全てを潰してしまいたい。誰か。なにもかもが痛くて堪らない。

遺体が警察からもどってきたのは翌日の午後だった。故郷から駆けつけた百合の母親が、彼女の死装束をしていた。芝山刑事の計らいで遺体が傷つくことなく、早めに（普通ならどれくらいかはわからないが）帰ってこれたのだと前島刑事が言っていた。しかし、それは百合の死が疑いようのない自殺だった事を意味した。誰かに殺されたのならよかったのにと、ふと思った。
なぜなら百合が孤独の中で一人死を迎えるより、一気に命を奪われたなら、悩むことも

なく彼女は逝けたのにと。いや違う、単に自分の責任を軽くして欲しかったのかもしれない。彼女が浴槽で長い時間何を考えていたのか、それを考えるのが耐えられぬほど辛い。
前島刑事はうなだれる俺を見た。
「ほらいつまでそうしているんだ。ここからは、君がしっかり彼女を見送ってやらないといけないんだ。親御さんに恥ずかしい姿を見せたら、百合さんだって悲しむぞ、男だろ」
そういうと前島刑事はおれ達４人を残し、部屋を出ていった。誰も何も言わない。父親は窪んだ目元に涙を溜め、愛おしむように頭をなでている。
　以前彼女から両親の話を聞いたことがあった。百合は一人っ子として石川県の能登で生まれた。父親は輪島塗の塗り師職人、口下手の恥ずかしがり屋で、酒より甘納豆が好物で、笑うと目の回りに一杯皺がよる純朴な人。母親は贅沢もせず着飾ることもなく、ただ父の彩色した漆器が好きな人。いつも父が作ってくれた輪島塗の裁縫箱をうれしそうに眺めながら、百合の服を仕立ててくれる優しい母。二人とも派手なことは何もないが、いつも笑顔の絶えない両親だと。
　目の前の２人にその時の彼女の言葉を重ね合わせて見る。しかし、最近そんな暮らしにも不況と伝統工芸離れの波が押し寄せ、結局２年前に塗り師を辞め、街の豆腐屋に勤めたと百合から聞いていた。しかし年を取ってからの再就職で生活を満たすだけの給与がもらえるはずもなく、百合は親元へ月１０万ほどの仕送りをかかさなかった。
「祐二さん」
「はい」
母親の少し丸まりかけ背中が俺に話しかけてきた。彼女は泣きもせず、自分の赤ん坊に服を着せるようにしながら
「あなたのこと、この子から何度も聞きましたよ、いい人と暮らしているって」
辛かった。俺にそんな風に言ってもらえる資格などない。
「すいません、こんな事になって。本当にすいません、どうぞ怒って下さい。叩いてください」
俺は背中に向かって額を床に擦り付けた。
「そんなことしたら、この子に怒られますよ。さあ頭をあげて、この子を見てやってください、私に似ず本当に綺麗な娘でしょ」
母親は座る位置を少しずらし、身支度を終えた娘を披露した。そこにはお気に入りの淡い白のワンピースを着て、ほんのり赤い口紅をひいた百合がいた。
「この子ね、地元の男の子にはもてたのよ、勉強も出来てね。私たちの住んでいるとこは古い家ばっかりで、若い人達の気を引くようなおもしろいものもなくてね、みんな都会に出ていくの。百合もどうしても東京に行くってきかなくて」
母親は窓の外の飛行機雲に目をやった。見ていられないと父親は立ち上がった。
「お父さん」
引き留めようとする母親。
「トイレだ」
「トイレならそこですよ」
「ばかもん」
そういって部屋を出ていった。

「ホントにおトイレかしらね？百合」
母親が百合に向かって微笑む。
「とうとう東京の大学に入って、そのまま就職してしまったの」
こんなに寂しい笑顔があるのかと母親を見ながら思った。
「でもね、この子私たちを心配してよく帰ってくるのよ。それならそのまま行かなきゃいいのにね、でねそのたびに女の私が驚くほど綺麗になってくの」
母親の言葉が止まった。ヒグラシがどこかで鳴いていた。
「でもなにか違うの、私が一番好きなこの子の優しさが反対に薄れていくような」
母親の目の先にあるのは飛行機雲ではなく、百合の過去から今なのだろう。母親は俺の方を振り返った。
「そんなこの子が私の百合に戻り始めたのは祐二さん、あなたに出会ってからよ」
この狭い空間で彼女と交わした言葉の一つ一つを思い起こしていた。
「警察の方から大体の事情は聞きました。あなたにも迷惑かけて申し訳ないと思っています。でもこの子も最期はあなたの元に返ったの。許してやってね」
「謝る事なんて」
かすかに声が震える。唇をかみしめる母親の気持ちを、他人の俺が想いやる事などできるはずもない。百合の横に座り直し、彼女の手と母親のしわがれた手を引き寄せ両手で握りしめた。
「お母さん、僕たちは馬鹿なことをしてたんです。最後に百合と話したとき、別れ際に彼女は言ってくれました、僕と幸せになりたいと。今思えば、僕も同じ気持ちだったのに言葉にしてあげられなかった。彼女は僕が死んだと思って命をたった、寂しがり屋だから、きっと向こうで僕を待っています。なのに僕がこうやって生きていていいのかわかりません」
母親の手のひらが俺の頬を鞭のようにたたいた。一瞬何が起きたのかわからず動けなくなった。さっきまで涙一つこぼさなかった母親の目から涙が溢れだした。
「あなたは百合のこと、ほんとに好きだったのかい？この子は早とちりであなたの後を追ったけれど、もし反対に百合がそうしたらあなた嬉しい？」
「・・・」
母親は俺の言葉も待たず、火のように俺を叱りつけた。
「あなた今泣いてるだろ、悲しいだろ、私だってホントは気が狂いそうなほどつらいよ。ならなんであなたが死んでこの子が喜ぶの。一番後悔しているのはこの子なんだよ、あんたはまだこの子を泣かせようという気かい」
返す言葉がなかった。やせ細った母親の身体からその何倍も大きな怒りが伝わってくる。叩かれた頬が熱い。
「ごめんなさい、痛かったかい」
「いいえ」
「この子は幸せだったの、どうかそれを一時の感傷で濁らせないで。あなたと過ごした時間はこの子にとってかけがえのないものなの。お願い、百合が本当に喜ぶことを考えて。そんな安っぽい気持ちでこの子の事を守っていたというなら百合は浮かばれないよ」
母親が両手で俺の頬を包み言い聞かせる。そうかも知れない、今一番後悔しているのは百

合なのに、感情に流されて楽な道を探そうとしていた。そしてそれを最も傷ついているはずの母親に諭されるなんて目の前の百合に恥ずかしい。母親の泣き声が百合の声に聞こえた。
「すいません、お母さんの言うとおりですよね」
きゃしゃな肩が小刻みに震え、ガーゼのハンカチで目頭をおさえている。
「この子ね、ひと月前に電話よこしてね。お母さん、子供育てるの大変？て突然聞くのよ」
「子供？」
「そう子供、多分あなたの子供が欲しくなったのね」
「・・・」
「あのね、男の人にはわからないでしょうけれど、出来てもいいかなと思うのと、この人の子供が欲しいと思うのは女にとって違うの。女がそう思うほど、男の人を好きになれるなんてほんとうはあまりないのよ。私はお父さんの赤ちゃんがとても欲しかった、そして百合が生まれたわ。だから大切な我が子が愛した人には、この子の分まで生きて、いい人生を送ってほしいの。もう私たち夫婦には何も残っていないの、私たちは長く生きるわけではないのよ。私たちがこの世を去ったら、誰が百合のことを憶えているの？祐二さん、あなたしかいないのよ。あなたの心の中に私たちの百合は生きているの。もしこうなったことに、少しでも責任を感じているなら、母親としてそして同じ女としていいますよ、この子のことを絶対に忘れないで。どんな人と家庭をもって幸せになろうとも、あなたという男性を、命まで懸けて愛した百合のこと、一生をまっとうするその一瞬まで忘れないで、それがせめてもの願い。お父さんはどう思うかわからないけれど私は貴方を息子だと思ってるは」
俺の中に百合は生きている、母親はそう言った。俺の人生と百合の人生が絡み合い、そして解け合って一つになった。今まで自分の人生は自分だけのものとしか考えなかった俺が、今、人の人生を引き継ぎ生きて行かなくてはならない。以前の自分なら重いと感じただろう。しかし、生きるという刹那からもう逃げることはしない、しっかりと受け止めよう。今にも目を覚ましそうな安らかな百合の顔をみつめながら俺は誓った。
「自分なりに生きてみます。彼女の想いに応えるように。約束します、絶対に忘れません」
横たわる百合を抱き起こし、胸の中にきつく押し込めた。母親はそれを見て何も言わずにその場から立ち去った。そして俺たち二人だけしかいなくなった。
「愛していた、そしてこれからも」
口紅の塗られたばかりの彼女の唇を俺は噛んだ。最後の口づけだった。

　小正月も終え、都会も本来の活気を取り戻し、新しい年を実感として受け入れはじめた一月の下旬。俺はいつものように仕事に通うため電車に乗っていた。あれから数ヶ月いろんな事があった。マンションは百合名義で借りていたから出ていかなくてはならず、といって入院中の身でそんなことができるわけもなく、仕方なく上司に引っ越しの一切合切を面倒みてもらい、もう少し都心に近いアパートに移り住んだ。家賃を抑えようと、古くても狭くてもいいからといって部屋を探してもらった。しかし話す相手のいない空間は寒く広く感じた。部屋だけではない、何もかもがゆっくりが流れているようで、こうやって通

勤ラッシュの車内にいても俺の周りだけ薄い膜が張られているような気がする。そんな膜の中で気がつけば百合の通夜の事を思い出している自分がいた。
　あの日俺と両親の三人だけでひっそりと祭壇をかこんだ。百合の横領や自殺などという事情のためか訪れる人も数える程しかいなかった。百合の父親はそんな事情にも関らず、弔問に来てくれた友人に額を床に擦りつけ、礼を示した。そして何度も何度も
「ありがとう御座いました、ありがとう御座いました、すいません」
を繰り返した。弔問に訪れた人は誰もがそれを見て堪えきれず目頭を押さえた。親の存在、親の愛はこういうものなのだと感じた。夜遅くなり弔問客も絶えた時、母親は棺の前に小さなテーブルを置き、日本酒と簡単な煮物をそえた。俺は父親の杯に酒をついだ。父親は目を潤ませ、短い返事しか返さなかった。何時頃だったろうか、突然父親が百合の小さい時の写真を財布からとりだした。
「これ」
　そこには麦藁帽をかぶり、父親にだかれている４等身のぷくぷくした百合がいた。父親がカメラを指さして、百合の視線をレンズに向けようとしているのだが、手首に巻いたピンクのゴム飾りが気になっていたのだろう、写真には首を傾け、父親に何か言おうとしている百合が写っていた。それをじっと見つめながら父親はぽつりといった。
「可愛いかったんだ」
杯を持つ手が濡れていた。しかし、それ以上父親の口から言葉を聞くことはなかった。その日俺達は三人して川の字になって寝た。百合に一番近いところに父親そして母親、俺の順。夜が明けるのはあっという間で、皆、寝てなどいなかったと思う。朝、母親の作ったみそ汁をすすった、百合の味と同じだった。
　まもなく出棺の時刻となり、白のリムジンがマンションの前にやってきた。葬儀社が二人と父親、そして俺で棺を持ち、急な階段を何とか水平に保ちながら降りていった。数人の住人が炎天下の中、待っていてくれた。父親は棺を車にいれると一人一人に礼をいった。動き出す車、母親の手に持たれた遺影に直射日光が反射し鏡の様に光っていた。
　それから３時間後、百合はあっという間に灰になった。俺は両親の目をぬすみ、百合の右手の薬指の骨をかみ砕き胃の中に落とした、俺の中で生き続けてくれと願った。
「これで一緒ね」
母親は言った。見られていた。
「私も」
そういうと同じように右手の小指の骨を口に含んだ。

　あれから何度か取り調べのため警察へ呼ばれた。黒岩と槌田の関係や富田洋子の存在について洗いざらい話した。いまも黒岩達の取り調べは続いているようだ。大久保も警察に呼ばれたらしい。その際、富田洋子についての真実を聞かされた大久保は、その後すぐさま彼女をあのマンションから追い出したそうだ。もう彼女を必要とする人間はいなかった。子供を抱えてこれから先どうやって生きていくのだろう。そんなことを考えているうちに、電車はホームに滑り込んだ。あれから下古電気の担当をはずされた。当然といえば当然だが、社長は身体を休めろと比較的楽な、複合ビルの警備室の担当に配置転換してくれた。

なんで清掃員の俺が警備員？と思うかも知れないが、警備業と清掃業を兼ねているのはこの業界では珍しいことではない。むしろそれが出来なければビルの清掃管理を任せてもらえないという事が多い。

駅を出てから幹線道路を１キロほど歩き、そこから左に折れ、道一本はずれた裏道を通り抜けると警備する建物に着く。４０あまりの事務所が入居しているこのビルは親会社の不動産屋から長年まかされている物件だった。以前は名のある会社の分室が多数あったらしいが、経費削減でその多くが空室となり、賃貸料を下げざるをえず、その結果、怪しげな企業が多く入居するようになった。親会社も当初は警備業務を廃止しようとしたが、実際はそういう会社ほど不審な人物の出入りをきらう。もうこれ以上賃貸料は下げなくともいいから、警備をしっかりしてほしい。もし警備監視がなくなるならこのビルを出るという事務所が多かった。親会社も背に腹はかえられず警備を継続していた。

玄関での受付業務と三時間毎との巡回、さらにビル内要所要所に設置されているモニターの監視。確かに人が眠る時間に眠れないという辛さはあったがそれも一日おきだ。人間とはよくした物でそれはそれなりに体が順応しもう慣れてしまった。

「ご苦労様です」

挨拶をし警備室に入ると夜勤明け警備員が２人、ストーブでスルメを焼きお茶を飲んでいた。

「おはようさん」

「おはよう」

一人は５７歳、名前は清野。一昨年、前の会社を早期退職制度を利用し退職したものの、元来働き者なのだろう家にいても手持ちぶさたで、去年の春、この会社に入ってきた新人だ。孫娘の大學入学の足しにでもなればと再就職を決めたらしい。もう一人は４５歳、名前は梅垣。頭が簾状に禿げ、白髪が混じっていた。顔の色つやがとてもよく、若いのか年寄りなのかわからない。彼は昨年４０にして×２の女性と結婚（彼は初婚）した。今はその奥さんの尻に敷かれている。しかし文句など何一つ言わない。長年独り身だったせいか、毎日奥さんと出来ることがうれしくてたまらないらしい。昨日はどうだった、あの体位は腰にくるとか、同性でも顔の赤くなるような事をいつも聞かされていた。

一通りの申し送りと警備内容の確認を行うと梅垣はそそくさと帰宅した。（スケベ親父）後には清野と自分が残った。本来なら清野も帰るはずなのだが、俺とペアで日勤を行う予定の芦田という男が風邪を引いて、どうにも出られそうにないと電話が入ったらしい。清野が会社に応援を要請したところ、今日は晴海の展示場に多くの警備員がつぎ込まれてネコの手も借りたいから応援が出せない。夜勤者の一人に延長勤務をしてほしいと言われたらしい。梅垣は帰りたくて（したくてと言い換えた方が正しい）仕方がない、清野は別に用もないからと自ら日勤を受けたという。

俺は清野にソファーで休むようにいい、一人受付業務とモノクロのモニターを監視した。そのうち清野はいびきをかきはじめた。実際のところ、梅垣が残るより清野が残ってくれた方が俺はうれしかった。彼は彼の孫とさして変わらない年齢の俺に気兼ねなく接してくれた。そしてなかなか茶目っ気があり、いつも笑えないジョークで困らせてくれた。次第に轟音と化すいびき、小さく流していたラジオが聞こえづらくなった。たまりかねイタズラのつもりで鼻をつまんでみる。彼の呼吸が止まった。空気が固まったようだった。しか

し暫くするとまたカッカッカと小刻みにエンジンのセルモーターがかかり始めた。まもなく雷が落ち、前にもまして激しいイビキが始まった。清野さんの奥さん大変だろうな、などと苦笑しながら、あきらめてインスタントコーヒーをすする。

こんな所を警備の責任者に見られたら、これで警備かと怒られるのだろう。しかし臨機応変に立ち回らないと施設警備がうまく機能しないのも事実。彼の年齢からしてまる１日の勤務は実際無茶だった。それを承知で押しつけた警備責任者（３３才の嫌な奴）にも責任はある。そんな気持ちから清野のすべき勤務も適当にかわってやった。

午後６時、今日３回目の見回りの時間。今度は自分が行くと清野さんが言い出した。しかしそれをやんわりと断り部屋をでた。実際のところ普段掃除であちらこちら飛び回ていた自分にとって、警備室に長時間座っているのは苦痛以外のなにものでもない。巡視計画に定められたとおり、最上階から見回りを始めた。まずはエレベータに乗り込む。この時間帯、普通の会社ならエレベーターは残業を嫌がるＯＬで込み合っているはず。しかしここに入居している会社の多くはそんな時間の区切りはない。

途中で扉が開くこともなく最上階についた。重い鉄の扉を開け、屋上に出た。このビルは裏通りにあるとはいえ比較的見晴らしの良い場所に位置していた。ステンレスの手摺りに寄りかかり深呼吸をした。暮れなずむ街並み、目覚め始めた都会。煙草好きならここで一服なのだろう。椅子にかけっぱなしで固まった腰をストレッチしながら雲を眺めた。

「明日は晴れだな」

にわか予報士になる。そう言えば明日は丸一日仕事がなかった。

「久しぶりに蒲団でも干すか」

などと考えながら屋内へ戻る。そして非常階段を下り始じめた。各階に着くと右回りに通路を巡視した。

腰の警戒棒に手を添え死角に視線を散らす。ポイント毎に設置されている監視カメラに向かい、異常がないことを手で清野に合図した。もちろん無線機も携帯しているのだが、モニターを見ている彼が、俺の澄ました顔をみると無線でその都度ちゃかすので、三度目になるとそれに反応するのにも疲れ、ただカメラに合図するだけになっていた。

１０階から９階に下り、二つ目の監視カメラの前を通り過ぎようとしたとき、無線から清野の慌てた声が聞こえてきた。最初は何を言っているのかわからなかった。また冗談かと問い直す。

［バカ、ホントだ、５階で女がナイフをも持って暴れている、直ぐに行ってくれ。アダルトビデオの制作会社だ」

そういうと彼の通話は切れた。ただ事ではないと特殊警戒棒を腰から引き抜き階段を駆け下りた。

非常階段と通路の内を隔てている扉を開けた。通路に女の興奮した叫び声が響いていた。何事が起こったのかと事務所の入り口を野次馬が遠巻きにのぞき込んでいる。危険だからとその人達に部屋にもどるように指示し、その事務所に飛び込んだ。髪を振り乱した中年の女が女子社員の首にナイフを突きつけわめいていた。

「私を騙したね、２００万くれるって言うから、何人もの男を相手にしたんだよ。あんたらの望むことは全てやったろ。普通しないようなことまで私にさせといて、たった２０万かい」

女の声に聞き覚えがあった。涙声でかすれてはいたが、女が富田洋子だということは直ぐにわかった。
「ばあさん、２００万だあ？契約書見ろ。一回の撮影で２０万と書いてあるだけで、どこにそんな金額書いてある？」
男性社員は契約書を富田洋子のまえに突きつけた。洋子はその契約書を人質にしている女性に取らせ、ほんの少し見ると破り捨てた。
「あんたら面接の時、ここで言ったじゃないか、１回２０万、１０回やれば２００万になると。だからこの２週間毎日あんたらにつれ回されて何回したよ？どれほど遊んだよ、そうだろあんた達見てただろ、あんたも、あんたもあんたも、私のここに入れたじゃないか」
男性社員は笑って答えた。
「だから言っただろ、１回の撮影でと。おまえのビデオはあれで一本なんだよ、あれで契約書の１回なんだ。文句があるなら弁護士でも呼んでこい」
洋子の目に涙がにじんでいる。
「あんたら撮影の時、そんなこと言ってなかったじゃないか、とにかく金がいるんだよ金が。子供の命がかかってるんだ」
怒りと悲しさが入り交じり、食いしばった歯からギリギリと音がしそうだった。人質の女性は男性社員に挑発しないで、というように頭を横に振る。しかし調子に乗った男性社員はさらに続ける。
「ばばあ、あんたな、自分の身体を鏡で見たことあるのかい。そんな崩れた胸と尻、真っ黒なそこ、街で立ちんぼしてても犬も近寄よらねえよ。２０万もらっただけでも感謝しな。２週間働いてそんなに稼げるなんて、まともな仕事じゃあ無いよ。さあ早く金持ってとっとと出てけ。おまえみたいな婆あ毎日見て、下痢気味なんだよ」
社員の言うことも全て間違っているとは思わないが、今言うべきではなかった。洋子の抑えていた感情は一気に爆発した。ナイフの刃先は女性の首筋の皮膚を、まるでチャックでも開けるように綺麗に右から左に切り裂いた。鮮血が男性社員の顔に吹き出す。脅しだろうとタカをくくっていた社員は返り血を浴び凍りつく。事務所の外で見ていた他の事務所の女性が悲鳴をあげた。
「洋子さん」
俺は名を呼んだ。彼女の瞳は痙攣したように、激しく左右に動き周辺を見回す。そして警備員服姿の俺に気づいた。
「何であんたが」
驚いた様子の彼女はさらに動揺を深めいった。
「もうやめな」
「うるさい、どこまで私の邪魔したら気が済むんだ。お前のせいで大久保にばれて、無一文で追い出されたんだ。お前さえいなければ今頃黒岩に大金貰ってたんだよ。そしたらなんの心配もせずに一生暮らせたんだ。なのに余計な事してくれたばっかり」
血の付いたナイフを目の前の男性社員に突きつけたまま明らかに即死した女を足で払いのけた。
「だから仕方なく、こうやってみせもんになって稼ぐしかなくなったんだよ」
洋子は瞬きもせず、目を見開いたまま吐き捨てた。

「洋子さん、俺は黒岩に殺されかかったし、寺田も彼にやられた、聞いただろ警察に」
「そんなこと私の知った事じゃないよ」
洋子は側で動けなくなっていたもう一人の女性の腕を掴んだ。
「あんただって遅かれ早かれ殺されるとこだったんだ」
「でたらめ言うんじゃない」
出口に向おうとしていた。逃げるのか、野次馬の群が洋子の進む方へ自然と道をあけていた。
「嘘じゃない、こんなことしてなんになる。早くナイフを渡して」
俺は警棒をしまい、両手でナイフを受け取る仕草をした。
「お前の言うことなんか信じないよ、ここにいる奴らの言うことも信じない、男の言うことなんかもう信じない。みんなあたしを踏みつけにして遊んで捨てていく。ただ子供と暮らしたかっただけだったのに。あぁぁ生まれてこなけりゃよかったよ」
後ずさりする彼女、その背中のエレベーターが開いた。乗っていたのは清野だった。彼は洋子の服についた血糊と手に持ったナイフから今起きた事を知り、思わず声をあげた。それに気づいた洋子は後ろを振り返り、エレベーターに飛び乗り清野を追い出した。誰も手出しが出来ぬままドアは閉まった。
　俺はエレベーターが上階を目指していることを確認すると、清野と手分けしワンフロアー毎交互にエレベーターを追いかけた。しかし止まらない。もしかしたら屋上に？死ぬ気か？階段の途中で息切れしている清野を押しのけ二段抜きで階段を駆け上がる。胸がすこし痛む。汗がこぼれる。ようやく最上階にたどりつくと、屋上に出る扉が半開きになっていた。ゆっくりそれを押し開け外に出た。ついさっき見た夕焼けはもうなかった。夜が煙幕のようにあたりを包み、ネオンの光がステンレスの反射していた。
「ひぃ、助けて」
屋上の角でかすかに女の声がした。目を凝らし声のする方へ歩み寄る。
「こないで、きたらこの女も殺すよ」
洋子の声。二つの人影がみえた。
「洋子さん、やめよ、これ以上罪を犯したら、一生子供に会えなくなる」
「もういい、やめてその話は。あたしは疲れたよ、いくら男に利用されても子供のためにと思ってずっと我慢してきた。でもいいことなんてなかった。もうやだよ、あの子が憎い、子供なんてやっぱり産むんじゃなかった。もう生きていてもしょうがない、ちょうどいいのさ」
次第に瞳孔が開き、暗がりでも洋子の顔が見えるようになった。ライトで照らした。
鬼のような形相の富田洋子がいた。女を殺ったとき顔についた血を拭ったのだろう、唇は血の口紅で赤く染まっていた。俺はそれを見たとき思った。なんでこの女一人助けてやれる男がこの世にいなかったのだろう。百合を守れなかった俺が言えた資格はないが、それほど悲惨だった。
「今度の事で俺も恋人を死なせてしまった。あんただけが悲しんじゃない」
その言葉に洋子は人質に突きつけていたナイフを持つ手をおろした。人質の女性はこの時とばかりに洋子の元から逃げ出した。
「じゃあどうしたいいのさ、もう今のままじゃ生きいけない・・・助けてょ」

泣きじゃくる洋子の側に寄り、肩をたたいてナイフを取りあげようとした。その時、左胸に熱いものを感じた、そう港で槌田に打たれたときより遙かに熱くて激しい痛み。俺の心臓は彼女の手に持たれたナイフでえぐられていた。
「あたしに説教なんて死んでからしなよ、さあ苦しみな、だけどあんた独りを女の所にいかせやしないよ、地獄まで道ずれにしてやる。一人で死ぬのは寂しいからね、死んでもあんたの首に鎖つけてやる」
そういうと胸からナイフを抜き取り、自分の胸に突き刺した。全て終わった。
　俺が百合の所へいけるかどうかはわからない。ただハッキリしているのは俺のために泣いてくれる恋人はこの世にいないということだけ。薄れていく意識の中で、目の前に小さな虫が飛んでいるのが見えた。やっぱり俺も都会の火に焼かれて墜ちた一匹の虫だった。
百合、迎えに来ておくれ。